



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	十九世紀末のセデック語資料『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』：百余年後の言語学的考察
Author(s)	落合, いずみ
Issue Date	2020-11-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/79811
Type	research report
File Information	On a Seediq glossary recorded in 1898.pdf



十九世紀末のセデック語資料『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』 —百余年後の言語学的考察—

On a Seediq glossary recorded in 1898: Linguistic investigation after one hundred years and more

落合いずみ

十九世紀末のセデック語資料『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』

— 一百余年後の言語学的考察 —*

On a Seediq glossary recorded in 1898: Linguistic investigation after one hundred years and more

落合いずみ

Izumi Ochiai

This paper concerns ‘A glossary of Horisha-Atayal’ a manuscript written by a Japanese officer Arai Eima in 1898, which is after three years of Japanese colonization. The language Horisha-Atayal coincides with the Paran dialect of Seediq. In the preface of his glossary, Arai explained that the language data was provided by a Sinicized Formosan man stationed in Puli governmental office as an interpreter of Seediq. This preface suggested that the informant’s mother was of Seediq origin, and his father was Pazih origin. This glossary is one of the earliest document of Paran Seediq. It also contains more than 500 vocabularies which was considerably larger than the other glossaries at the same age. The aim of this paper is to present Arai’s glossary with annotation by modern Paran Seediq and to compare the Paran Seediq in two different times from grammatical viewpoints (phonology, morphology, lexicon, and syntax). In his writing, Arai used some diacritical marks on vowels. It turned out that he used these marks to indicate the position of the stress and the difference of the vowel quality. As the analysis of the glossary showed, the informant’s Seediq was mostly accurate on the word-level but it was less accurate on the phrase/clause-level. It also became clear that the glossary mistakenly contained some words from Truku Seediq, Atayal, Pazih and Southern-Hokkien. Arai’s glossary was wrongly cited by Naoyoshi Ogawa in his *A Comparative Vocabulary of Formosan Languages*. This vocabulary book contains Seediq data provided by ‘Arai’. This paper identifies the data ‘Arai’ with Arai’s glossary by extracting and listing their overlapping items. The comparison of the two datasets made it clear that Ogawa added some modifications to Arai’s writing probably based on his own knowledge of Seediq. One of the modifications was to delete Arai’s diacritical marks on the vowels, which was counterproductive since some vowels became indistinguishable.

キーワード: 台湾オーストロネシア諸語 セデック語 アタヤル語 パゼツヘ語 語彙集

Keywords: Formosan languages, Seediq, Atayal, Pazih, glossary

* 本稿は2016年3月21日に言語記述研究会第70回例会（京都大学）において行った発表を基に発展させたものである。本例会に参加されていた方々には、荒尾（1898）の草稿中の項目における注釈の判読にご協力いただいた。例えば、吉岡乾氏の機軸により草稿の項目395にある果物名「いくり（郁李）」を判読することができた。千田俊太郎氏にも判読にご協力いただき、有益な助言もをいただくことができた。荒尾による端書の判読に当たっては、平子達也氏を始めとした日本語を専門にされる方々の協力を得ることができた。月田尚美氏には本稿全般に渡り、さらに特にセデック語トゥルク方言の視点からも多くのご指摘をいただいた。また草稿の段階の本稿をお読みいただき、改善のためのアドバイスをいただいた方々など本稿に関わったすべての方に感謝申し上げる。ただし本稿の不備は筆者のみに責任がある。なお本稿は北海道大学アイヌ・先住民研究センターにおけるアイヌ・先住民言語アーカイヴプロジェクト（代表：丹菊逸治・北原モコツウナシ）にご賛助いただき発行に至ったものである。

目次

1. はじめに	4
2 現代セデック語・パラン方言の文法概略	8
3 『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』と現代セデック語・パラン方言	11
3.1 方針	11
3.2 端書	12
3.3 語彙集	13
4. 母音	44
4.1 現代パラン方言における a	45
4.1.1 語末音節	45
4.1.2 次末音節	46
4.2 現代パラン方言における i	48
4.2.1 語末音節	48
4.2.2 次末音節	49
4.3 現代パラン方言における u	51
4.3.1 語末音節	51
4.3.2 次末音節	53
4.4 現代パラン方言における e	55
4.4.1 語末音節	55
4.4.2 次末音節	55
4.5 現代パラン方言における o	58
4.5.1 語末音節	58
4.5.2 次末音節	58
4.6 現代パラン方言における uy	59
4.7 現代パラン方言の母音と荒尾の表記の対応のまとめ	59
4.8 荒尾の表記に見られる前次末音節母音について	61
4.8.1 母音から始まる場合：音韻規則の未適用	61
4.8.2 子音から始まる場合：歴史的な音素の保存	61
5. 子音	65
5.1 現代パラン方言の y	65
5.1 現代パラン方言の w	67
5.3 現代パラン方言の p	68
5.4 現代パラン方言の b	69
5.5 現代パラン方言の t	70
5.6 現代パラン方言の c	72

5.7 現代パラン方言の d.....	73
5.8 現代パラン方言の k.....	75
5.9 現代パラン方言の g.....	77
5.10 現代パラン方言の q.....	78
5.11 現代パラン方言の s.....	80
5.12 現代パラン方言の x.....	81
5.13 現代パラン方言の h.....	83
5.14 現代パラン方言の r.....	85
5.15 現代パラン方言の l.....	87
5.16 現代パラン方言の m.....	89
5.17 現代パラン方言の n.....	91
5.18 現代パラン方言の ŋ.....	94
5.19 現代パラン方言の子音と荒尾の表記の対応.....	96
6. 語彙的考察.....	97
6.1 セデック語トゥルク方言の混入.....	97
6.2 アタヤル語の混入.....	98
6.3 パゼツヘ語の混入.....	99
6.4 閩南語の混入.....	100
6.5 語頭・語中における分節音の無表記.....	100
6.6 現代パラン方言では廃れた指示詞.....	101
6.7 細分化された語彙の未使用.....	102
7. 形態的考察.....	104
7.1 非動作主態の形態の違い.....	104
7.2 命令形の違い.....	104
7.3 否定辞後の形式の違い.....	106
7.4 時制の違い.....	106
7.5 動詞連続における後部動詞の形式の違い.....	107
7.6 代名詞の形態の違い.....	107
8. 意味的考察.....	111
8.1 二人称と三人称の用法の違い.....	111
8.2 疑問詞「いつ」の用法の違い.....	112
8.3 否定辞の用法の違い.....	113
8.4 指示詞の用法の違い.....	113
8.5 egu の用法の違い.....	115
8.6 kuxun の用法の違い.....	115
9. 統語的考察.....	116

9.1 修飾関係の語順の違い	116
9.2 主語の語順の違い	118
9.3 疑問詞の語順の違い	120
9.4 時を表す表現の語順の違い	120
9.5 数詞・数量詞の語順の違い	121
10. 『臺灣蕃語蒐録』の「23a (荒井)」と『埔里社撫墾署管轄北番語集』	123
10.1 小川と荒尾の対照表	124
10.2 セデック語・バラン方言以外の語彙を挙げた項目の一致	133
10.3 小川が加えた「23a 荒井」への変更	134
11. おわりに	136
参考文献	137

1. はじめに

三尾 (2009: 167) には、日本統治時代 (1895–1945) の台湾において、台湾原住民諸語 (台湾オーストロネシア諸語) を編纂する調査研究が計画されたことが記されている。これらの言語採集に際しての模範となったのが「蕃語編纂方針」という冊子だったと言う¹。そしてこの方針をもとにいくつかの言語の語彙集が作られた。その中のひとつが、台湾大学図書館に現存する荒尾 (1898) という文献、すなわち『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』だと述べている。

筆者は 2015 年 9 月に台湾大学図書館の特別所蔵区を訪れた。そこに保管されている伊能文庫 (伊能嘉矩氏による執筆作品および収集資料を収蔵) に興味があったためである。伊能文庫のおびただしい資料の中から、背表紙に『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』と印字された書物を偶然に手に取ってみたところ、この資料がセデック語・バラン方言 (オーストロネシア語族・アタヤル語群) を記録したものであることに気がついた次第である。

『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』荒尾 (1898) にまつわる背景を簡単に説明する。「埔里社」とは台湾中央に位置する地名である。「社」という名称は、台湾先住民の集落に当てられる。これに対し漢民族の集落は「庄」という字を用いる。19 世紀末の埔里社は、台湾西部から移住した平埔族 (バゼツヘ族、バブザ族、タオカス族、パポラ族、ホアニア族) が暮らす集落群であった。撫墾署とは、台湾が清朝の統治を受けていた時代に設けられた管理局である。この制度は、日本統治時代 (1895 年から 1945 年) の初期まで引き継がれた。現在の行政区画では埔里鎮と言う。以下では地名として埔里を用いる。

台湾の地理的中心部とされる埔里は盆地である。周囲を山で囲まれ、近辺の山々には山間部の先住民民族が控え、北はアタヤル族 (アタヤル語群)、東はセデック族 (アタヤル語群)、南はブヌン族、サオ族の勢力範囲である。アタヤル族とセデック族はこの時代、共に「北蕃」 (台湾北部の先住民民族) と呼ばれた。北蕃 (アタヤル族・セデック族) の勢力範囲は図 1 において影をつけた部分に当たる³。

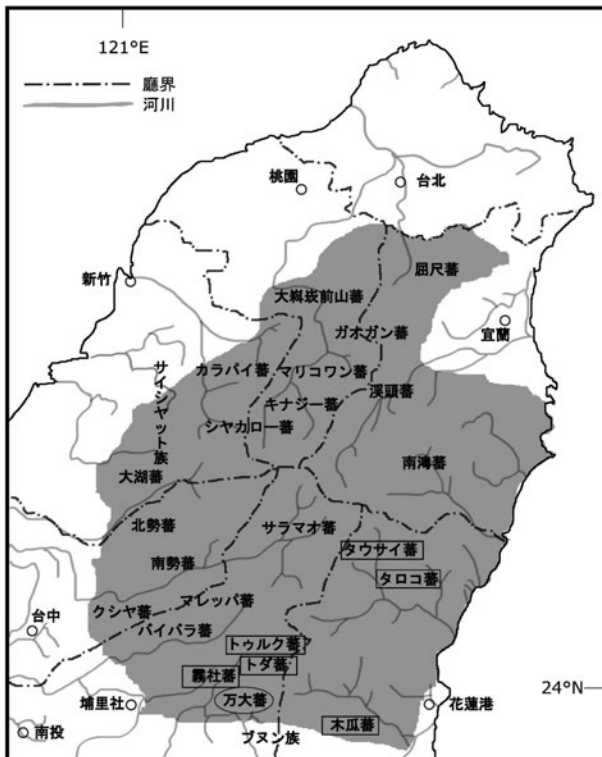
¹ 本冊子の書誌詳細については三尾 (2009) を参照されたい。

² 「蕃」とは、漢民族が台湾先住民民族に対して用いる名称 (蔑称) である。

³ この図は森 (1917) を参照し著者が作成した。

四角で囲った6つの集落がセデック族に属する。それ以外はアタヤル族の集落である。

図1 20世紀初頭のアタル族・セデック族集落分



セデック語はオーストロネシア語族アタール語群に属する。アタール語群はアタール語とセデック語の2言語を含み、両者は諸方言に分かれる。セデック語は、バラン方言とトダ・トゥルク方言群の2方言群に分かれ、後者はさらに、トダ方言（タウサイ方言は同じ方言に属す）、トゥルク方言（タロコ方言は同じ方言に属す）に分歧し、両方言はそれぞれ別個に集落をなしている（小川・浅井 1935）。

本資料に現れる集落名は、埴里社の東に位置し、中央山脈の西に位置する3つのセデック集落（霧社蕃・トダ蕃・トゥルク蕃）である。ただし本資料においてトダ蕃はタウツア蕃、トゥルク蕃はトロク蕃と記されている。もう一つ登場する地名が、霧社蕃の南に位置するアタヤル集落、万大蕃である。

本資料の端書において、霧社蕃の言語と万大蕃の言語を「大同小異と見て可ならん」と述べられている(3.2節)。確かにどちらもアタヤル語族に属する言語だが、前者はセデック語、後者はアタヤル

語であり、両言語間での意思疎通は困難であったと考えられる。図1からわかるように、アタヤル集落はセデック集落の北側に位置するが、万大蕃（図では楕円で囲んでいる）だけ例外的に、セデック集落の霧社蕃の南に位置する。そのため当初、セデック族の一派と見なされていたようである。しかし鳥居（1901a）は万大社の言語が霧社系の言語ではないことを、語彙の比較により示している。

『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』の端書では、埔里社撫墾署の管轄下にあった霧社蕃の北蕃語であると特定していることから、これが現代で言うところのセデック語・パラン方言であることがわかる。「霧社」は埔里から眉溪という河を東に遡った山奥の地名であり、セデック族・パラン支族の勢力範囲の中心地であった。セデック族でのこの地の呼び名は *Paran*（パラン）である。

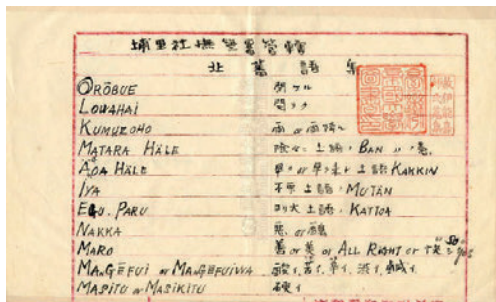
『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』の筆者は荒尾英馬という人物である。三尾（2009: 155）によると、「蕃語編纂方針」の下で言語調査を行ったのは当地の警察官や官吏であったというから、恐らく荒尾もそうであったと想像される。荒尾が本手稿中の「端書」に記した日付は明治31年（西暦1898年）5月である。そしてこの手稿の執筆直後だと思われるが、荒尾は明治31年5月31日付けで台湾南部に位置する淡水税関の職員となったことが「國史館臺灣文獻館」における資料「淡水安平打狗税関任免報告書」に見て取れる⁴。ただしこの職以前の足取りは掴めず、どのような経緯で埔里へ赴き、セデック語を調査することになったのかは不明である。

荒尾は本資料の端書において、この語集を執筆した経緯について語っている（3.2節）。この端書をもとに筆者が推察する本資料の背景を述べると以下になる。恐らく、山地先住民の言語を採求するという政策上の命を受けて、埔里に來た荒尾だが、日本統治から日の浅い頃のことであり、山地先住民集落の霧社に入るのは極めて危険であった。セデック族には首狩の風習あり、見知らぬ人が勢力範囲に入入ことを拒んできた。そのため、荒尾は埔里にとどまり、まずは漢民族のもとで閩南語を学んだ後、セデック語・アタヤル語と閩南語の通訳をしている、埔里在住の平埔族の青年からセデック語・パラン方言の語彙を収集したという。この青年の名は李阿輝といい、父が平埔族、母が山地先住民だったという。恐らく、李の父はバゼツヘ族、母は、セデック族・パラン支族（霧社蕃）だったと推察される。埔里にはいくつかの平埔族集落があったが、その中でもセデック族・パラン支族の勢力範囲に最も近い集落はバゼツヘ族が築いた集落である。また、伊能（1996: 198）の翻訳者の楊南郡による脚注にはセデック族（恐らく万大蕃のアタヤル族も含む）の女性がバゼツヘ族へ嫁ぐことがしばしばあったという記述が見える。さらに李から収集した語彙の中には数語、バゼツヘ語の単語が混入している（6.3節）。

⁴ この資料は「國史館臺灣文獻館館藏史料查詢系統」で閲覧可能である（ds3.th.gov.tw/ds3/index.php、所蔵番号00000261057 スキャン番号0240）。因みに荒尾が高知県の出身であることもこのデータベースから知れた。

⁵ この図の出典は「臺灣大学深化臺灣研究核心典藏數位計畫」（dtrap.lib.ntu.edu.tw）である。本資料の全文が公開されているとの情報を伊能文庫編集査定員よりご教示いただいた。

図2 『埔里社撫慰署管轄北蕃語集』4枚目⁵



次に『埔里社撫慰署管轄北蕃語集』の体裁について簡単に紹介する(図2)。本手稿は1898年に記したことが端書の日付からわかる。また、縦書き用の原稿用紙に記され原稿用紙の中央に、「臺灣總督府民政局」と公的機関の印がある。中央から右、左両方に13行ある。この左右をそれぞれ1頁(枚)と数えている。まず、題目から始まる。原稿用紙1枚の右ページに、筆での筆跡で『埔里社撫慰署管轄北蕃語集』とある。次の用紙は、端書である。左右の2頁を用いている。そして、4枚目の用紙右側からが語集の内容になる。第3頁目、第1行目には「埔里社撫慰署管轄」、第2行目には「北蕃語集」と記し、第3行目から1語目が始まる。ここからは縦書きの用紙を回転させ、横向きにして記入している。1行1語(1句、1文)を収め、1行中にセデック語・パラン方言のローマ字表記と日本語の訳を載せている。二語以上の項目の場合、セデック語・ローマ字表記の上方には、赤でグロスがつけられていることがある。また時折、閩南語の訳も付している。荒尾が李との調査において、閩南語を用いていたことが窺える。荒尾は閩南語を土語(地元の言葉)と呼んでいる。本資料は総枚数46、総項目547である。また、荒尾の調査協力者の李阿輝は、埔里撫慰署の通事として、セデック語・パラン方言(霧社蕃・トダ蕃・トゥルク蕃)のみならず、セデック語・トダ方言、セデック語・トゥルク方言を話す人々とも関わっていたようである。また、霧社の南に位置する万大集落のアタヤル族の言語にも多少通じていたようで、本語集には、トダ方言、トゥルク方言、アタヤル語・万大方言などの語彙も少数収められている。

荒尾の手稿には『埔里社撫慰署管轄北蕃語集』という題目の横に「故伊能嘉矩氏蒐集」と「臺灣帝國大學圖書印」という2つの判が押されている。荒尾の手稿が日本統治時代(1895年から1945年)に台北帝國大學(現國立臺灣大學)に収められ、その際に押されたと考えられる。大学設立準備段階で「臺灣帝國大學」であった大学名は「臺北帝國大學」に改められ、1928年に創立となった(李2007: 50)が、判は何故か採用されなかった大学名「臺灣帝國大學」のままである。荒尾の手稿の所蔵者であった伊能氏は1925年に他界し、伊能氏の残した台湾関連の資料は伊能文庫として3年ほど後の1928年に移川子之藏氏によって大学に収められたということである(淵脇1938: 190)。恐らく、創立直前の大学準備期に収められたため「臺灣帝國大學」の印鑑が押されたのではないかと。

三尾(2009: 167)によると、本資料は「蕃語編纂方針」に基づいて作成されたものであるが、この方針によって作成された語彙集は5つのみである。このうちの2つはアタヤル語方言を扱ったものである。そのため語彙集が作られたのは、20数言語を数える台湾・オーストロネシア諸語のうち4言語

(アタル語、セデック語、ブヌン語、サアロア語)のみということになる。これら少数の言語資料の中に、荒尾(1898)のセデック語が含まれている。

本資料は三尾(2009: 167)に言及はあるものの、恐らくこれまで約120年間、ほとんど研究者の目に触れることなく保管されていたと想像される。三尾の他に荒尾を引用している文献として、小川(2006)が挙げられる。小川は様々な文献から語彙項目を収集し、独自の語彙対照表を作成しているが、その中に「荒井」という筆者の文献から収められたものもある。実はこれは荒尾の『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』に相当するものであり、小川は氏名の表記を誤っている。少なくとも小川は荒尾(1898)またはその抄本を目にしていたことになる。このように少数の引用はあるものの、荒尾(1898)がほとんど利用されてこなかった理由の一つとして、本手稿が明治時代の日本語で、しかも手書きで記されていることが挙げられるだろう(図2参照)。恐らく日本語とセデック語両言語の基礎知識がなければ解説も困難であると思われる。

本資料はセデック語を記録したものとしては早期のものに属する。最も古い資料は台湾における清朝末期の資料Bullock(1874)であり、ここにはセデック語パラン方言の語彙164項目が収録されている。荒尾(1898)はその24年後、日本統治下の資料である。しかも荒尾(1898)の語彙数は547もあり、当時の語彙集としてはかなり多い方である。これらは当時のパラン方言と現代パラン方言とを比べ、通時的な考察を加える上で貴重な資料と言える。そこで本稿は、荒尾(1898)の全項目を解説・再現することを目的とする。一世紀あまり経った現在のセデック語パラン方言を注釈として付し、本方言の通時的研究につながる資料を提供する。また、『臺灣蕃語彙録』(小川2006)に収録された資料番号23aは筆者が「荒井」と記されているが、この資料番号23aは荒尾(1898)に相違ないことも示す⁶。

2 現代セデック語パラン方言の文法概略

本稿における現代セデック語パラン方言は、筆者のフィールド調査の資料に基づく(2015年に調査)。これらの調査における主要な協力者は、南投縣仁愛鄉互助村清流集落在住でセデック語パラン方言を母語とする女性一名(調査時74歳)と男性一名(調査時78歳)である⁷。

荒尾の語彙集に現れる語彙の理解に必要となる、セデック語パラン方言の音韻・形態統語論を簡単に説明する。

現代パラン方言の表記は音素には単母音五つ [a, e, i, o, u]、二重母音一つ [ui]、子音18個 [p, b, t, ts, d, k, g, q, m, n, ŋ, l, r, s, x, h, w, y] がある。表記としては、基本的に同様の記号を用いるが、[ui] は *uy*、[ɾ] は *r*、[j] は *y*、[ts] は *c* で表記することにする。二重母音 *uy* は語末にのみ現れる。

音声的な変化として、*s* と *c* は前舌母音の前で口蓋化する(例 *sino* [eino] 「酒」、*cida* [tɕida] 「枝」)。また、語末の *h* または *q* の直前の *u* は *o* に変化する(例 *bunuh* [bu.noh] 「帽子」、*peruq* [pe.roq] 「破

⁶ なお、本稿における荒尾(1898)の掲載については、この文献が収められている台湾大学図書館特別所蔵区・伊能文庫の編集査定員に連絡を取り、全文を引用することに差し障りのないことを確認済みである。

⁷ 互助村にはふたつのセデック族パラン支族の集落があり、ひとつは清流集落、もう一つは中原集落である。

れた)。同様にこれらの子音の直前の*i*は渡り母音の挿入された [ɾ] (さらには[iɾ])に変化する(例 *seediq* 「人, 他人」 [se.'e.dɪɾq])。

音節は開音節を基本とするが, 語末音節は開音節と閉音節の両方が現れる。例外的に, 前次末音節に成節鼻音を許す場合がある。この場合は表記上, 子音が連続して現れる(例 *nbyas* [n̥.'bu.yas] 「腹」, *mpitu* [m̥.'pi.tu] 「七」など)。前部子音は成節子音であり, 後部子音は閉鎖音である。

次に強勢と母音弱化との関連について説明する。強勢は次末音節にある。強勢位置にあたる次末音節より前の音節の母音は弱化する。例えば語根 *qita* 「見る」に, 命令の接尾辞 *-i* が付いた場合, *qita-i* が予想される形式だが, 前次末音節に当たる *i* は *u* に弱化するため, 実際は *qita-i* 「見ろ」となる。この弱化母音は早期には *a* であったと予想されるが現代では *u* になる。この母音弱化の音韻規則は, 荒尾の表記にはほとんどの場合, 適用されていないようである(少なくとも弱化を示すための母音を体系的に使っているわけではない)。そのためこの時代には母音弱化は起こっていなかった(あるいは起こり始めた)ようである。

母音の弱化が見られない場合もある。そのひとつが, 同一の母音連続し, 前部は前次末音節に, 後部は次末音節に属する場合である(*seediq* 「人, 他人」など)。この場合, 前次末音節は *u* で現れない。次末音節が強勢を持つため, これらの母音は強勢の有無で区別される。その上, これらの母音の間に声門閉鎖音が挿入される音韻規則があるが(例 *se?ediq*), この規則は随意的である。

もうひとつ母音の弱化が見られないのは, 強勢のある次末音節のオンセットが *h* である場合である。その場合, *h* の直前の母音に当たる, 前次末音節の母音は *h* の直後の母音に当たる, 強勢を持つ母音と同じになる。例えば *pehepah* 「花」において, 前次末音節の母音は, *h* の直後の母音 *e* と同じである。

次は現代セデック語パラン方言の文法である。態には四種類ある(表 1)。動作主態, 対象態, 場所態, 状況態である⁸。落合 (2016a) によると, これらの態の区別を示す動詞は, 動詞全体の中でも他動性の高いものに限られる。そしてこれら多動性の高い動詞は態を示す屈折が, 同時に時制の情報も含んでいる。多動性の低い動詞に付加する接辞にも特徴があり, 例えば静態動詞は接頭辞 *mu-* で特徴づけられる(例 *mu-tihux* 「熱い・暑い」, *mu-sekay* 「寒い」)。これら動詞が否定辞の後に来ると, 接頭辞が *ku-* に置き換わる(例 *ini ku-tihux* 「熱くない」)。また, 非意志動詞と呼ばれる類は接頭辞 *tu-* で特徴づけられる(例 *tu-leetu* 「冷たい」, *tu-leuy* 「座る」⁹)。これら低他動性の動詞は, 態の分類の枠組みにおいて, どの態にも属さない。しかもこれらの動詞は時制による形式の区別がない。

動作主態は接中辞 <*um*>, 接頭辞 *mu-* またはゼロ接辞で特徴づけられる。対象態は接尾辞 *-un* で, 場所態は接尾辞 *-an* で表される。命令形について, 動作主態の場合は語根, 非動作主態の対象態・場所態の場合は接尾辞 *-i* の付いた形式となり, 非動作主態の状況態の場合は接尾辞 *-ani* の付いた形式となる。これらの態を帯びた動詞が否定辞 *ini* (動詞否定) または *iya* (禁止) の後に現れる場合, 命令形を用いなければならないという決まりもある。対象態と場所態は現在形, 過去形(対象態は接中辞 <*um*>, 場所態は接中辞 <*un*>と接尾辞 *-an* を用いる)において形式上の区別こそあるが用法的な差異は見ら

⁸ ただし荒尾の語彙集において状況態を用いた例文はない。

⁹ この語については, 母音連続 *eu* が *oo* に変わった形式 *tu-looy* のほうがよく聞かれる。母音連続 *eu* のほうがより古い形式であると考えられる。

れない。対象態と場所態の命令形は同一形式である。

表 1 セデック語バラン方言の態¹⁰

	動作主態	対象態	場所態	状況態
現在 ¹¹	<um>	-un	-an	su-/an-un
過去	<um><un>	<un>	<un>...-an	---
未来	mu-/mu-pu-	---	---	---
命令	∅		-i	-an-i
勧誘	---	-o, -e		-an-e

現代バラン方言の語順は述部—主部である。動詞が文頭、主語が文末の語順が基本である。現代バラン方言には主語の前に置かれ主語を表示する標識 *ka* があるが、これは自然発話において頻繁に脱落する。そこで本稿では一貫してこの主語標識を示していない。また荒尾（1898）の例文にこの主語標識が現れる箇所は一つも無い。

態の別を表す例を以下に示す。動作主は「猫」、動作の受け手は「鼠」、動作は「咬む」である。例

(1) は動作主態、(2) は対象態を示す。以下本稿では「=」を接語の前に付ける。

- (1) *q<um>iguc* *qolic* *ŋiyo*
 AV.bite mouse cat
 「猫は鼠を咬む」
- (2) *qugut-un* =*na* *ŋiyo* *qolic*
 bite-UVF =3SG.GEN cat mouse
 「その鼠は猫に咬まれた」

これらの例を否定文にするとそれぞれ以下ようになる。例 (3) は動作主態、例 (4) は対象・場所態である。

- (3) *ini* *qiguc* *qolic* *ŋiyo*
 NEG AV.IMP.bite mouse cat
 「猫は鼠を咬まない」
- (4) *ini* *qugut-i* =*na* *ŋiyo* *qolic*
 NEG bite-UVF/UVL.IMP =3SG.GEN cat mouse
 「その鼠は猫に咬まれない」 「その鼠は猫に咬まれなかった。」

¹⁰ 本表は落合（2016a: 74）を参照した。

¹¹ 訳注において AV, UVP などに時制の指定がない場合は現在形であることを表す。

また、例えば猫が人の言葉を理解すると仮定して、猫に対して鼠を咬めと命令するには以下のように言う。例 (5) は動作主態、例 (6) は対象態である。

(5) *qiguc* *qolic*

AV.IMP.bitemouse

「鼠を咬め」

(6) *qugut-i* *qolic*

bite-UVF/UVL.IMP mouse

「その鼠を咬め」

このほか代名詞については 7.6 節で紹介する。

3 『埤里社撫墾署管轄北蕃語集』と現代セデック語パラン方言

本節では荒尾 (1898) における語彙項目とその注釈を再現し、それぞれの項目を現代セデック方言の表記で示す。荒尾の手稿を転記するに際しての提示方針を 3.1 節で説明してから、3.2 節で荒尾が語彙集に添えた「端書」を再現する。そして 3.3 節で荒尾の語彙集を示す。

3.1 方針

- i. 左列は荒尾が挙げた語彙項目の表記と荒尾の語釈である。中央列は荒尾の表記を基に、それを本稿筆者の解釈により音韻表記に転記したものを示す。右列は荒尾の語彙に形式的に対応する現代パラン方言の表現、それに対する注釈である。なお荒尾は項目に通し番号をつけていないが、本稿では通し番号を振った。
- ii. 筆者による音韻表記への転記について、現代パラン方言の形式に照らし合わせた場合、荒尾の表記に誤りがあると考えられる箇所については、現代パラン方言の形式に沿うように変更している。また、現代パラン方言には見られないが、荒尾の調査時代には見られた歴史的子音の *ɔ* について、荒尾の表記はさまざまであるが (5.1 節)、音韻表記では *ɔ* に統一している。
- iii. 前次末音節の母音は、現代パラン方言では弱化するが、荒尾の表記では本来の母音が保たれている例が多いと考えられる。その一方で恣意的に母音を用いていると考えられる例も見受けられるが、本稿の方針として、前次末音節の母音の転記については荒尾の表記に従うことにした。
- iv. 荒尾の表記において子音連続が見られる箇所には、それらの間に曖昧母音を挿入した。
- v. 荒尾の語彙に対応する現代方言の形式が見つからない場合は — と記す。
- vi. 荒尾は大文字のローマ字でセデック語を表記しているが、頭文字は他の文字に比べ多少大き

い。本稿では頭文字も小文字で表記する。

- vii. 荒尾は補足として閩南語の語釈を加えていることもあるがこれらは削除した。
- viii. 荒尾は軟口蓋鼻音の表記として、N を小さく下方に書き、次に G を続けている。この N を、本稿では小文字 n にし、上付きにしている。
- ix. 荒尾は2 語以上の項目において、語の上方にグロスを書き入れている場合がある。これらのグロスも本稿では表示した。
- x. 荒尾が書き損じた箇所にも二重線を引き、書き直している部分は書き直した表記のみを示す。
- xi. 荒尾が書き損じたと思った箇所にも二重線を引いているが、書き直しが無く、該当の語が誤りでない場合は、その語を表示している。
- xii. 荒尾自身が、セデック語・パラン方言以外の形式を挙げていると書き込んでいる項目がある。そのような項目には項目番号の後に「#」を付した。このほか、セデック語・パラン方言以外の言語・方言（セデック語・トゥルク方言 6.1 節、アタヤル語 6.2 節、バゼツヘ語 6.3 節、閩南語 6.4 節）を誤って掲げていると筆者が判断した項目にも「#」を付した。
- xiii. 荒尾の項目が句や節を成す場合がある。語順をそのまま現代パラン方言に置き換えた場合、文法的に誤っていることが多い。この場合は項目番号の後に「*」を付す。対応する現代パラン方言の形式が見つからないため、右列には―を記して、脚注で現代パラン方言での表現を示す¹²。
- xiv. 現代パラン方言の注釈に用いた略号は以下の通りである。AV: actor voice 動作主態, CAUS: causative 使役, CONJ: conjunction 接続詞, DEN: denominal 脱名詞化, DES: desiderative 願望, EXIST: existential 存在, FUT: future 未来, GEN: genitive 所有格, HORT: hortative 勧誘, imp: imperative 命令, INCL: inclusive plural 包括形, INT: interjection 間投詞, NEG: negator 否定辞, NOM: nominative 主格, NONV: non-volitional 非意志, PL: plural 複数, PRON: free pronoun 人称代名詞独立形, PROH: prohibitive 禁止, PART: particle 助辞, PST: past 過去, Q: question marker 疑問標識, RCPL: reciprocal 相互, RDP: reduplication 重複, SG: singular 単数, STAT: stative 状態, UVC: undergoer voice circumstance subject 非動作主態・状況主語, UVL: undergoer voice location subject 非動作主態・場所主語, UVP: undergoer voice patient subject 非動作主態・対象主語, 1: first person 一人称, 2: second person 二人称, 3: third person 三人称

3.2 端書

はし書

言語の処は埔里社撫墾署管内霧社蕃にして万社蕃タウツア蕃トロック蕃の三社の語も多少の相異はあれども概して類似の点多く要するに大同小異と見て可ならん

不肖英馬蕃語研究生の命を承けて埔里社に向かふや最初に同処國語傳習所傭員「談忠義」に就て土語を学び此土語を以て撫墾署通事「李阿輝」に糺し以て蕃語を研究せり

¹² しかし、文化的背景の相違などから、忠実な訳出が困難な場合もあった。その際にはできるだけ荒尾の意図に沿った訳出を心がけた。

阿輝は熟蕃の父と生蕃の母の間に生れ九歳の頃三ヶ月ばかり蕃社に在りし者にて略ぼ蕃語に通ずこれを以て不肖が同人に就て調べしこの蕃語集は全然誤謬なき者とは断言するを憚れども亦 Great Mistakes なしとは不肖の竊に信ずるところなり

阿輝は不肖と共に署長長野義虎に随行して北蕃霧大社巡廻中「ホーゴー」社に於て蕃人の惨殺する所となれり年齒僅に二十二歳

後の北蕃語集に對する者願くは阿輝の末路を想い軽々に看過するなくんば幸なり

明治卅一年五月

荒尾英馬

3.3 語彙集

	荒尾	荒尾の再建形	現代セデック語パラン方言
1	orobuc 閉ツル	<i>elebi</i>	<i>leb-i</i> (close-UVF/UVL.IMP) ‘shut the door’
2	lowahai 開ラク	<i>ruwahay</i>	<i>ruwah-e</i> (open-HORT) ‘let’s open it’
3	kumuzoho 雨, 雨降ル	<i>qumudux</i>	<i>q<um>uyux</i> (<AV>rain) ‘it rains’
4	matara häle 徐々ニ	<i>matara hari</i>	<i>mu-tara hari</i> (AV.FUT-wait a.little) ‘wait for a little’
5	agoa häle 早く, 早く来レ	<i>aguh hari</i>	<i>aguh hari</i> (come.here.INT a.little) ‘come here!’
6	iya 不可	<i>iya</i>	<i>iya</i> (PROH)
7*	egu paru ヨリ大 ¹³	<i>egu paru</i>	---
8	nakka 悪, 醜	<i>naqah</i>	<i>naqah</i> (bad.STAT) ‘bad’
9	maro 善, 美, or all night, 快シ, So, Yes	<i>malu</i>	<i>malu</i> (good.STAT) ‘good’
10	ma ^g gēfui, ma ^g gēhuiwa 酸イ, 苦イ, 辛イ, 渋イ, 鹹イ	<i>manihur</i> , <i>manihur wa</i>	<i>mu-nihun</i> (wa) (STAT-bitter [PART]) ‘it is bitter’
11#	masitu, masikitu 硬イ ¹⁴	---	6.2 節参照
12	kālau 静ニセヨ, 黙レ	<i>qaraw</i>	<i>qaro</i> (be.quiet.INT) ‘shut up’
13	sakenoho 臭イ	<i>sakemux</i>	<i>sukemux</i> (STAT.stinky) ‘stinky’
14	habālau 高イ ¹⁵	<i>habaraw</i>	<i>hubaro</i> (STAT.be.many.people) ‘be many people’

¹³ 現代パラン方言では *rumabaŋ paru* (best STAT.big) 「より大きい, 最も大きい」と言う。

¹⁴ 現代パラン方言では *saadux* と言う。

¹⁵ 現代パラン方言では *bubaro* と言う。荒尾の形式に対応する現代パラン方言の語は「人数が多い」と言う意味である。

15	rau _{ka} , dau _{ka} 軽イ	<i>lawka, dawka</i>	<i>culokah</i> (STAT.light) ‘light (of weight)’
16	matsairin 重イ ¹⁶	<i>macaylin</i>	<i>cehedin</i> (STAT.heavy) ‘heavy’
17	taeya 遠イ, 長イ	<i>taeya</i>	<i>te-heya</i> (NONV-that) ‘far’
18	dārin, rārin 近イ, 短イ	<i>daliŋ, raliŋ</i>	<i>daliŋ</i> (STAT.near) ‘near’
19	chērun 池 (not artificial), 堀 (natural)	<i>ciluy</i>	<i>guciluy</i> ‘pond’
20	dakahāyan 低い, 地	<i>daxeyan</i>	<i>deheran</i> ‘land’
21	chēkoaha 些少, 小サキ	<i>cikuh</i>	<i>tikuh</i> (STAT.few) ‘small in amount’
22	egu 澤山	<i>egu</i>	<i>egu</i> (STAT.many) ‘many’
23	paru 大ナル	<i>paru</i>	<i>paru</i> (STAT.big) ‘big’
24#	rābu 白イ ¹⁷	---	6.2 節参照
25	chēpo 褐色 ¹⁸	---	---
26	tanna 赤イ, 血	<i>tanah</i>	<i>tanah, mu-tanah</i> (STAT.red, STAT-red) ‘red’
27	masekui 寒イ	<i>masekuy</i>	<i>mu-sekuy</i> (STAT-cold) ‘cold’
28	machēroho 熱イ, 暑イ	<i>macilux</i>	<i>mu-tilux</i> (STAT-hot) ‘hot’
29	ussa, mausa, maha 行ク	<i>usa, mausa, maha</i>	<i>usa</i> (go.AV.IMP) ‘go’; <i>m-osa</i> (AV-go) ‘go’; <i>maha</i> (AV.FUT.go) ‘will go’
30	mināroho 痛イ, 病氣	<i>minarux</i>	<i>munarux</i> ‘sickness’; <i>mu-narux</i> (STAT-sick) ‘sick’
31	mare ^{gu} 乾ク	<i>mareju</i>	<i>mu-deju</i> (STAT-dry) ‘dry’
32	mafuriya ^k 湿フ, 泥土	<i>mahuriq</i>	<i>mu-huriq</i> (STAT-wet) ‘wet’
33	maebu, baebu 打ツ	<i>maebu, baebu</i>	<i>beebu</i> (AV.beat) ‘beat’
34	heri 擴ゲル ¹⁹	---	---
35	simalo タヘム (cloth etc.), 建テル (house), 修斉スル, ヨリ善クスル	<i>simalu</i>	<i>s<um>alu</i> (<AV>repair) ‘repair, make’
36	papurai 炊ク, 煮ル ²⁰	<i>papuray</i>	<i>pure, h<um>pure</i> (cook.AV, <AV>cook) ‘cook’

¹⁶ 荒尾の表記における語頭の *ma* は、静態動詞接頭辞と考えられるが現代バラン方言では現れない。

¹⁷ 現代バラン方言では *behege* 「白い」と言う。

¹⁸ 現代バラン方言では *mugu-deheran* (similar.to-ground) と言う。ちなみに、セデック語トゥルク方言に *hibuy* 「黄色」(Rakaw 他 (編) 2006: 290) という形式がある。荒尾が挙げた形式はこの形式を表そうとしたものかもしれない。

¹⁹ 現代バラン方言の *luhelah* (AV.IMP.loose) 「緩む, 緩める」に相当するのかもしれないが, 音の対応が不規則である。

²⁰ 荒尾の形式は重複形または使役形を示している (*pa-puray* [RDP/CAUS-cook]) と考えられる。現代バラン方言では重複しない。

37	tareon 坐ル, 屈ム	<i>taleuj</i>	<i>tu-leuj</i> (NONV-sit) ‘sit’
38	tuʔsui 醒メル, 立ツ	<i>tucuy</i>	<i>tutuy</i> (AV.get.up) ‘to get up’
39	matake, take 眠ル	<i>mataqi, taqi</i>	<i>mu-taqi, taqi</i> (STAT-sleep, STAT.sleep) ‘sleep’
40	rērin, ānan, āngan 取ル, 拳ゲル, 持ツ, 握ル	<i>ririn, ayan</i>	<i>didin</i> (AV.IMP.bring) ‘bring’ ; <i>ayan</i> (AV.IMP.take) ‘take’
41	paane 背へ負フ	<i>paani</i>	<i>paan-i</i> (carry-UV/P/UVL.IMP) ‘carry on the back’
42	mapa 背へノセル	<i>mapa</i>	<i>m-apa</i> (AV-carry) ‘carry on the back’
43	ādasi 持テ来イ	<i>adas</i>	<i>adis</i> (AV.IMP.bring) ‘bring’
44	pakuʃun 着ル	<i>pakusun</i>	<i>pu-lukus-un</i> (CAUS-clothes-UV/P) ‘wear’
45	maseyan 怒ル	<i>maseyan</i>	<i>mu-seyan</i> (STAT-angry) ‘angry’
46#	makaki 寄セル ²¹	---	6.2 節参照
47	pare ^a gau, pare ^a gau kăle 話ス	<i>parenjaw, parenjaw kari</i>	<i>pu-rejo (kari)</i> (RCPL-speak [word]) ‘speak to each other’
48	kōda maro 其レデヨイ	<i>kiōda malu</i>	<i>kiya malu</i> (that STAT.good) ‘It is okay’
49	maʃuʃissi 喜ブ, 笑フ	<i>mahulis</i>	<i>mu-hulis</i> (STAT-laugh) ‘laugh’
50	karaun, makera, kera 知ル	<i>kalaun, makela, kela</i>	<i>kula-un, mu-kela, kela</i> (know-UV/P, AV-know, AV.IMP.know) ‘know’
51	inni kera 不知	<i>ini kela</i>	<i>ini kela</i> (NEG AV.IMP.know) ‘one does not know’
52*	mausa habārau 上ル ²²	<i>mausa habaraw</i>	---
53	kufun 愛スル, 好ム	<i>kuxun</i>	<i>kuxun</i> (like.UDP) ‘like, be fond of’
54	pattashi 写ス, 書ク, イレズミ	<i>patas</i>	<i>patas</i> (AV.IMP.draw) ‘painting, draw a picture’
55	chi ^a bābu 打ツ	<i>cimebu</i>	<i>c<um>ebu</i> (<AV>shoot) ‘shoot’
56	wassau 射ル ²³	---	---
57#	マト papeā 的	---	6.4 節参照
58	chebu harun 発砲スル	<i>cebu haluj</i>	<i>cebu haluj</i> (shoot.AV.IMP.gun) ‘shoot!’
59	atak 鋏, ハサミ, 番人ノ造リタル芋	<i>atak</i>	<i>atak</i> (AV.IMP.cut.with.scissor) ‘scissor,’

²¹ 「誰かの家に立ち寄る」と解釈するならば (6.2 参照), 現代バラン方言では *teheyaq sapah* (AV.play house) と言う。

²² 現代バラン方言では *m-osa baro* (AV-go up) と言う。荒尾の表記に対応する語 *hubaro* (STAT.many.people) は「人数が多い」という意味である。

²³ 現代バラン方言において形式の上で一致する語に *waso* 「葉」があるが, 意味が合わない。

	ナドヲハサムニ用ル木製ノ者モ云フ		to cut'
60	matakui 倒レル	matakur	mu-takun (AV-fall.down) 'to fall down'
61	urun 鹿角	urunj	urunj 'horn'
62	babāriak 嘘	baberiḡ	m-beriḡ (STAT-tell.lie) 'tell a lie'
63	bārai 真実	balay	bale'truth'
64#	makuri 盗ム ²⁴	---	6.2 節参照
65	maitsu 恐レル	maicu	mi-icu (STAT-fear) 'to fear'
66	kana 皆の, 凡テ	kana	kana 'all'
67	tsūrin 焼ク	culiḡ	culiḡ [AV.IMP.get.burned] 'to get burned'
68	matara 待テ	matara	mu-tara (AV.FUT-wait) 'to wait'
69	rita 帰ル	diṭa ²⁵	nita (let's.go.INT) 'Let's go'
70	mākan 食フ, 咬ム	mekan	m-ekan (AV-eat) 'to eat'
71	chebu 投ゲル ²⁶	cebu	cebu (AV.IMP.shoot) 'shoot'
72	kalābui, lābui 紙	kalabuy, labuy	kulabuy 'paper'
73	marawa 呼ブ, 吠ル	malawa	mu-lawa (AV.FUT-call) 'will call'
74	lipak, pakkun 斬ル	lipaq ²⁷ , paqun	sipaq, paq-un (AV.IMP.destroy, destroy-UVP) 'to destroy'
75	bahan 合点スル	bahanj	qubahanj (AV.IMP.hear) 'to hear'
76	brigun 交換スル ²⁸	bərigun	burig-un (exchange-UVP) 'to exchange, buy'
77	pira 銀貨, 幾何	pila	pila 'money'
78	habagān 台湾銭	habayan	hubayan 'money'
79	kinhaiyū アブナイ, take care	---	---
80#	sāpoa, sepōhan 掃ク ²⁹	sapuh, sepuhan	(sapuh, supuh-an [AV.IMP.cure, cure-UVL] 'to cure') 6.2 節参照
81	bekki 與ヘル	biqi	biq-i (give-UVP/UVL.IMP) 'give!'

²⁴ 現代バラン方言では *g<um>eeguy* (<AV>steal) と言う。

²⁵ Asai (1953: 56) には荒尾の形式に相当する *diṭa* が記録されている。

²⁶ この荒尾の形式は項目 55 の語根である。

²⁷ 荒尾の形式では語頭が *l* であるが、現代バラン方言では *s* である。語頭子音が一致しないが、Asai (1953: 70) では同一の語が *s<im>ulipak* と記されている (表記に多少修正を加えた)。現代では、Asai の記した形式から *l* が脱落したことになる。

²⁸ 荒尾の表記では前次末音節に当たる母音が記されていない。母音弱化を被る位置であることに起因するだろう。

²⁹ 現代バラン方言において「掃く」は *sukesik* (AV.sweep) と言う。

82	kancepa 働ク, 田ヲ作ル, 畑	kaneepah	k<un>eepah (<UVP.PST>work.in.field) ‘field, work in field’
83	sinawi, maho 洗フ	sinawi, mahu	sunag-i (wash.dish-UVP/UVL.IMP) ‘wash dishes!’ ; m-ahu (AV- wash.cloth) ‘wash clothes’
84	chineno 織ル ³⁰	---	---
85	tsäpan 蕃布	capanj	capanj ‘cloth’
86	wada 走ル	wada	wada (leave.PST) ‘gone’
87	okka 無イ	uka	uka (NEG.EXIST)
88	gäga 有ル	gaga	gaga ‘that, be there’
89	agoa 来イ, 来ル, 来タ ³¹	aguh	aguh (come.here.INT) ‘come here!’
90	kimita 見ル	qimita	q<um>ita (<AV>see) ‘to see’
91	ish オマへ, オマへ等	isu	isu (2SG.PRON)
92	hinni 此処, コレ, コレ等, 此方	hini	hini ‘here’
93	hish 其処, ソレ, ソレ等, 其方	hisu	hisu ‘there (archaic)’
94	ima 何, 性名ヲ問フ時ニ用イルガ如 シ	ima	ima ‘who’
95	maanu 何, 何故	maanu	maanu ‘what’
96	inu 何処	inu	inu ‘where’
97	kabu 熟蕃人	kabu	kahabu ‘aborigines of the plains’
98	aran 生蕃人 ³²	alay	alay ‘village’
99	pamukan, panimukan 台湾人	pamukan, panimuk an	pulumukan ‘Southern-Min people’
100	tarō 清国人	talu ³³	telu ‘Chinese’
101	tana tsupuh 日本人, 赤キ頭トノ義 ニテ之ハ西洋人ニ的シタル名ナレ ドモ日本人ノ風采西洋人ニ似タル 所ヨリ名ヅケタルガ如シ ³⁴	tanah cumux	tanah tunux (STAT.red head) ‘Japanese’

³⁰ 現代バラン方言では t<um>inum (<AV>weave) と言う。

³¹ 項目 5 参照。

³² この語は「集落」という意味である。

³³ 中国語「大陸」の借用であると考えられる。荒尾の表記における次末音節の母音 a は現代セデック語バラン方言では e である。なぜこのような違いが見られるかは分からない。

³⁴ 西洋人も日本人も洋服を身に着けていたという共通点はあったとしても、日本人の風采が西洋人に似ていたとの説明には少し無理がある。この表現は日本の軍人の帽子に赤い線が入っていたことに由来するらしい。

102	umukā 石ヲ埋メテ違約ナキヲ誓 フコト ³⁵	—	—
103	pausa rineui 数ノ誤謬ヲ避ケンガ為 ニ藁又ハ縄ヲ結ビテ記憶ニ便ニス	pausa rinewul	posa negun (put.AV rope) ‘to put rope’
104	puton マッチ	putuj	putuj ‘match’
105	dan ^a gā 朋友	danji	daji ‘friend’
106	kimeki 踊リ, 踊ル	kimeki	k<um>eeki (<AV>dance) ‘to dance’
107	maowashi 唱歌, 歌フ	mauwas	mu-uyas (STAT-sing) ‘to sing’
108	papurin 猟 ³⁶	papulin	pu-hulin (CAUS-dog) ‘to hunt using dogs’
109	sikari 漁 ³⁷	sikadi	su-kadi (DEN-net) ‘to search’
110	tairiak chika 遊戯	taiḍaq cikuh	teheyaq tikuh (AV.play a.little) ‘to play a little’
111	kafurisi 火炭 ³⁸	qabulis	qubulic ‘ash, dust’
112	bağa 木炭	bagah	bagah ‘charcoal’
113	habu 帯, 褌	habuk	habik ‘belt’ ³⁹
114	tubu 嘴琴, 竹製ノ小楽器ニシテ口 ニ宛テハナラス	tubu	tubu ‘mouth harp’
115	kulu 機 ⁴⁰	kulu	kulu ‘box’
116	mara ^a gan 槍	marajan	sunburajan ‘lance’
117	simada 刀	simadat	sulumadac, huhumadac ‘sword’
118#	kiyon pan 弓 ⁴¹	—	6.4 節参照
119#	kiyon che 矢 ⁴²	—	6.4 節参照
120#	pinā 笛 ⁴³	—	6.4 節参照
121	umuki ツヽム	umuki	gumuk-i (lid-UVF/UVL.IMP) ‘cover it’
122	tarashi 笠	tarasi	turasi ‘hat’

³⁵ 現代バラン方言の *gemuk* 「蓋をする」という動詞から派生された語かと考えられる。

³⁶ 語根は *hulin* 「犬」に使役接頭辞 *pa-* を附加した派生語であるが、荒尾の表記では語根の語頭子音が *p* に変化している。しかし項目 269 「犬」では語頭子音は *f* (母音 *u* の前における *h* の表記) で現れる。使役接頭辞中の *p* へ同化した形式かもしれない。

³⁷ 語根は *kadi* 「網」である。現代バラン方言において「網で魚を採る」ことを *pu-kadi* (CAUS-net) と言う。

³⁸ 現代バラン方言の第二音節の子音は *b* であるが、荒尾の表記では *f* になっているため対応しない。

³⁹ 現代バラン方言において *habuk* という交替形もあるが、*habuk* は使われぬ。

⁴⁰ 現代バラン方言において「機織りに用いる木製の筒」のことを *ubu* と言う。

⁴¹ 現代バラン方言では *beheniq* と言う。

⁴² 現代バラン方言では *budi* と言う。

⁴³ 現代バラン方言では *iyuk* と言う。

123	bāri 銃丸 ⁴⁴	<i>bali</i>	<i>bu-bali</i> (RDP-bullet) ‘bullet’
124	pūniak 火, 電	<i>puniq</i>	<i>puniq</i> ‘fire’
125	yayū 剃頭刀, 小刀	<i>yayu</i>	<i>yayu</i> ‘knife’
126#	baruku 簸 ⁴⁵	---	6.2 節参照
127	刀 石 simada batsunuh 砥石 ⁴⁶	<i>simadat bacumux</i>	---
128	batsunuh 石	<i>bacumux</i>	<i>butumux</i> ‘stone’
129	kumi 針	<i>qumi</i>	<i>qumi</i> ‘needle’
130	puru 斧	<i>puru</i>	<i>puru</i> ‘ax’
131	shūpan 土瓶	<i>supan</i>	<i>supih</i> ‘pot’
132	hita 柄杓 ⁴⁷	---	---
133	kuru 箱 ⁴⁸	<i>kulu</i>	<i>kulu</i> ‘box’
134#	ruṭsun 杵 ⁴⁹	---	6.3 節参照
135	rufun 臼	<i>ruhuy</i>	<i>duhuy</i> ‘mortar’
136	sarau 甕, 酒甕	<i>salaw</i>	<i>salo</i> ‘container’
137	tumun 水甕	<i>tumun</i>	<i>tumun</i> (STAT.round) ‘round’
138	shūpā 銅鍋, 洗面器	<i>supih</i>	<i>supih</i> ‘pot’
139	kaū 土鍋	<i>kau</i>	<i>kayu</i> ‘um’
140	ribau 鉄鍋	<i>ribaw</i>	<i>ribo</i> ‘wok’
141	tamako 煙草	<i>tamaku</i>	<i>tumaku</i> ‘tobacco’
142*	人レモノ tamako ruḅbui 煙草入レ ⁵⁰	<i>tamaku lubuy</i>	---
143	puḡan 煙管	<i>puḡan</i>	<i>puḡan</i> ‘pipe’
144	po ^o gara 茶碗	<i>pujerah</i>	<i>pujerah</i> ‘bowl’
145	magariak ワレル (茶碗ナド)	<i>mageriq</i>	<i>mu-geriq</i> (STAT-wind) ‘to wind’
146	pausaḡpufu 頭骨并列所 ⁵¹	---	---
147	rupi 蓆	<i>rupi</i>	<i>rupi</i> ‘mat’
148	sāpo 寢臺	<i>sapo</i>	<i>sapo</i> (AV.IMP.lay.mat) ‘to lay a mat’

⁴⁴ 現代バラン方言では重複形のみを用いる。

⁴⁵ 現代バラン方言では *butuku* と言う。

⁴⁶ 現代バラン方言では *lupax-an* (whet-UVL) 「砥石」と言う。

⁴⁷ 現代バラン方言では *dahun* と言う。

⁴⁸ 項目 115 と同一の語である。

⁴⁹ 現代バラン方言では *seru* と言う。

⁵⁰ 現代バラン方言では *lubuy tumaku* (sack tobacco) と言う。

⁵¹ 荒尾の表記における前半 *pausaḡ* は現代バラン方言の *posa* 「置く」に相当するだろうが (項目 103 参照), 後半 *pufu* は不明。

149*	コ、 säpa hinni 家ノ内 ⁵²	<i>sapah hini</i>	---
150*	ソコ säpa hish 家ノ外 ⁵³	<i>sapah hisu</i>	---
151*	鶏 raudoho säpa 鶏小屋 ⁵⁴	<i>rawdoh sapah</i>	---
152*	bäbui säpa 豚小屋 ⁵⁵	<i>babuy sapah</i>	---
153*	lappa säpa 牛小屋 ⁵⁶	<i>lapa sapah</i>	---
154*	米 säpa pädai 穀小屋 ⁵⁷	<i>sapah paḍay</i>	---
155*	家 高 イ säpa habārau 屋根 ⁵⁸	<i>sapah habaraw</i>	---
156	kumuchi 大便, 放屁	<i>qumuci</i>	<i>q<um>uti</i> (<AV>excrement) ‘to excrete’
157	sāda 今日, 今	<i>saḍa</i>	<i>saya</i> ‘now, today’
158	tsaman 明日 ⁵⁹	<i>caman</i>	<i>caman</i> ‘tomorrow’
159	makaha 明後日	<i>makaxa</i>	<i>mukaxa</i> ‘the day after tomorrow’
160	chēga 昨日	<i>ciga</i>	<i>ciga</i> ‘yesterday’
161	barebu, barebu hāle	<i>barebu (hari)</i>	<i>murebu (hari)</i> (morning [a.little]) ‘morning’; ‘it is almost morning’
162	arian 昼	<i>alian</i>	<i>diyan</i> ‘day’
163	kaaman 夜	<i>kaaman</i>	<i>keeman</i> ‘night’
164*	来ル 高 キ 水 eḍa habārau sia 瀑布	<i>eḍah habaraw sia</i>	---
165	sc̥pau 川原	<i>sipaw</i>	<i>sipo</i> ‘the other side of a river’
166	yayun funna 川口	<i>yayuy hunat</i>	<i>yayuy hunac</i> (river downhill) ‘downstream’
167	dāya 蕃社 ⁶⁰	<i>daya</i>	<i>daya</i> ‘uphill’

⁵² 現代バラン方言では *sapah* と言う。

⁵³ 現代バラン方言では *ḡayuc* と言う。

⁵⁴ 現代バラン方言では *kadu* と言う。

⁵⁵ 現代バラン方言では *tibu* と言う。

⁵⁶ 現代バラン方言では *q<un>alaṅ dapa* (<UVP.PST>enclose cow) と言う。

⁵⁷ 現代バラン方言では *repun* と言う。

⁵⁸ 現代バラン方言では *d<un>amux* (<UVP.PST>thatch) と言う。

⁵⁹ 古い形式として *caman* は存在するが、現在では *saman* 「明け方」に変化している (Ochiai 2019)。

⁶⁰ この語彙は本来「傾斜の上の方」という意味である。

168	mabuyan, babuyan 山 ⁶¹	<i>mabuyan, babuyan</i>	<i>bubuyu</i> ‘forest’
169*	山 頂 mabuyan habarau 山頂 ⁶²	<i>mabuyan habaraw</i>	---
170	erru 路	<i>elu</i>	<i>elu</i> ‘road’
171*	大 水 paru sia 洪水 ⁶³	<i>paru sia</i>	---
172*	倒 水 死 matakui sia mafukin 溺死 ⁶⁴	<i>matakur</i> <i>sia</i> <i>mahuqin</i>	---
173	ēdasi 月	<i>idas</i>	<i>idas</i> ‘moon’
174#	goagi 日	<i>gagi</i> ⁶⁵	(<i>gagi</i> ‘glass’) 6.2 節参照
175*	熱 イ 水 matēroho sia 湯 ⁶⁶	<i>matihex sia</i>	---
176	maurai 餓	<i>mauray</i>	<i>mu-ure</i> (STAT-hungry) ‘hungry’
177*	maurai raboasi 腹ガへル ⁶⁷	<i>mauray rabuas</i>	---
178	mate ^u gi 飽ク	<i>matenji</i>	<i>mu-tenji</i> (STAT-replete) ‘to replete’
179	basukan 酔フ	<i>basukan</i>	<i>busukan</i> (STAT.drunk) ‘drunk’
180	maro pukun 御馳走	<i>malu puqun</i>	<i>malu puq-un</i> (STAT.good eat-UVP) ‘tasty’
181	sinaruksi 守城份 (地名) 蕃人等守城 份ニ来リテ洗濯ヲナス, 着物ヲ洗 フノ意ナリ ⁶⁸	<i>sinaw lukas</i>	---
182	pokaraudoho 蜈蚣命 (地名) 蕃人等 蜈蚣命ニ来リテ鶏ヲ盗食ス, 鶏ヲ 食フノ意ナリ ⁶⁹	<i>puqan rawdoh</i>	

⁶¹ 荒尾の表記では語末が *an* であるが、現代バラン方言では *u* である点が一致しない。

⁶² 現代バラン方言では *dugiyag* 「山頂」と言う。

⁶³ 現代バラン方言では *qusiya paru* (water STAT.big) 「洪水」と言う。

⁶⁴ 現代バラン方言では *tu-guqegoq* (NONV-drown) 「溺れる」と言う。

⁶⁵ 荒尾の形式に相当する語は現代バラン方言にもあり、*gagi* という形式であるが、これは意味が「ガラス」であり荒尾の挙げた意味と異なる。そのため、荒尾の形式は荒尾の挙げた意味と同じ意味をもつアタヤルの同源語を表したものだと判断した。セデック語バラン方言における「太陽」は *hido* である。

⁶⁶ 現代バラン方言では *qusiya mu-tihex* (water STAT-hot) 「湯」と言う。

⁶⁷ 荒尾の表記の第二語は、現代バラン方言の *nbuyas* 「腹」に相当する。現代バラン方言では *mu-ure* (STAT-hungry) 「腹がへる」の一語で表現するのが一般的である。

⁶⁸ 現代バラン方言においてこの地名は失われているが、現代バラン方言に置き換えると *sino lukas* (AV.IMP.wash.dishes clothes) 「衣服を洗う」であるが、この表現には難点がある。衣服を洗うの動詞は *pahu* でなければならないが、ここでは食器・道具を洗う際の *sino* を用いている。

⁶⁹ 現代バラン方言においてこの地名は失われているが、現代バラン方言に置き換えると *puq-an rodux* (eat-UVL chicken) 「鶏を食べるところ」となる。

183	sāpah ⁹ gara 埔里社 埔里社ハ市街ナリ即チ沢山道々ノ家ガアルトノ意ナリ	sapah ṅarah	Sapah puṅerah (house bowl) ‘Puli (place name)’
184	āran batowan 大南庄 (地名) バトワ ンハ台湾人鉄器修覆ヲ生業トセリ ⁷⁰	alay batuwan	---
185	āran rafuiya (地名) ラフイヤハホア ヒー社長ノ弟ノ名ナリ ⁷¹	alay rahuya	---
186	puttinzakaizak 牛烟山 (地名) ⁷²	putiṅ ḍaqeḍaq	---
187	barābare 西港溪 (地名) ⁷³	balebal	---
188*	sāpa waru 蜂ノ巢 ⁷⁴	sapah walu	---
189	ma ⁹ gāfui 風, 風吹ク	bagihur	bugihun ‘wind’
190	bahānni 鳥	baheni	qubeheni, qubuheni ‘bird’
191*	wada bahānni 鳥ガ飛ブ ⁷⁵	wada baheni	---
192	daroho 脂肪, 油	darux	darux, daruk ‘oil’
193*	raudoho bairun 鷄卵 ⁷⁶	rawdux baluṅ	---
194#	mayūmin 粥 ⁷⁷	---	6.2 節参照
195	kanciya 砂糖, 甘蔗 ⁷⁸	kanciya	kanciya ‘sugarcane’
196	chimo 塩	cimu	timu ‘salt’
197	sedan 肉	siḍaṅ	siyaṅ ‘pork’
198	rāma 菜	damat	damac ‘side dishes’
199	ēclau 飯	idaw	ido ‘cooked rice’
200#	bāgaha 米	begax	(begax ‘testicles’) 6.1 節参照 ⁷⁹

⁷⁰ 現代パラン方言においてこの地名は失われているが、現代パラン方言に置き換えると *alay batuwan* (village Batuwan) 「バトワ村」となりそうである。第二語は、恐らくバゼッへ語由来の固有名詞で、オーストロネシア祖語 *batu 「石」に、場所を表す接辞 *-an* が付加していると考えられる。

⁷¹ 現代パラン方言においてこの地名は失われているが、前半は *alay* 「集落」に相当する。さらに、伊能 (1908: 365) にもこの地名が *āran-rāhoyal* として記され、意味は「大なる部落」だと述べている。

⁷² 現代パラン方言においてこの地名は失われているが、現代パラン方言に置き換えると *putiṅ yuqeyaq* (edge paddy field) 「水田の端」となる。

⁷³ 現代パラン方言においてこの地名は失われているが、現代パラン方言に置き換えると *bulebun* 「バナナ」となる (項目 365 参照)。この一帯は一時期バナナが特産であったとセデック族集落の年配者は話す。荒尾の形式においてなぜ語末音節の母音が *u* ではなく *a* であるのかはわからない。

⁷⁴ 現代パラン方言では *rudu wahu* (nest bee) と言う。

⁷⁵ 現代パラン方言では *sukiya qubuheni* (Av. fly bird) と言う。

⁷⁶ 現代パラン方言では *baluṅ rodux* (egg chicken) と言う。

⁷⁷ 現代セデック語パラン方言で「粥」は *ido runu* (rice STAT. mushy) と言う。

⁷⁸ 閩南語「甘蔗」からの借用語である。

⁷⁹ 荒尾の形式に相当する語は現代パラン方言にもあり *begax* であるが、これは意味が「睾丸」であり荒尾の挙げた意味と異なる。そのため、荒尾の形式は、荒尾の挙げた意味と同じ意味をもつセデック語トゥル

201*	朝 飯 barebu ēdau 朝飯 ⁸⁰	<i>barebu idaw</i>	---
202*	昼 arian ēdau 昼飯 ⁸¹	<i>alian idaw</i>	---
203*	晩 kaaman ēdau 晩飯 ⁸²	<i>kaaman idaw</i>	---
204	mima 飲む	<i>mimah</i>	<i>m-imah</i> (AV-drink) ‘to drink’
205	pudi 金ノボタン	---	---
206	chinemu (霧社ノ語) 着物	---	--- ⁸³
207#	rukushi (万社ノ語) 着物	---	---
208#	baratan (タウツア社ノ語) 着物	---	---
209#	sara (トロック社ノ語) 着物	---	---
210	ush 袖	<i>usuk</i>	<i>usuk</i> ‘sleeve’
211*	有 袖 着 物 gāga ush chinemu 有袖衣 ⁸⁴	<i>gaga usuk</i> ---	---
212*	無 袖 着 物 okka ush chinemu 無袖衣 ⁸⁵	<i>uka usuk</i> ---	---
213	tsuki 酒瓶	<i>cuki</i>	<i>cuki</i> ‘a cup made of bamboo’
214#	yami (万社ノ語) 下駄, 草履	---	---
215	tarau 耳飾ノ総称 ⁸⁶	---	---
216	para, bukui para 方布ノ蕃衣ニテ胸 ニ掛ク但男児ノミ ⁸⁷	<i>pala, bukuy pala</i>	<i>pala</i> ‘cloth’
217	lēmuk 指輪	<i>limuk</i>	
218	kanawa	<i>qanawa</i> ? ⁸⁸	<i>Qunawan</i> ‘bracelet’
219	tawak 頭ニ捲ク布 台湾人ノ者ナリ 蕃人ハ此ノ如キ者無キ様子ナリ	<i>tawak</i>	<i>Tahawak</i> ‘loincloth’

ク方言の同源語を表したものと判断した。

⁸⁰ 現代バラン方言では *ido mugurebu* (cooked.rice morning) 「朝ごはん」と言う。

⁸¹ 現代バラン方言では *ido ceka na ali* (cooked.rice middle GEN day) 「昼ごはん」と言う。

⁸² 現代バラン方言では *ido keeman* (cooked.rice night) 「晩ごはん」と言う。

⁸³ 現代バラン方言に *tundemu* 「服の一種」という形式があり、これが荒尾の形式に相当するかもしれないが、音の違いがやや大きい。

⁸⁴ 現代バラン方言では *lukus niqan usuk* (clothes have sleeve) 「袖のある服」と言う。

⁸⁵ 現代バラン方言では *lukus uka usuk* (clothes NEG.EXIST sleeve) 「袖のない服」と言う。

⁸⁶ 森 (1910b) にもバラン方言として「タラウ」という形式が挙げられている。おそらく *taraw* と表記できるだろう。しかし現代バラン方言では失われている。

⁸⁷ 現代バラン方言では *pala bukuy* (cloth back) 背中に使う布」に相当する。

⁸⁸ 現代バラン方言の語末の *n* が荒尾の表記には見られない。

	名称ノミ? 疑う可シ		
220#	tēoho 櫛 ⁸⁹	---	6.1 節参照
221	maliku 女ノ耳ニ垂レタル者多ク角 ニテ作ル	bariku	buriku ‘earrings’
222	bunnaha 帽子	bunuh	bunuh ‘hat’
223	taukan 網袋	tawkan	token ‘a basket carried on the back’
224	ōtsūbiu 頸輪 ⁹⁰	---biu	---
225	ボタン marun ru ⁹¹ gai 内地製白ノ石ボタン 91	marun ru ⁹¹ gay	---
226*	大 石 paru batsunuh 大石 ⁹²	paru bacumux	---
227	bairoaha 小豆	beloh	beluh ‘bean’
228	gētsan 黒豆	gicanj	gicanj ‘a kind of bean’
229	sāma 白菜	sama	sama ‘vegetables’
230	tsubura 餅米	cubula	tubula ‘dry-paddy rice’
231	buna 蕃薯	buja	buja ‘sweet potato’
232	uchiek 薑	ucik	ucik ‘ginger’
233#	bannoan 梅, 李 ⁹³	---	6.1 節参照
234	mūdu 蜜柑	mudu	mudu ‘orange’
235#	aidan 豆 ⁹⁴	---	6.3 節参照
236	tarabush 落花生	tarabus	turabus ‘peanut’
237	batakan 竹	batakan	butakan ‘bamboo’
238*	batakan tsunuh 竹ノ根ノ甲狀ヲナス 如 ⁹⁵	batakan cumux	---
239	sūdu 稻, 藁, 葉	sudu	sudu ‘grass’
240	pāđai 稻, 穂, モミ	pađay	paye ‘rice’
241	funni 薪	huni	quhuni ‘wood’

⁸⁹ 現代バラン方言では *sulau* と言う。

⁹⁰ 佐山 (1917: 70) に、バラン方言として「ビヨ」という語が「黒南京玉製の首飾り」という意味で記録されている。荒尾の表記の後半 *biu* に相当するだろう。

⁹¹ 荒尾の一語目は、現代バラン方言では古形であるが、*maruj* 「首飾りの一種」に相当し、二語目は現代バラン方言の *ruje* 「猿」に相当する。この複合語は現代では失われている。

⁹² 現代バラン方言では *butumux paru* (stone STAT.big) と言う。

⁹³ 現代バラン方言では *buruqawe* と言う。

⁹⁴ 現代バラン方言では *beluh* と言う。

⁹⁵ 現代バラン方言に置き換えると *butakan tunux* (bamboo head) となる。竹についての語だが、意味はよくわからない。

242	karun, kairun キクラゲ	<i>qeluj</i> ⁹⁶	<i>qeluj</i> ‘Juda’s ear’
243	waru 蜜, 蜂蜜	<i>wahu</i>	<i>wahu</i> ‘bee’
244	sasebush 甘い	<i>sasibus</i>	<i>su-sibus</i> ‘sweet’ (RDP-sugarcane)
245	rehi 筍	<i>lexi</i>	<i>lexi</i> ‘bamboo shoot’
246	maburao 大麦 ⁹⁷	---	---
247*	木 皮 funni maina 樹皮 ⁹⁸	<i>huni baynat</i>	---
248	banni 枝 ⁹⁹	---	---
249*	sāpa bahānni 鳥ノ巢 ¹⁰⁰	<i>sapah bahani</i>	---
250	pāpak raudoho 鶏足	<i>papak rawdux</i>	<i>papak rodux</i> (foot chicken) ‘feet of a chicken’
251	tama raudoho 雄鶏	<i>tama rawdux</i>	<i>tama rodux</i> (father chicken) ‘rooster’
252*	bahānni koak 嘴 ¹⁰¹	<i>bahani quaq</i>	---
253	da ^a gāgi 蟻 ¹⁰²	<i>Rajedi</i>	<i>Rujedi</i> ‘fly’
254	tamakui 蚤	<i>tamaquy</i>	<i>tumaquy</i> ‘flea’
255	kuhiñ 虱	<i>kuhiñ</i>	<i>kuhiñ</i> ‘louse on head’
256	tsūmiyaka 南京虫	<i>cumiq</i>	<i>cumiq</i> ‘tick’
257#	supuhu 油虫 ¹⁰³	<i>suptux</i>	6.1 節参照
258#	dāgau 蠅 ¹⁰⁴	---	6.3 節参照
259	padaushi 蜻蛉	<i>padaus</i>	<i>pudaus</i> ‘dragonfly’
260	kuḷ 蚊	<i>kui</i>	<i>kui</i> ‘insects’
261	parabau 蜘蛛	<i>parabaw</i>	<i>purobo</i> ‘spider’

⁹⁶ セデック語トゥルク方言の同源語が *qeluj* である。次末音節の母音は、荒尾の表記では ai という二重母音のように書かれているのは恐らく直前の子音 *q* が母音 *e* をより低い調音位置に引き下げたためだろう。

⁹⁷ 荒尾の表記における語頭の *ma* を除いた *burao* の部分は、現代パラン方言の *buro* に形式としては一致する。現代パラン方言においてこの語は「腐乱した」という意味であり、荒尾の語釈「大麦」と意味の上で繋がらない。現代パラン方言において「大麦」の形式は得られなかったが、関連した語として日本語から借用された *udonko* 「うどん粉」というのがある。

⁹⁸ 赤間 (1933: 67) にベーナッツ「毛皮」とある。この語と荒尾の表記を合わせると、*baynat* という形式であったことが予想される。筆者の調査協力者は *benac* という語を耳にしたことがあり、動物の体のある部分を指すようだが、正確な意味は分からないという。現代パラン方言において「人間、動物の皮膚」は *quraqin* と言う。

⁹⁹ 項目 326 にある *bana* 「骨」に類似しているが、それらの関連は不明である。現代パラン方言において「枝」は *cida* と言う。

¹⁰⁰ 現代パラン方言では *rudu* と言う。

¹⁰¹ 項目 333 と同一である。現代パラン方言において「くちばし」は *quwaq qubeheni* (mouth bird) と言う。

¹⁰² 現代パラン方言では *qutahi* と言う。

¹⁰³ 現代パラン方言では *pucupux* と言う。

¹⁰⁴ 項目 253 参照。

262	pätui 蛙	<i>patur</i>	<i>qupatur</i> ‘frog’
263	iru 蛇 ¹⁰⁵	---	---
264	tsurux 魚類ノ総名, 蟹	<i>tsurux</i>	<i>qucurux</i> ‘fish’
265*	魚 子 tsurux laqi 魚ノ子 ¹⁰⁶	<i>tsurux laqi</i>	---
266#	kuzun 蝦 ¹⁰⁷	---	6.3 節参照
267	bäbui 豚	<i>babuy</i>	<i>babuy</i> ‘pig’
268	niau 猫	<i>ɲiaw</i>	<i>ɲiyo</i> ‘cat’
269	furiŋ 犬	<i>huliŋ</i>	<i>huliŋ</i> ‘dog’
270	medishi 羊, 山羊	<i>miris</i>	<i>miric</i> ‘goat’
271	lappa 牛, 水牛	<i>lapa</i>	<i>dapa</i> ‘cow’
272*	子 lappa lakki 子牛 ¹⁰⁸	<i>lapa laqi</i>	---
273*	父 lappa tama 牡牛 ¹⁰⁹	<i>lapa tama</i>	---
274*	母 lappa būbu 牝牛 ¹¹⁰	<i>lapa bubu</i>	---
275	lappa tana 赤牛	<i>lapa tanah</i>	<i>dapa tanah</i> (cow STAT.red) ‘a cow with reddish skin’
276	ōlishi 鼠	<i>qolis</i>	<i>qolic</i> ‘mouse’
277	runai 猿	<i>ruŋay</i>	<i>ruje</i> ‘monkey’
278	kannoho, kakannoho 鹿 ¹¹¹	<i>qənuɣ, qaqənuɣ</i>	<i>ruqənuɣ</i> ‘deer’
279	bauzak 豚	<i>baɰɔak</i>	<i>boyak</i> ‘boar’
280	sumai 熊	<i>sumay</i>	<i>sume</i> ‘bear’
281	dakaidisi 豹	<i>rakaydis</i>	<i>rukelic</i> ‘leopard’
282	maina dakaidisi 豹皮	<i>bəynat dakaydis</i>	---
283	masolai 叔父	<i>basuran</i>	<i>qubusuran</i> ‘elder sibling’
284	makairin 妻, 婦人	<i>maqayrin</i>	<i>muqedin</i> ‘woman’
285	sānau 夫, 男	<i>senaw</i>	<i>seno</i> ‘husband’

¹⁰⁵ 現代パラン方言の *quyu* 「蛇」に相当するかもしれないが、音の違いがやや大きい。

¹⁰⁶ 現代パラン方言では *wawa qucurux* (baby fish) と言う。

¹⁰⁷ 現代パラン方言では *bohuy* と言う。

¹⁰⁸ 現代パラン方言では *wawa dapa* (baby cow) と言う。

¹⁰⁹ 現代パラン方言では *tama dapa* 「牡牛」と言う。

¹¹⁰ 現代パラン方言では *bubu dapa* 「牝牛」と言う。

¹¹¹ 現代パラン方言の語頭 *ru* は荒尾の表記において対応する部分が見あたらないが、音節の数は同じように、荒尾の形式では語頭が重複された音節のようにも見える。

286	ama 婿	<i>ama</i>	<i>ama</i> ‘son-in-law’
287	innā 花嫁	<i>ina</i>	<i>ina</i> ‘daughter-in-law’
288	siārek 他人	<i>sieliq</i>	<i>seediq</i> ‘person, other person’
289	da ^g ā 友人 ¹¹²	<i>daŋi</i>	<i>daŋi</i> ‘friend’
290	daudan 老人	<i>rawdān</i>	<i>rudān</i> ‘old people’
291	waewa 女兒	<i>waewa</i>	<i>weewa</i> ‘girl’
292	lēsau 男兒, 蕃丁	<i>risaw</i>	<i>riso</i> ‘boy’
293	lakki 小兒	<i>laqi</i>	<i>laqi</i> ‘child’
294	soazi 妹, 弟	<i>suaōi</i>	<i>suwai</i> ‘younger sibling’
295	masolan 姉, 兄, 曾長	<i>basuran</i>	<i>qubusuran</i> ‘elder sibling’
296	bubu 母	<i>bubu</i>	<i>bubu</i> ‘mother’
297	tama 父	<i>tama</i>	<i>tama</i> ‘father’
298	mādan 親戚	<i>madan</i>	<i>hulumadan</i> ‘sibling of opposite sex’
299	tamuk オ辞ぎ	<i>tamuk</i>	<i>tuhumuku</i> ‘to bow’
300#	uttashi, bāro 舉丸 ¹¹³	---	6.1 節参照
301	痛 腹 mināroho raboashi 腹痛	<i>minarux raboas</i>	<i>mu-narux nbuyas</i> (STAT-sick belly) ‘to have a stomachache’
302*	mahūkishi siārek 死人 ¹¹⁴	<i>mahuqis sieliq</i>	---
303	mināroho būkui 胸痛	<i>minarux bukuy</i>	<i>mu-narux bukuy</i> (STAT-sick back) ‘to have a pain in one’s back’
304*	kumutak tanna 吐血 ¹¹⁵	<i>kumutaq tanah</i>	---
305	sinūnoho 頭髮	<i>sinunux</i>	<i>sumunux</i> ‘hair’
306*	okka sinunoho ハゲ ¹¹⁶	<i>uka sinunux</i>	---
307*	matēroho mināroho 熱病 ¹¹⁷	<i>mutilux munarux</i>	---
308	mināroho daudeak 目病	<i>minarux dawriq</i>	<i>mu-narux doriq</i> (STAT-sick eye) ‘to have a pain in one’s eyes’

¹¹² 荒尾の表記は項目 105 と同一の語を表していると思われる。

¹¹³ 現代パラン方言では *begax* と言う。

¹¹⁴ 現代パラン方言において *seediq mu-hiqin* (person PST-die) と言う。荒尾の表記において「死ぬ」に相当する語は *mahūkishi* であり、語末子音は *s* であると考えられるが、この語は荒尾の項目 484 *mahokin*、項目 172 *mahukin* と同一の語であり、本来の語末は *n* である。なぜこの語において語末を *shi* で表記したかはわからないが、月田尚美 (私信) ではトゥルク方言において *l* は有声歯茎側面摩擦音 [ɮ] で、これが無声化して [ʁ] と発音されることがあると指摘する。荒尾の調査当時のパラン方言にもこのような傾向があったとすれば、[ʁ] を [s] として聞き取った可能性もある。

¹¹⁵ 現代パラン方言において *pu-berih dara* (CAUS-return blood) と言う。

¹¹⁶ 現代パラン方言では *buyuh* と言う。

¹¹⁷ 現代パラン方言では *munarux mutilux* (sickness STAT-hot) と言う。

309	howä 歯グキ ¹¹⁸	---	---
310	rupun 歯	<i>rupun</i>	<i>rupun</i> ‘tooth’
311*	ripun minäroho 歯痛 ¹¹⁹	<i>ripun minarux</i>	---
312	minäroho tsunuh 頭痛	<i>minarux cumux</i>	<i>mu-narux tumux</i> (STAT-sick head) ‘to have a headache’
313	okka pāpak 足ナシ	<i>uka papak</i>	<i>uka papaq</i> (NEG foot) ‘there is no foot’
314#	mahikan 脊セル ¹²⁰	---	6.2 節参照
315	egu hāzi 肥へル ¹²¹	<i>egu heđi</i>	---
316	ma ^a gēroho 腫物	<i>bakiluh</i>	<i>bukiluh</i> (scab)
317	ma ^a gāga 啞, 聾, 吃り	<i>mañajah</i>	<i>mu-ñajah</i> (STAT-dumb) ‘to be dumb, to be stupid’
318*	okka daudeak 盲目 ¹²²	<i>uka dawriq</i>	---
319	pika 跛脚	<i>pika</i>	<i>pika</i> ¹²³ (STAT.shuffle.one’s.feet) ‘to shuffle one’s feet’
320	barebu 小便 ¹²⁴	<i>barebu</i>	<i>rebu</i> ‘urine’
321	tsuri 男根	<i>curi</i>	<i>curi</i> ‘penis (of a child)’
322	pipi 陰門	<i>pipi</i>	<i>pipi</i> ‘vulva’
323	maina 皮膚 ¹²⁵	<i>baynat</i>	---
324	nūnoho 乳汁, 乳房	<i>munuh</i>	<i>munuh</i> ‘breast’
325	pāpak 足	<i>papak</i>	<i>papak, papaq</i> ‘foot’
326#	banā 骨 ¹²⁶	---	6.2 節参照
327	bāga 手	<i>baga</i>	<i>baga</i> ‘hand’
328	raboashi 腹	<i>rabuas</i>	<i>nbuyas</i> ‘belly’

¹¹⁸ 秋谷裕幸氏（私信）によると、「歯茎」を表す閩南語には「歯岸」という言い方があり、後半の「岸 hua^a」が、荒尾の形式と類似しているとのことであった。この項目はもしかしたら閩南語の形式を挙げているのかもしれない。

¹¹⁹ 現代パラン方言では *munarux rupun* (STAT-sick tooth) と言う。項目 310 における荒尾の「歯」の形式は、現代パラン方言の *rupun* と同様、次末音節の母音が *u* (*u* に相当) である。なぜこの項目において、次末音節の母音が *i* になっているのかはわからない。項目 331 にも再度現れるが、ここでも次末音節の母音は *i* となっている。

¹²⁰ 現代パラン方言では *kuwe* (STAT.gaunt) と言う。

¹²¹ 荒尾の表記を現代パラン方言に置き換えると *egu hei* (many,STAT flesh) 「実が多い」となる。現代パラン方言において「脂肪分が多く」肥えた」は *mu-siyang* と言う (STAT-pork)。

¹²² 荒尾の表記を現代パラン方言に置き換えると *uka doriq* (NEG.EXIST eye) 「目が無い」となる。「盲目」は現代パラン方言で *m-budu* (STAT-blind) と言う。

¹²³ *mu-pika* (stat-shuffle.one’s.feet) とも言う。

¹²⁴ 荒尾の表記では語頭に *ba* があるが、現代パラン方言はこの分節音を除いた形式になる。ちなみにこの荒尾の表記は、項目 161 「朝」と同様である。

¹²⁵ 項目 247 参照。

¹²⁶ 現代パラン方言では *buuc* 「骨, 果物の種」と言う。

329	bukui 胸	<i>bukuy</i>	<i>bukuy</i> ‘back, backside’
330	bēraŋi	<i>biras</i>	<i>birac</i> ‘ear’
331	ripun 齒 ¹²⁷	<i>ripun</i>	<i>rupun</i> ‘tooth’
332	mēdin 眉 ¹²⁸	---	---
333	koak 口	<i>quaq</i>	<i>quwq</i> ‘mouth’
334	tsuŋuh 頭	<i>cunux</i>	<i>tunux</i> ‘head’
335	dahean 顔	---	---
336	muhiŋ 鼻	<i>muhiŋ</i>	<i>muhiŋ</i> ‘nose’
337*	鼻孔 muhiŋ bailin 鼻孔 ¹²⁹	<i>muhiŋ bayliŋ</i>	---
338	win 1 ¹³⁰	<i>uin</i>	---
339	daha 2	<i>daha</i>	<i>daha</i> ‘two’
340	tel 3	<i>teru</i>	<i>teru</i> ‘three’
341	seppa 4	<i>sepat</i>	<i>sepat</i> ‘four’
342	rinma 5	<i>rima</i>	<i>rima</i> ‘five’
343	matel 6 ¹³¹	<i>materu</i>	<i>mumuteru</i> ‘six’
344	mapit 7	<i>mapitu</i>	<i>mpitu</i> ‘seven’
345	maseppa 8	<i>masepat</i>	<i>mumusepat</i> ‘eight’
346	magari 9	<i>majari</i>	<i>mujari</i> ‘nine’
347	mahal 10	<i>maxal</i>	<i>maxan</i> ‘ten’
348	mahan ke 11 ¹³²	<i>maxan ke</i>	<i>maxan kiŋan</i> ‘eleven’
349	maposan 20	<i>mapusan</i>	<i>mpusan</i> ‘twenty’
350	mateln 30	<i>materun</i>	<i>muterun</i> ‘thirty’
351	masipad 40	<i>masepatəl</i>	<i>musupatun</i> ‘forty’
352	marinma 50	<i>marima</i>	<i>muriman</i> ‘fifty’
353	matel makaten 60 ¹³³	<i>materu maxadan</i>	<i>mumuteru kumuxalan</i> ‘sixty’

¹²⁷ 項目 310 と同一の語である。

¹²⁸ 現代パラン方言では *uban doriq* (body.hair eye) 「眉」と言う。

¹²⁹ 現代パラン方言では *beliŋ muhiŋ* (hole nose) 「鼻孔」と言う。

¹³⁰ 現代パラン方言では失われた語だが、1910 年代に調査された佐山 (1917: 125) の語彙集にもパラン方言の形式としてウインケンガリ「一」とある。この形式は *uin kiŋal* と転写される。当時は *uin* 「一」が使われていたことがわかる。

¹³¹ 荒尾の形式では接頭辞は *ma-* であるが、現代パラン方言ではこの形式は重複され、さらに母音は弱化を被り *mumu-* となる。この接頭辞は数詞 3 と 4 に付いて、それぞれ倍数の 6 と 8 を表す (項目 345 も参照)。

¹³² 現代パラン方言では *maxan kiŋan* と言う。荒尾の表記では一語目に対応する。二語目は現代パラン方言の第二音節が脱落したような形式を示している。

¹³³ 荒尾の形式の *makaten* は項目 354、項目 355、項目 356 に現れる *mahadan* と同一の語と思われるが、形

354	mapit mahadan 7 0	mapitu maxadan	mpitu kumuxalan ‘seventy’
355	maseppa mahadan 8 0	masepat maxadan	mumusepat kumuxalan ‘eighty’
356	magari mahadan 9 0	majari maxadan	munjari kumuxalan ‘ninety’
357	kekka bakkui 1 0 0 ¹³⁴	keka bekay	kinan kubekay ‘a hundred’
358	karai 網袋, taukan トハ少シク其形ヲ 異ニス ¹³⁵	keray	kere ‘bag for carrying root crops’
359	gāpok 竹ニテ造リタル飯入レ	gepuk	gepuk ‘lunch box’
360*	煙 管 baetak pukan 煙管ヲ掃除スル金ノ 針 ¹³⁶	betaq puqan	---
361*	putun rubui 礎石ナドノ入レ物 ¹³⁷	putuŋ rubuy	---
362*	陰門 chimitsuk pipi 交合 ¹³⁸	cimicuq pipi	---
363	tēbu 霧社蕃 ¹³⁹	tibu	tibu ‘pig pen’
364	pa ^u gawan 万大蕃	panjawan	puluŋawan ‘Atayal of the Pngawan village’
365	bunibun 芭蕉ノ實	bunibun	bulebun ‘banana’
366	kaduruk 額	kaduruk	kuduruk ‘front (of face)’
367	hae ^u ma 舌	hema	hema ‘tongue’
368	dakairashi 頬	daqeras	duqeras ‘face’
369	gudus 髯	ŋudus	ŋudus ‘beard’
370	bakki 祖父, 祖父	baki	baki ‘grandfather, father-in-law, old man’
371	padahuŋ 唇 ¹⁴⁰	padahuŋ	pudahuŋ ‘lips’
372	makeyan siäreŋ 捕虜	bakeyan sieliq	bukey-an seediq (bind-UVL person) ‘to

式が異なる。なぜここだけ異なる形式なのかはわからない。子音 *x* が調音点の同じ *k* に聞こえ、子音 *l* が調音点の同じ *t* と聞こえ、母音 *a* が *e* に聞こえたということなのだろうか。

¹³⁴ 現代バラン方言では *kinan kubekay* (one bundle) と言う。荒尾の表記では一語目の第二音節が対応しない。あるいは荒尾の聞き誤り、書き損じかもしれない。

¹³⁵ 項目 223 に *taukan* (現代バラン方言 *tokan*) と同一の語が掲載されている。

¹³⁶ 荒尾の表記を現代バラン方言に置き換えると、*betaq* (AV.IMP.stick) 「刃物で刺す」と *puqan* 「煙管」になる。現代バラン方言では失われた複合語である。

¹³⁷ 現代バラン方言では *lubuy putuŋ* (pocket match) となる。

¹³⁸ 荒尾の第二語は現代バラン方言の *pipi* 「陰門」に相当する。現代バラン方言では、荒尾の表記の一語目に相当する *c<um>ucucq* (<AV>copulate) を用いるのみである。

¹³⁹ 現代バラン方言では *paran* と言う。

¹⁴⁰ 荒尾の表記では語末に二重母音が表示されているように見受けられるが、現代バラン方言では語末子音は *ŋ* である。これは荒尾が語末の分節音の表記として *n* と記録したのを後に *u* と見誤ったためとも考えられる。

			bind a person'
373	sana 獺 ¹⁴¹	<i>sanar</i>	---
374	rakaibu 山猫	<i>rakaybux</i>	<i>rukebux</i> 'wild cat'
375	tsakushi 樟腦	<i>cakus</i>	<i>cakus</i> 'camphor'
376*	樟 樹 tsakushi funni 樟樹 ¹⁴²	<i>cakus huni</i>	---
377	fuda 雪	<i>huda</i>	<i>huda</i> 'snow'
378	hakauduf 虹 ¹⁴³	<i>hakaw utux</i>	<i>hako utux</i> 'rainbow'
379	rulun 霧, モヤ, 雲 ¹⁴⁴	<i>ruluh</i>	---
380	kare ^g gun 烟	<i>qare^ggun</i>	<i>qure^ggun</i> 'smoke'
381*	mukarau sia 露 ¹⁴⁵	<i>mukarau sia</i>	---
382	sāma 香ノ物 ¹⁴⁶	<i>sama</i>	<i>sama</i> 'vegetable'
383	serun 赤キキレ	<i>seluh</i>	<i>seluh</i> 'red wool'
384	to ^g gorau 鹿ノ毛角	<i>tupuraw</i>	<i>tupuro</i> 'deer horn'
385#	to ^g guui (万社蕃語) 鹿ノ毛角	---	---
386	mashia 旧キ ¹⁴⁷	<i>basiaq</i>	<i>busiyaq</i> 'to pass a long time'
387	kuntāran 角力 ¹⁴⁸	<i>kuntalan</i>	---
388	sapishi 襪	<i>sapis</i>	<i>sapic</i> 'shoe'
389	baānuh 台湾 ¹⁴⁹	<i>baenux</i>	<i>bureenux</i> 'plain (land) '
390	paai 祖母	<i>pai</i>	<i>pai</i> 'grandmother, mother-in-law, old woman'
391*	kakannoho bāgaha 鹿ノ擧丸 ¹⁵⁰	<i>qaqenux begax</i>	---

¹⁴¹ 現代では失われた語であるがトゥルク方言 (Rakaw 他 (編) 2006:728) に同源語と考えられる *sanar* 「獺」がある。

¹⁴² 現代パラン方言では、荒尾の表記の第一語目に相当する *cakus* を用いるだけで「樟」を表す。

¹⁴³ 荒尾の表記では一語として綴られているが、早期パラン方言において *hakaw utux* (bridge god) 「虹」と発音されていたと考えられる。現代パラン方言では *hako utux* と言う。

¹⁴⁴ 現代パラン方言では失われた形式だが、荒尾より 24 年前にセデック語パラン方言の語彙を収集した Bullock (1874: 41) にも、*ruling* 「雲」と記録がある。現代パラン方言では *pulabu* 「雲」と言う。

¹⁴⁵ 荒尾の表記の一語目は、現代パラン方言の *mu-karo* (STAT-cross) 「渡渉する」に相当する。現代パラン方言では *dumerus* 「露」と言う。

¹⁴⁶ 項目 229 と同一の語である。

¹⁴⁷ 現代パラン方言では *cumucac* 「物が古い」と言う。

¹⁴⁸ 現代パラン方言に置き換えてみると、*kun-talan* となりそうであるが、このような形式は現代パラン方言では用いられない。語根 *talay* は「試す、味見する」という意味である。

¹⁴⁹ この語は本来「平地」を意味する。

¹⁵⁰ 現代パラン方言では *begax ruqenux* (testicle deer) 「鹿の擧丸」と言う。「鹿」に相当する語は荒尾の表記では *kakannoho* であり、語頭子音が現代パラン方言の *ruqenux* とは異なる。荒尾の表記は、語頭子音が重複しているようにも見える。

392	shiarake 雷管 ¹⁵¹	---	---
393	okkokin 差支ナン ¹⁵²	uqu---	uqu =naq ‘it does not matter’ (mistake =EMPH)
394	buguraha 新シキ	bugurah	bugurah ‘new’
395*	kutti 青キ「いゝり」ノ実ノ如キ者 食用ニ供ス ¹⁵³	quti	quti ‘feces’
396	wairoho 藤	warux	quwarux ‘vine’
397	nukkaha 苧	nuqah	nuqah ‘thread’
398	ash 木製飯入レ	asu	asu ‘trough’
399	katina 南蕃人	katina	mukatina ‘Bunun tribe’
400	tarahai 柚子	talahi	tulahi ‘shaddock’
401	tsohan 前日	cuxan	cuxan ‘once in the past’
402	iyu 薬 ¹⁵⁴	iyu	iyu ‘medicine’
403	barukui 柿	baluqur	buluqun ‘persimmon’
404	魚 kabuo tsurof 竹製ノ漁具 ¹⁵⁵	kawbu curux	kobu ‘basket for catching fish’
405	建テル 家 simaro sāpa 家ヲ建テ或ハ修復ス ル	simalu sapah	su-malu sapah (DEN=good house) ‘to build/repair a house’
406*	gaga magaeda hini? コゝへ来タコト ガアルカ ¹⁵⁶	gaga magaeda hini	---
407	nākahan 再ヒ ¹⁵⁷	nexan	---
408*	来 再 坐 コゝ āgoa nākahan tareon hinni マタオ イデナサイ ¹⁵⁸	aguh nexan talew hini	---

¹⁵¹ 現代パラン方言では *pedu* 「雷管」と言う。

¹⁵² 現代パラン方言では *uqu=naq* (AV.IMP.mistake=Self) 「構わない、捨ておけ」と言う。荒尾の表記では前半が共通しているようだが、後半の *kin* の部分が合わない。これは調査協力者の李阿輝が、閩南語で「構わない」という表現「不要緊」の「緊」(*kin*) を誤って使ってしまったためではないか。

¹⁵³ 現代パラン方言では *quti rodux* (feces chicken) 「グアノ」と言う。

¹⁵⁴ 閩南語からの借用語である。

¹⁵⁵ 現代パラン方言では荒尾の表記の一語目に相当する *kobu* を用いるだけで「筥」を表す。

¹⁵⁶ 現代パラン方言では *m<un>-eyah=su hini di* (AV<PST>-come=2SG.NOM here PART) と言う。

¹⁵⁷ 現代パラン方言では *texan na* (once yet) と言う。荒尾の挙げた形式も現代パラン方言にはあり、*nexan* という。これは「(未来の) いつか、今後」という意味である。

¹⁵⁸ 現代パラン方言では *aguh teheyag na* (come.here.INT AV.visit yet) と言う。

409*	ドレ inu maro ドレガヨイカ ¹⁵⁹	<i>inu malu</i>	---
410*	何 汝ラ maanu gāzan yamu オマエ等ノ言 葉デ何ト云フ乎 ¹⁶⁰	<i>maanu yamu</i>	<i>ḡaḡan</i> ---
411	太陽 goagi 望遠鏡 ¹⁶¹	<i>gagi</i>	<i>gagi</i> ‘glass’
412*	吾 家 yakko sāpa 私ノ家 ¹⁶²	<i>yaku sapah</i>	---
413*	汝 煙管 ish pukan 汝ノ煙管 ¹⁶³	<i>isu puqan</i>	---
414*	汝 者 ish kakaya 汝ノ者 ¹⁶⁴	<i>isu qaqeya</i>	---
415*	走ル 鹿 wada kannoho 鹿ガ走ル ¹⁶⁵	<i>wada qenux</i>	---
416*	有 米 gāga bāgaha 米ガ有ル ¹⁶⁶	<i>gaga begax</i>	---
417	okka senau 酒無シ	<i>uka sinaw</i>	<i>uka sino</i> (NEG.EXIST wine) ‘there is no wine’
418*	投ゲル 石 chebu batsunuh 石ヲ投ゲル ¹⁶⁷	<i>cebu batsunux</i>	---
419	洗フ 着物 maho lüksī 着物ヲ洗フ	<i>mahu lukus</i>	<i>m-ahu lukus</i> (AV-wash clothes) ‘to wash clothes’
420*	伐ル 木 lēpak funni 木ヲ伐ル ¹⁶⁸	<i>lipaq huni</i>	---
421	mākan ēdau 飯ヲ食フ	<i>mekan idaw</i>	<i>m-ekan ido</i> (AV-eat rice) ‘to eat rice’
422	mima sia 水ヲ飲ム	<i>mimah sia</i>	<i>m-imah qusiya</i> (AV-drink water) ‘to drink water’

¹⁵⁹ 現代パラン方言では *kenu malu* (which STAT.good) と言う。

¹⁶⁰ 現代パラン方言では *maanu kari=namu* (what word=2PL) と言う。

¹⁶¹ 現代パラン方言では *hido* という。

¹⁶² 現代パラン方言では *sapah=mu* (house=1SG.GEN) と言う。

¹⁶³ 現代パラン方言では *puqan=su* (pipe=2SG.GEN) と言う。

¹⁶⁴ 現代パラン方言では *qaqeya=su* (tool=2SG.GEN) と言う。

¹⁶⁵ 現代パラン方言では *t<um>alan ruqenux* (<AV>run deer) と言う。

¹⁶⁶ 現代パラン方言では *niqan beras* (have hulled.rice) と言う。

¹⁶⁷ 現代パラン方言では *q<um>ada butunux* (<AV>throw stone) と言う。

¹⁶⁸ 現代パラン方言では *t<um>atak quhuni* (<AV>cut tree) と言う。

423	食 肉 pukun sēdan 肉ヲ食フ	<i>puqun siđan</i>	<i>puq-un siyay</i> (eat-UVF pork) ‘to eat pork’
424*	mākan da 食シ了 ¹⁶⁹	<i>mekan da</i>	---
425*	オコス 火 pausa puniak 火ヲ燃ヤス ¹⁷⁰	<i>pausa puniq</i>	---
426*	ツクロウ 火 simaro punniak 火ヲツクロヘ ¹⁷¹	<i>simalu puniq</i>	---
427*	負フ 子供 paane lakki 子供ヲ負フ ¹⁷²	<i>paani laqi</i>	---
428*	有 魚 泳グ 水 gāga tsuruh nākan sia 魚ハ水ヲ泳 グ ¹⁷³	<i>gaga tsurux niqan</i> <i>sia</i>	---
429*	男 耕 ス sānau kaneepa 男ガ耕ス ¹⁷⁴	<i>senaw kaneepah</i>	---
430*	女 縫 フ makairin chimaisi 女ガ縫フ ¹⁷⁵	<i>maqailin cimais</i>	---
431	papurai ēdau 飯ヲ炊ク	<i>papuray idaw</i>	<i>pure ido</i> (AV.cook rice) ‘to cook rice’
432*	病 好 mināroho maro 病癒ユ ¹⁷⁶	<i>minarux malu</i>	---
433*	猫 カム 鼠 niau mākan ōrisi 猫ガ鼠ヲ咬ム ¹⁷⁷	<i>niaw mekan olis</i>	---
434*	人 斬 犬 siālick lēpak fūlin 人ガ犬ヲ殺ス ¹⁷⁸	<i>sietiq lipaq huliñ</i>	---

¹⁶⁹ 現代パラン方言では *m<un>-ekan da* (AV<PST>-eat PART) と言う。

¹⁷⁰ 現代パラン方言では *sulamaq* (AV.burn) と言う。

¹⁷¹ 現代パラン方言では *putay-i* (light-UVF/UVL.IMP) と言う。

¹⁷² 現代パラン方言では *paan-un laqi* (carry.on.back-UVF child) と言う。荒尾の挙げた動詞は現代パラン方言では *pa-ani* (carry.on.back-UVF.IMP) または *paan-i* (carry.on.back-UVF/UVL.IMP) と分析される形式に相当する。

¹⁷³ セデック語の感覚では、魚が水中にいるのは当然で、それを取り立てて「泳ぐ」と表現するのは奇妙であるが、あえて現代パラン方言で表現するなら *l<um>-anjay qusiya qucurux* (<AV>swim water fish) と言う。恐らく、調査協力者も誤出に窮して「魚が水にいる」というような意味の表現をしたかったのではないかも。

¹⁷⁴ 現代パラン方言では *k<um>-eepah ruseno* (<AV>work.in.field man) という。

¹⁷⁵ 現代パラン方言では *s<um>-ais muqedin* (<AV>sew woman) と言う。

¹⁷⁶ 現代パラン方言では *malu mumarux* (STAT.good sickness) と言う。

¹⁷⁷ 現代パラン方言では *q<um>-iguc qolic niyo* (<AV>bite mouse cat) と言う。

¹⁷⁸ 現代パラン方言では *s<um>-ipaq huliñ seediq* (<AV>kill dog person) と言う。

435*	焼 肉 tsurin sēdan 焼キタル肉 ¹⁷⁹	<i>culij siđay</i>	---
436#	ma ^a gēlisi 泣ク ¹⁸⁰	---	6.2 節参照
437*	焼 紙 tsurin kalābui 紙ヲ焼ク ¹⁸¹	<i>culij kalabuy</i>	---
438	着 ル 着物 pakusun lūksi 着物ヲ着ル	<i>pakusun lukus</i>	<i>pu-lukus-un lukus</i> (CAUS-clothes-UVP clothes) ‘to wear clothes’
439	ノ ム 酒 mima sēnau 酒ヲ飲メ ¹⁸²	<i>mimah sinaw</i>	---
440	ツケル アカリ pausa punniak アカリヲツケヨ	<i>pausa puniq</i>	---
441	幾何 銭 p i a habāgan 幾銭乎 ¹⁸³	<i>pia habayan</i>	<i>piya hubayan</i> (how.many coin) ‘how much does it cost?’
442*	汝 ima gāzan ish? 名ハ何ト云フ乎 ¹⁸⁴	<i>ima ḡaḡan isu</i>	---
443*	raudoho bairun 鶏ノ卵 ¹⁸⁵	<i>rawdūx baluj</i>	---
444*	竹 葉 batakan sūdu 竹ノ葉 ¹⁸⁶	<i>batakan sudu</i>	
445*	竹 枝 batakan banni 竹ノ枝 ¹⁸⁷	<i>batakan ---</i>	---
446*	来リ āgoa pre ^a gau kāle 来リ話セ ¹⁸⁸	<i>aguh pārenjaw kari</i>	---
447*	来リ 見 āgoa kimita 来リ見ヨ ¹⁸⁹	<i>aguh qimita</i>	---
448*	karau iya egu koa ^k 黙レ ヤカマシク 云フナ ¹⁹⁰	<i>qaraw iya egu</i> <i>quwag</i>	---

¹⁷⁹ 現代パラン方言では *siḡay nu-duh-an* (meat PST-roast-UVL) と言う。

¹⁸⁰ 現代パラン方言では *!-um>ijis* (<AV>cry) と言う。

¹⁸¹ 現代パラン方言では *sulamaq kulabuy* (AV.burn paper) と言う。

¹⁸² 現代パラン方言では *mah-i sino* (drink-UVP/UVL.IMP wine) と言う。

¹⁸³ 現代パラン方言では *piya pila* (how.many money) または *piya neday* (how.many price) と聞くのが一般的である。因みに *neday* 「値段」は日本語からの借用語である。

¹⁸⁴ 現代パラン方言では *ima ḡayan=su* (who name=2SG.GEN) と言う。

¹⁸⁵ 現代パラン方言では *baluj rodux* (egg chicken) と言う。荒尾の表記では項目 193 に同じ表現がある。

¹⁸⁶ 現代パラン方言では *waso butakan* (leaf bamboo) と言う。

¹⁸⁷ 現代パラン方言では *butakan* と言う。

¹⁸⁸ 現代パラン方言では *aguh ma reḡo* (come.here.INT CONJ AV.IMP.speak) と言う。

¹⁸⁹ 現代パラン方言では *aguh ma qita* (come.here.INT CONJ AV.IMP.see) と言う。

¹⁹⁰ 現代パラン方言では *qaro, iya su-quwag* (be.quiet.INT PROH DEN-mouth) と言う。

449*	不 食 フ 飯 inni mākān ēdau 飯ヲ食ハヌ ¹⁹¹	ini mekan idaw	---
450	不 食 フ 飯 ohai mākān ēdau 飯ハ嫌ダ ¹⁹²	uxay mekan idaw	uxe m-ekan ido (NEG AV-eat rice) ‘he will not eat’
451*	何 働 ク maanu kancepa? 何ヲスルカ ¹⁹³	maanu kaneepah	---
452*	行 呼 ブ ussa marawa 行テ呼ベ ¹⁹⁴	usa malawa	---
453*	吾 自 ラ ハタラク yakko nānak kancepa 自分ニスル 195	yaku nanaq kaneepah	---
454*	多ク 食 フ egu ekkan 大食スル ¹⁹⁶	egu ekan	---
455*	呼 ベ 早ク marawa hāle 早ク呼ベ ¹⁹⁷	malawa hari	---
456*	多ク 打 egu baebu 強ク打テ ¹⁹⁸	egu baebu	---
457*	多ク 笑 フ egu mafulisi 大ニ笑フ ¹⁹⁹	egu mahulis	---
458*	好 太陽 maro goagi 好キ天気 ²⁰⁰	malu gagi	---
459*	tsuruf chēkoaha 小キ魚 ²⁰¹	curux cikuh	---
460*	大 鳥 paru bahenni 大ナル鳥 ²⁰²	paru baheni	---

¹⁹¹ 現代パラン方言では *ini ekan ido* (NEG AV.IMP.eat cooked.rice) と言う。

¹⁹² 荒尾のグロスの部分に用いた図は、筆者には判読できなかった文字を示す。

¹⁹³ 現代パラン方言では *ga=su mu-miyak maanu* (PROG=2SG.NOM STAT-do what) と言う。

¹⁹⁴ 現代パラン方言では *usa l<um>awa* (AV.IMP.go <AV>call) と言う。

¹⁹⁵ 現代パラン方言では *yaku=naq* (1SG.PRON=self) と言うだけで「(何らかの動作)を自分で行う (ので手助けは無用)」という意味を表す。

¹⁹⁶ 現代パラン方言では *egu puq-an=na* (STAT.many eat-UVL=3SG.GEN) と言う。

¹⁹⁷ 現代パラン方言では *nahari hari l<um>awa* (quick.INT more.or.less <AV>call) と言う。

¹⁹⁸ 現代パラン方言では *hunek-i* (do.forcefully-UVP/UVL.IMP) または *hunek-i beebu* (do.forcefully-UVP/UVL-IMP AV.hit) と言う。

¹⁹⁹ 現代パラン方言では *mu-hulis paru* (STAT-laugh STAT.big) と言う。

²⁰⁰ 現代パラン方言では *malu karac* (STAT.good sky) と言う。

²⁰¹ 現代パラン方言では *qucurux biciq* (fish STAT.small) と言う。荒尾が用いる *chēkoaha* は現代パラン方言の *tikuh* に当たり「少ない」を意味する。

²⁰² 現代パラン方言では *qubuheni paru* (bird STAT.big) と言う。

461*	赤 花 tanna paheppa 赤ギ花 ²⁰³	tanah pahepah	---
462*	白 砂 ト オ labu kanchia 白ギ砂糖 ²⁰⁴	labu kancia	---
463*	火 炭 pynniak бага 炭 ²⁰⁵	puniq bagah	---
464*	山 高 mabuan habarau 山高シ ²⁰⁶	mabuan habaraw	---
465*	洗 フ 米 sinaui bāgaha 洗ヒタル米 ²⁰⁷	sinawi begax	---
466*	白 米 labu bāgaha 白キ米 ²⁰⁸	labu begax	---
467*	イ ツ 好 太 陽 sinoan maro goagi 何時好キ天気 ニナラウ乎 ²⁰⁹	sinuan malu gagi	---
468*	鶏 子 有 五 raudoho laki gāga linma 鶏ノ卵ガ 五ツアル ²¹⁰	rawdax laqi gaga rima	---
469*	汝 食 乳 ish mākan nūnoho 汝乳ヲ飲メ ²¹¹	isu mekan munuh	---
470*	吾 ノ ム 熱 キ 水 yakko mima matēroho sia 吾ハ湯 ヲ飲ム ²¹²	yaku mimah matihx sia	---
471*	今日 無 シ 雨 sāya okka kumūzoho 今日ハ雨ハ	saya uka qumuōux	---

²⁰³ 現代パラン方言では *pehepah mu-tanah* (flower STAT-red) と言う。

²⁰⁴ 項目 195 参照。

²⁰⁵ 現代パラン方言では *bagah* 「木炭」と言う。荒尾のように火を表す語は特に付けない。項目 112 と同一の語。

²⁰⁶ 現代パラン方言では *bubaro dugiyaq* (STAT.tall mountain.top) と言う。この項目の荒尾の表現と全く同じ表現が項目 169 に挙げられているが、両者の訳出は異なる。

²⁰⁷ 現代パラン方言では *beras s<un>ino* (hulled.rice<UVP.PST>wash) と言う。

²⁰⁸ 現代パラン方言では *beras* と言う。

²⁰⁹ 現代パラン方言では *kunuwān maha malu hari karac* (when AV.FUT.go STAT.good more.or.less sky) と言う。

²¹⁰ 現代パラン方言では *niqan rima bahuy* (have five egg) と言う。

²¹¹ 現代パラン方言では *munuh-i* (breast-UVP/UVL.IMP) と言う。

²¹² 現代パラン方言では *m-imah=ku oyū* (AV-drink=1SG.NOM hot.water) と言う。「湯」を表す *oyū* は日本語からの借用語である。

	降ラス ²¹³		
472	煮 ル 菜 papurai dāma 菜ヲ煮ル	<i>papuray damat</i>	<i>pure damac</i> (cook.AV side.dishes) ‘to cook side dishes’
473	煮 ル 芋 papurai sāli 芋ヲ煮ル	<i>papuray sari</i>	<i>pure sari</i> (cook.AV taro) ‘to cook taro’
474*	汝 社 来ル コ、 幾 yamu dāya eda hinni pira rabi 汝 等ノ蕃社カラコヽニ来ル ニハ幾日カヽル乎 ²¹⁴	<i>yamu dāya eḏah</i> --- <i>hini pira rabi</i>	
475*	来ル コ、 ken ^a gān lābi eda hinni 一晚寝テ来 ル ²¹⁵	<i>kinjan rabi eḏah</i> --- <i>hini</i>	
476*	泊 ル コ、 好 ken ^a gan lābi matake hinni maro 今 晩一晚コヽニ泊ルガヨロシイ ²¹⁶	<i>kinjan rabi mataqi</i> --- <i>hini malu</i>	
477*	殺 ス 人 悪 lipak siārek nakka 人ヲ殺スハ悪事 ナリ ²¹⁷	<i>lipaq sieliq naqah</i> ---	
478*	汝 皆 不可 斬 人 yamu kana i ya pakkun siārek 汝 等人ヲ殺す勿レ ²¹⁸	<i>yamu kana iya</i> --- <i>paqun sieliq</i>	
479*	コヽ 川 話 ス 何 hinni yayun pare ^a gau maanu? 此川 ノ名ハ何ト言フ乎 ²¹⁹	<i>hini yayun pareñaw</i> --- <i>maanu</i>	
480*	ソノ 山 話 ス 何 hish babuyan pare ^a gau maanu? ア ノ山ノ名ハ何ト言フ乎 ²²⁰	<i>hisu babuyan</i> --- <i>pareñaw maanu</i>	
481*	ソノ 社 話 ス 何 hish dāya pare ^a au maanu アノ蕃	<i>hisu dāya pareñaw</i> --- <i>maanu</i>	

²¹³ 現代パラン方言では *ini quyux sayā* (NEG rain now) 「今日は雨が降らない」と言う。

²¹⁴ 現代パラン方言では *piya ali kundalax=su alay m-eyah betaq hini* (how.many day AV.from=2SG.NOM village AV-come until here) と言う。

²¹⁵ 現代パラン方言では *taqi kinjan rabi* (AV.sleep one night) と言う。

²¹⁶ 現代パラン方言では *taqi hini kiya keeman ha* (AV.sleep here that night PART) と言う。

²¹⁷ 現代パラン方言では *naqah s<um>ipaq seediq* (STAT.bad <AV>kill person) と言う。

²¹⁸ 現代パラン方言では *iya paq-i seediq* (PROH kill-UVF/UVLIMP person) と言う。

²¹⁹ 現代パラン方言では *maanu yayun nii* (what river this) と言う。

²²⁰ 現代パラン方言では *maanu lumiqu gaga* (what mountain that) と言う。

社ノ名ハ何ト言フ乎 ²²¹		
482*	夜 眠ル 汝 家 kaaman matake ish sapa 今夜汝ノ 家ニ泊ラン ²²²	kaaman mataqi isu --- sapah
483*	汝 病 快 ish minároho maro? 汝ノ病氣ハ快 キ乎 ²²³	isu minarox malu ---
484*	イツ 彼 死 kinoan ish mahokin 彼ハ何時死セ シ乎 ²²⁴	kinuan isu --- mahuqin
485*	ussa marawa tel soazi 行テ三人ノ蕃 丁ヲコヽヘ呼デ来イ ²²⁵	usa malawa teru --- suaði
486*	来 コヽ eda hinni	eðah hini ²²⁶
487*	コヽ 道 汝 案内 吾 行ク hinni eru ish taiyak yakko maha 此道ヲ案内セヨ ²²⁷	hini elu isu taiyaq --- yaku maha
488*	来 イツ 日 本 人 社 eda kinoan tana tsu`nuh ðāya 汝 yamu? 何時日本人ガ汝等ノ社ニ至 リシヤ ²²⁸	eðah kinuan tanah --- cunux daya yamu
489*	コヽ 曾 長 皆 愛ス 汝 hinni masoran kana kufun yamu コヽノ大人等ハ皆汝等ヲ愛ス ²²⁹	hini basuran kana --- kuxun yamu
490#	lābuy 白布	labuy kulabuy ‘paper’
491	lārisi 赤布	---

²²¹ 現代パラン方言では *maamu alay gaga* (what village that) と言う。

²²² 現代パラン方言では *taqi=ku sapah=su kiya keeman* (AV.sleep=1SG.NOM house=2SG.GEN that night) と言う。

²²³ 現代パラン方言では *ye malu minarox=su di* (Q STAT.good sickness=2SG.GEN PART) と言う。

²²⁴ 現代パラン方言では *un-huqin su-kunwan heyra* (PST-die PST-when 3SG) と言う。

²²⁵ 現代パラン方言では *osa l<um>awa teru riso* (AV.IMP.go <AV>call three male.youth) と言う。

²²⁶ 項目 510 と同一文である。現代パラン方言では *aguh* (come.here.INT) と言う。

²²⁷ 現代パラン方言では *pugula-i=ku elu nii* (guide-UV/P/UVL.IMP=1SG.NOM this) と言う。

²²⁸ 現代パラン方言では *m<un>-eyah su-kunwan tanah tunux alay* (AV<PST>-come PST-when red.STAT head village) と言う。

²²⁹ 現代パラン方言では *kuxun=namu=daha kana qubusuran nii* (like.UVP=2SG.NOM=3PL.GEN all elder this) と言う。

492#	lawā bārai 褐布	lawā balay	lawā bale (cotton true) ‘really cotton-made’
493	lawā ukin 黒布 ²³⁰	lawā---	---
494	karabui 模様付布	kalabuy	kulabuy ‘paper’
495*	吾 欲 見 yakko kufun kumita 吾レハ見タシ 231	yaku kaxun qumita	---
496*	見 吾 kimita yakko 吾ニ見セヨ ²³²	qimita yaku	---
497*	汝 見 ish kimita 汝見ヨ ²³³	isu qimita	---
498*	貸ス tacta yakko 吾ニ貸セ ²³⁴	tai ta yaku	---
499*	知 ル karaun yakko 吾ハ知ル ²³⁵	kalaun yaku	---
500*	不 知 inni karaun ish 汝ハ知ラヌ ²³⁶	ini kalaun isu	---
501*	泣 ク man ²³⁷ erisi yakko 吾ハ泣ク ²³⁷	--- yaku	---
502*	坐 ish tareon 汝坐セヨ ²³⁸	isu talewɔj	---
503*	欲 眠 kufun matake yakko 吾ハ子ムイ ²³⁹	kaxun mataqi yaku	---
504*	ish gāga 彼レハ有ル ²⁴⁰	isu gaga	---
505*	okka yakko 吾レハ無シ ²⁴¹	uka yaku	---

²³⁰ 荒尾の表記にある *ukin* は不明である。

²³¹ 現代パラン方言では *muku=ku q<um>ita* (DES=1SG.NOM <AV>see) と言う。

²³² 現代パラン方言では *pu-quta-i=ku* (CAUS-see-UVP/UVL.IMP=1SG.NOM) と言う。

²³³ 現代パラン方言では *quta-i* (see-UVP/UVL.IMP) と言う。

²³⁴ 現代パラン方言では *ita* (give.me.INT) と言う。因みに荒尾の表記の一語目は現代パラン方言では *ta-e=ta* (see-UVL.HORT=1PL.GEN) 「見てみよう」に対応する。

²³⁵ 現代パラン方言では *kala-un=mu* (know-UVP=1SG.GEN) と言う。

²³⁶ 現代パラン方言では *ini=su kala-i* (NEG=2SG.GEN know-UVP/UVL.IMP) と言う。

²³⁷ 現代パラン方言では *l<um>ijis=ku* (<AV>cry=1SG.NOM) と言う。

²³⁸ 現代パラン方言では *tu-lewɔj* (NONV-sit) と言う。

²³⁹ 現代パラン方言では *mu-tuqeraj=ku* (STAT-sleepy=1SG.NOM) と言う。

²⁴⁰ 現代パラン方言では *gaga heya* (that 3SG) と言う。

²⁴¹ 現代パラン方言では *uka naku* (NEG.EXIST 1SG.GEN.PRON) と言う。

506*	yakko mafulishi 吾レハ喜 ²⁴²	yaku mahulis	---
507*	欲 来 yakko kufun eda 吾レハ来ラン ²⁴³	yaku kaxun eḏah	---
508*	与フ bekki ish 汝ニ与ヘン ²⁴⁴	biqi isu	---
509*	bekki yakko 吾レニ與ヘヨ ²⁴⁵	biqi yaku	---
510*	来 コヽ eda hinni コヽニ来レ ²⁴⁶	eḏah hini	---
511*	汝 来 ish eda sinoan? 汝ハ何時来ル乎 ²⁴⁷	isu eḏah sinuan	---
512*	明日 来 コヽ tsāman eda hinni 明日コヽへ来ル 248	caman eḏah hini	---
513*	明後日 行 社 汝 makaha ussa dāya ish 明後日汝ノ 社ニ往ク ²⁴⁹	makaxa usa dāya isu	---
514*	コレ 何 hinni maanu? コレハ何カ ²⁵⁰	hini maanu	---
515*	コレ コレ 芋 hinni mesi sari コレハ芋デス ²⁵¹	hini mesi sari	---
516*	行 ソコ ussa hish アソコへ行ケ ²⁵²	usa hisu	---
517*	来 幾 日 eda kinoan 幾日ニ来ル乎 ²⁵³	eḏah kinuan	---
518*	往 ドコ 汝 maha inu ish 汝ハ何處へ行ク乎	maha inu isu	---

²⁴² 現代パラン方言では *mu-qaras=ku* (STAT=happy=1SG.NOM) と言う。

²⁴³ 現代パラン方言では *m-eyah=ku* (AV=come=1SG.NOM) と言う。

²⁴⁴ 現代パラン方言では *biq-un=misu* (give-UVP=1SG.GEN:2SG.NOM) と言う。

²⁴⁵ 現代パラン方言では *biq-i=ku* (give-UVP/UVL.IMP=1SG.NOM) と言う。

²⁴⁶ 現代パラン方言では *aguh hini* (come.here.INT her) と言う。

²⁴⁷ 現代パラン方言では *m-eyah=su kumwan* (AV=come=2SG.NOM when) と言う。

²⁴⁸ 現代パラン方言では *m-eyah=ku hini kasun* (AV=come=1SG.NOM here tomorrow) と言う。

²⁴⁹ 現代パラン方言では *maha=ku alay=su mukaxa* (go.FUT=1SG.NOM village=2SG.NOM day.after.tomorrow) と言う。動詞を *m-eyah* 「来る」に変えてもいい。

²⁵⁰ 現代パラン方言では *maanu nii* (what this) と言う。

²⁵¹ 現代パラン方言では *sari nii* (taro this), または *sari kes-un nii* (taro say-UVP this) と言う。

²⁵² 現代パラン方言では *osa hiya* (AV.IMP.go there) 「あそこへ行け」 と言う。

²⁵³ 現代パラン方言では *m-eyah=su kumwan* (AV=come=2SG.NOM when) と言う。

254				
519*	今日 ア ツ イ sāda matēroho 今日ハ暑イ ²⁵⁵	<i>saḍa matihux</i>	---	
520*	今日 寒 イ sāda masekui 今日ハ寒イ ²⁵⁶	<i>saḍa masekay</i>	---	
521*	ソレ 好 hish maro ソレハヨイ ²⁵⁷	<i>hisu malu</i>	---	
522*	コレ 悪 hinni nakka コレハ悪レイ ²⁵⁸	<i>hini naqah</i>	---	
523*	何 故 笑 フ 我 maanu mafūlisi yakko ナゼ我ヲ笑 ブカ ²⁵⁹	<i>maanu mahulis yaku</i>	---	
524*	カレ 怒 i s h maseyan 彼ハ怒テ居ル ²⁶⁰	<i>isu maseyan</i>	---	
525*	汝 maseyan ish? 汝ハ怒テ居ル乎 ²⁶¹	<i>maseyan isu</i>	---	
526*	呼 来 コヽ marawa eda hinni コヽへ呼デ来イ 262	<i>malawa eḍah hini</i>	---	
527*	行 家 彼 話 ス maha sāpa ish pare ^g gau kare 彼ノ 家ニ行テオ話シナサイ ²⁶³	<i>maha sapah isu pareṇaw kari</i>	---	
528*	今日 好 太陽 sāda maro goagi 今日ハ好天気デ ス ²⁶⁴	<i>saḍa malu gagi</i>	---	

²⁵⁴ 現代パラン方言では *maha=su inu* (AV.FUT.go=2SG.NOM where) と言う。

²⁵⁵ 現代パラン方言では *mu-tihux sayā* (STAT-hot now) と言う。

²⁵⁶ 現代パラン方言では *mu-sekay sayā* (STAT-cold now) と言う。

²⁵⁷ 現代パラン方言では *malu kīya* (STAT.good that) と言う。

²⁵⁸ 現代パラン方言では *naqah nii* (STAT.bad this) と言う。

²⁵⁹ 現代パラン方言では *maḥux=su mu-hulis yaku* (why=2SG.NOM STAT-laugh 1SG.PRON) と言う。

²⁶⁰ 現代パラン方言では *mu-seyan heyā* (STAT-angry 3SG.PRON) と言う。

²⁶¹ 現代パラン方言では *ye=su mu-seyan* (Q=2SG.NOM STAT-angry) と言う。

²⁶² 現代パラン方言では *luwan-i hini* (call-UVP/UVL.IMP here) と言う。

²⁶³ 現代パラン方言では *osa teheyaq tikah sapah=na* (AV.IMP.go AV.play a.little house=3SG.GEN) または *da-i teheyaq sapah=na* (pass-UVP/UVL.IMP play.AV house=3SG.GEN) と言う。現代パラン方言では「彼のところへ遊びに行きなさい」と表現した。

²⁶⁴ 現代パラン方言では *malu karac sayā* (STAT.good sky now) と言う。

529*	今日 悪 太陽 sāda nakka goagi 今日ハ悪ヒ天気 デス ²⁶⁵	saḍa naqah gagi	---
530*	喜 プ yakko mafūlisi 私ハ喜ヒマス ²⁶⁶	yaku mahulis	---
531*	悲 シム ish ma ^g ēlisi 彼ハ悲シミマス ²⁶⁷	isu ---	---
532*	静ニスル ish k ā r a u 汝等静ニセヨ ²⁶⁸	isu qaraw	---
533*	腹ガヘル yakko ma o l a i 私ハ腹ガヘリマ シタ ²⁶⁹	yaku mauray	---
534*	慾 眠 yakko kufun matak 私ハ眠クナリ マシタ ²⁷⁰	yaku kaxun mataqi	---
535*	欲 水 yakko kufun kasia 私ハ水ガ欲シ イ ²⁷¹	yaku kaxun qasia	---
536*	ish mināroho 彼ハ病氣デス ²⁷²	isu minarux	---
537*	死 ish mahukin 彼ハ死ニマシタ ²⁷³	isu mahuqin	---
538*	病 快 ish mināroho maro 彼ハ快キ方デ ス ²⁷⁴	isu minarux malu	---
539*	欲 何 kufun maanu ish アナタハ何ヲオ	kaxun maanu isu	---

²⁶⁵ 現代パラン方言では *naqah karac sayā* (STAT.bad sky now) と言う。

²⁶⁶ 項目 506 に同様の表現が載っている。

²⁶⁷ 現代パラン方言では *naqah kaxun=na* (STAT.bad feeling=3SG.GEN) と言う。なお、荒尾の表記の二語目は項目 436 にも挙げた「泣く」と同じ語と考えられる。

²⁶⁸ 現代パラン方言では *qaro* (be.quiet.INT) と言う。

²⁶⁹ 現代パラン方言では *mu-ure=ku* (STAT.hungry=1SG.NOM) と言う。

²⁷⁰ 現代パラン方言では *mu-tuqeray=ku di* (STAT.sleepy=1SG.NOM PART) と言う。

²⁷¹ 現代パラン方言では *muku=ku m-imah qusiya* (DES=1SG.NOMAV=drink water) と言う。

²⁷² 現代パラン方言では *mu-narux heya* (STAT-sick 3SG.PRON) と言う。

²⁷³ 現代パラン方言では *mu-huqin heya di* (PST-STAT.die 3SG.PRON PART) と言う。または *un-huqin* とも言う。

²⁷⁴ 現代パラン方言では *malu munarux=na* (STAT.good sickness=3SG.GEN) と言う。

	望ミデス ²⁷⁵		
540*	生蕃 汝 āran ima ish 汝ハ何社ノ者乎 ²⁷⁶	alay ima isu	---
541*	ドコ 家 汝 i nu sāpa ish? オマエノ家ハ何処 乎 ²⁷⁷	inu sapah isu	---
542*	与エヨ 熱 イ 水 pagesa yakko matēroho sia 私ニ湯 ヲ下サイ ²⁷⁸	pagesa yaku matihux sia	---
543*	コノ 蕃人 吾人 曾 長 hinni āran yakko masolan 此蕃人 ハ私共ノ曾長デス ²⁷⁹	hini alay yaku basuran	---
544*	赤 頭 生蕃 汝 同シク tana tsunuh āran yamu matena 朋友 dange 日本人モ生蕃モ共ニ朋友ナ リ ²⁸⁰	tanah cunuh alay yamu matena daji	---
545*	bekki yakko 私ニ下サイ ²⁸¹	biqi yaku	---
546*	カツテ 往 ク makera mausa ish? アナタハ往タ コトガアリスカ ²⁸²	makela mausa isu	---
547	magaeda 先ツ, 初メニ	magaeda mu-geela (STAT-lead) ‘to guide’	

4. 母音

現代パラン方言の母音を基準とし、荒尾がそれに対しどのような表記を用いているかを、語末音節と次末音節に分けて考察する。荒尾の語彙の前にある番号は、語彙表の項目番号 (3.3 節) を示す。荒

²⁷⁵ 現代パラン方言では *maanu kaxun=su* (what like.UVP=2SG.GEN) と言う。

²⁷⁶ 現代パラン方言では *inu alay=su* (where village=2SG.GEN), または *p<un>eyah=su alay inu* (<PST>AV.come=2SG.NOM village where) と言う。

²⁷⁷ 現代パラン方言では *inu sapah=su* (where house=2SG.GEN) と言う。

²⁷⁸ 現代パラン方言では *biq-i=ku oyū* (give-UVF/UVL.IMP=1SG.NOM hot.water) と言う (項目 470 参照)。荒尾の表記の一語目は現代パラン方言では *pu-tugesā* (CAUS-teach または FUT-teach) 「教えさせる, これから教える」に相当すると考えられる。

²⁷⁹ 現代パラン方言では *seediq nī qubusuran=nami alay* (person this elder=2PL.GEN village) と言う。

²⁸⁰ 現代パラン方言では *musu-daji tanah tunux daha seedeiq daya* (RCPL.AV-friend red.STAT head person uphill) と言う。

²⁸¹ 項目 509 と同様の語釈。

²⁸² 現代パラン方言では *m<un>-osa=su* (AV<PST>-go=2SG.NOM) と言う。

尾の語彙のあとに、現代パラン方言の形式を括弧付きで示す。荒尾の資料には何度か重複して現れる語があり、それぞれ表記が異なることもある。考察に関わる場合はいくつかの表記も分析の対象にする。荒尾の語彙は非イタリック体で表示する。語彙中のひとつの文字を扱う場合も非イタリック体で表示する。一方、現代パラン方言の語彙とそれを構成する分節音はイタリック体で表示する。また、音素を表す場合もイタリック体で表示する。

語末子音としての *s*, *x*, *h* の後に、荒尾の表記では支え母音ともいえる母音が添えられていることがある (5.11 節, 5.12 節, 5.13 節)。これら、荒尾によって聞き取られた支え母音は音声的な現象であり音素ではない。そのため本稿の考察からも省く。

セデック語・パラン方言との比較のためセデック語・トゥルク方言のデータを引用することがあるが、注釈など特記の無い場合はすべて Rakaw 他 (編) (2006) からの引用であることを断っておく²⁸³。また、この文献を含め、先行研究から言語データを引用する際は表記に多少の変更を加えている。

4.1 現代パラン方言における *a*

4.1.1 語末音節

(7) に見られるように現代パラン方言の *a* に対応する表記として、荒尾は *a* (太字で表記) を用いている。

(7) 現代パラン方言の語末音節の *a* と荒尾の *a*²⁸⁴

67 *matara* (*mutara*), 6iya (*hya*), 17 *taeya* (*teheya*), 29 *ussa* (*usa*), 29 *mausa* (*mosa*), 29 *maha* (*maha*), 42 *mapa* (*mapa*), 48 *kēda* (*kīya*), 50 *kera* (*kela*), 59 *atak* (*atak*), 66 *kana* (*kana*), 69 *rita* (*nita*), 70 *mākan* (*mekan*), 73 *marawa* (*mulawa*), 75 *bahan* (*qumbahan*), 77 *pira* (*piya*), 78 *habāgan* (*hubaḡan*), 80 *sepōhan* (*supuhan*), 85 *tsāpan* (*capaḡ*), 86 *wada* (*wada*), 87 *okka* (*uka*), 88 *gāga* (*gaga*), 90 *kimita* (*qumita*), 94 *ima* (*ima*), 98 *aran* (*alaḡ*), 99 *panimūkan* (*pulumukan*), 103 *pausa* (*posa*), 107 *maowashi* (*muḡyas*), 116 *marā^agan* (*sunburagan*), 117 *simada* (*hulumadac*), 143 *pukan* (*puḡan*), 153 *lappa* (*dapa*), 157 *sāya* (*saḡya*), 158 *tsāman* (*caman*), 159 *makaha* (*mukaxa*), 160 *chēga* (*ciga*), 162 *arian* (*diḡyan*), 163 *kaaman* (*keeman*), 164 *sia* (*qusiya*), 166 *funna* (*hunac*), 167 *dāya* (*daya*), 179 *basūkan* (*busukan*), 198 *rāma* (*damac*), 216 *pira* (*pala*), 218 *kanawa* (*qunawan*), 201 *tawak* (*tahawak*), 223 *tuakan* (*tokan*), 228 *gētsan* (*giḡan*), 229 *sāma* (*sama*), 230 *tsubura* (*tubula*), 231 *buna* (*buḡa*), 237 *batakan* (*butakan*), 250 *pāpak* (*papak*), 251 *tama* (*tama*), 279 *bauzak* (*boyak*), 286 *ama* (*ama*), 290 *daudan* (*rudan*), 291 *waewa* (*weewa*), 295 *masolan* (*qubusuran*), 298 *mādan* (*hulumadan*), 301 *rafoashi* (*nbiyas*), 313 *okka* (*uka*), 319 *pika* (*pika*), 327 *bāga* (*baga*), 330 *bērasi* (*birac*), 339 *daha* (*daha*), 341 *seppa* (*sepac*), 342 *rinma* (*rima*), 347 *mahal* (*maxan*), 349 *maposan* (*mpusan*), 354 *mahadan*

²⁸³ Rakaw 他 (編) (2006) では、次末音節より前の音節は母音を表記しないが、本稿では曖昧母音を書き入れるなど、表記上多少の変更を加えている。

²⁸⁴ 現代パラン方言の語末 *-aq* (5.10 節), *-ax* (5.12 節), *-ah* (5.13 節) は荒尾の表記が多様なためそれぞれの子音の節で扱う。

(*kumuxalan*), 364 *pa^gawan* (*pulu^gawan*), 367 *hae^gma* (*hema*), 368 *dakairashi* (*du^geras*), 372 *makeyan* (*bu^geyan*), 377 *fuda* (*huda*), 399 *katina* (*mukutina*), 401 *tsōhan* (*cū^gxan*), 406 *magaeda* (*mugeela*), 407 *nākahan* (*nexan*), 410 *gāzan* (*yayan*), 414 *kakaya* (*qu^geya*), 423 *sēdan* (*sī^gyan*), 453 *nānak* (*hanaq*), 476 *ken^ggan* (*ki^gjan*), 484 *kinoan* (*kun^guan*), 492 *lawā* (*lawā*), 524 *maseyan* (*museyan*), 542 *pagesa* (*putugesā*), 544 *matena* (*muntēna*)

これ以外にも (8) に挙げたように、現代パラン方言の *a* に対して、荒尾が *ä* と *ā* を用いた例もひとつずつ見られた。項目 475 については、荒尾が語末母音を *a* で表記する例も項目 476 に *ken^ggan* として見られたため *ä* と *a* の間に厳密な使い分けはなさそうである。

- (8) 現代パラン方言の語末音節の *a* と荒尾の *ä* または *ā*
287 *innä* (*ina*), 475 *ken^ggān* (*ki^gjan*)

4.1.2 次末音節

現代パラン方言における次末音節の *a* は (9) に挙げたように *a* で表記される。

- (9) 現代パラン方言の次末音節の *a* と荒尾の *a*
2 *lowahai* (*ru^gwahe*), 4 *matara* (*mutara*), 5 *agoa* (*agu^gh*), 7 *paru* (*paru*), 8 *nakka* (*naqah*), 9 *maro* (*malu*), 26 *tanna* (*tanah*), 27 *maha* (*maha*), 35 *simaro* (*sumalu*), 39 *take* (*taqi*), 41 *paane* (*paani*), 42 *mapa* (*mapa*), 50 *karaun* (*kulaun*), 54 *pattashi* (*patis*), 58 *harun* (*halu^gh*), 59 *atak* (*atak*), 60 *matakui* (*mutakun*), 66 *kana* (*kana*), 73 *marawa* (*mulawa*), 74 *pakkun* (*paqun*), 75 *bahan* (*qubahan*), 83 *sinaui* (*sunagi*), 83 *maho* (*mahu*), 86 *wada* (*wada*), 95 *maanu* (*maanu*), 97 *kabu* (*kahabu*), 98 *aran* (*alay*), 105 *dan^ggā* (*daji*), 109 *sikari* (*sukadi*), 113 *habu* (*habik*), 116 *mara^ggan* (*sumburayan*), 117 *simada* (*sumamadac*), 122 *tarashi* (*turasi*), 125 *yayū* (*yayū*), 139 *kaū* (*kayū*), 141 *tamako* (*tumaku*), 153 *lappa* (*dappa*), 159 *makaha* (*mukaxa*), 166 *yayun* (*yayun*), 188 *waru* (*walu*), 192 *daroho* (*darox*), 216 *para* (*pala*), 219 *tawak* (*tahawak*), 236 *tarabush* (*turabus*), 237 *batakan* (*butakan*), 243 *waru* (*walu*), 251 *tama* (*tama*), 254 *tamakui* (*tumaqū*), 259 *padaushi* (*pudaus*), 265 *lakki* (*laqi*), 286 *ama* (*ama*), 339 *daha* (*daha*), 346 *magari* (*muyari*), 347 *mahal* (*maxan*), 354 *mahadan* (*kumuxalan*), 364 *pa^gawan* (*pulu^gawan*), 370 *bakki* (*baki*), 371 *pudahau* (*pudahun*), 376 *tsakushi* (*cakus*), 378 *hakauduf* (*hako utux*), 381 *mukarau* (*mukaro*), 388 *sapishi* (*sapic*), 390 *paai* (*pai*), 398 *ash* (*asu*), 400 *tarahai* (*tuhali*), 410 *yamu* (*yamu*), 412 *yakko* (*yaku*), 430 *chimaisi* (*sumais*), 463 *baga* (*bagah*), 492 *lawā* (*lawā*), 494 *karabui* (*kulabui*), 515 *sari* (*sari*), 527 *kare* (*kari*)

このほか (10) に示したように、現代パラン方言の *a* に対応する表記として荒尾は *ä* も用いている。

(10) 現代パラン方言の次末音節の *a* と荒尾の *ä*

67 häle (*hari*), 12 kälau (*qaro*), 14 habärau (*hubaro*), 18 dārin (*daliŋ*), 30 ninäroho (*munarux*),
40 äʔgan (*aŋan*), 43 ädasi (*adis*), 47 käle (*kari*), 72 kaläbui (*kulabui*), 78 habägan (*hubaŋan*),
80 säpoa (*sapuh*), 85 tsäpan (*capaŋ*), 88 gäga (*gaga*), 112 bäga (*bagah*), 123 bäri (*bubali*),
136 särau (*salo*), 148 säpo (*sapo*), 149 säpa (*sapah*), 152 bäbui (*babui*), 154 pädai (*paye*),
157 säda (*saya*), 158 tsäman (*caman*), 167 däya (*daya*), 184 äran (*alaŋ*), 193 bärün (*baluŋ*),
198 räma (*damac*), 229 säma (*sama*), 250 päpak (*papak*), 262 pätui (*qupatun*), 298 mädan
(*hulumadan*), 317 maʔgäga (*muŋaŋah*), 327 bäga (*baga*), 408 ägoa (*aguŋ*), 410 gäzan (*ŋaŋan*),
453 nänak (*nanaq*), 473 säli (*sari*), 474 räbi (*rabi*), 492 bäräi (*bale*)

荒尾の表記における *a* も *ä* も、現代パラン方言の *a* に対応する。二種類の荒尾の表記にどのような使い分けがあったかは明らかでないが、(11) にあるように同一の語に対し二種類の表記とも用いていることがあり、二つの間に厳密な使い分けがあったわけではないことが推察される。

(11) 現代パラン方言の次末音節の *a* と荒尾の *a* または *ä*

67 agoa, 408 ägoa (*aguŋ*)
463 бага, 112 bäga (*bagah*)
527 kare, 47 käle (*kari*)

さらに (12) にあるように、現代パラン方言の *a* に対応する表記として、荒尾が *ai* を用いる語が一例見られた。トゥルク方言における同源語は *qewanux* 「藤の一種」であるため、歴史的にみても次末音節の母音は *a* の可能性が高く、荒尾の表記は何らかの誤りだろう。

(12) 現代パラン方言の次末音節 *a* と荒尾の *ai*

396 wairoho (*quwanux*)

また (13) にあるように、現代パラン方言の *a* に対応する表記として、荒尾では *oa* を用いているのが項目 174 の *goagi* 「日」であるが、これは 6.2 節で見るようにアタヤル語の形式 *wagi* の影響を受けた可能性があり、[gʷagi] のように発音されていたのかもしれない。それを *goagi* という表記で表そうとしたのだろうか。

(13) 現代パラン方言の次末音節 *a* と荒尾の *oa*

174 goagi (*gagi*)

4.2 現代パラン方言における i

4.2.1 語末音節

以下 (14) にあるように現代パラン方言の *i* に対応する表記として、荒尾は *i* を用いている²⁸⁵。

- (14) 現代パラン方言の語末音節の *i* と荒尾の *i*
- 16 matsairin (*chehedin*), 18 dārin (*daliŋ*), 49 mafūlissi (*muhulis*), 51 inni (*ini*), 67 tsyūrin (*culiŋ*),
81 bekki (*biqi*), 83 sinaui (*sunagi*), 92 hinni (*hini*), 106 kimeki (*kumeeki*), 108 papūrin (*puhuliŋ*),
109 sikari (*sukadi*), 111 kafūrisi (*qubulic*), 121 umuki (*gumuki*), 122 tarashi (*turasi*), 123 bāri
(*bubari*), 129 kumi (*qumi*), 147 rūpi (*rupi*), 156 kumuchi (*qumuti*), 172 mafukin (*muhuqin*),
186 puttinzakaizak (*putiŋyuqeyaq*), 190 bahānni (*qubuheni*), 213 tsuki (*cuqi*), 241 funni (*quhuni*),
245 rehi (*lexi*), 255 kuhin (*kuhiŋ*), 260 kui (*kui*), 265 lakki (*laqi*), 269 fūrin (*huliŋ*), 270 mēdish
(*miric*), 276 ōlishi (*qolic*), 281 dakaidisi (*rukelic*), 284 makairin (*muqedin*), 294 soazai (*suwai*),
315 hazi (*hei*), 321 tsūri (*cūri*), 322 pipi (*pipi*), 337 mūhin (*muhiŋ*), 337 bailin (*beliŋ*), 346
magari (*muqari*), 370 bakki (*baki*), 386 mashia (*busiyaq*), 388 sapishi (*sapic*), 390 paai (*pai*),
395 kutti (*quti*), 411 goagi (*gagi*), 430 chimaisi (*sumais*), 436 ma^gēlisi (*liŋis*), 473 sāli (*sari*)

現代パラン方言における *i* 対し、荒尾の表記では *e* または *ā* (荒尾の *e* と *ā* は同一の音価) を用いている例をそれぞれ (15) と (16) に挙げる。(15) 中の項目 39 に関しては、直前の子音 *q* が母音の低下を引き起こしたと考えられる。

- (15) 現代パラン方言の語末音節の *i* と荒尾の *e*
- 67 hāle (*hari*), 39 take (*taqi*), 47 kāle (*kari*)

- (16) 現代パラン方言の語末音節の *i* と荒尾の *ā*
- 105 dan^gā (*dani*), 138 shūpā (*supih*)

また、それぞれ (17) と (18) に挙げたように、現代パラン方言の *i* に対して、荒尾が二重母音のような表記 *ue* または *ie* を用いる例もひとつずつ見られた。

- (17) 現代パラン方言の語末音節 *i* と荒尾の *ue*
- 1 orōbue (*lebi*)

- (18) 現代パラン方言の語末音節 *i* と荒尾の *ie*

²⁸⁵ 現代パラン方言の語末 *-iq* (5.10 節) と *-ih* (5.13 節) に対し、荒尾は様々な表記を用いている。これらについては、語末に現れるそれぞれの子音についての節で取り上げる。

232 *uchiek* (*ucik*)

さらに (19) にあるように、現代パラン方言の *i* に対応する表記として、荒尾が *a* を用いる語が二つ見られた。

- (19) 現代パラン方言の語末音節の *i* と荒尾の *a*
43 *ādasī* (*adis*), 54 *pattashi* (*patīs*)

項目 54 について、同時代にパラン方言を調査した鳥居 (1900: 104) においても *patash* と記録されている (Ochiai 2018: 126)。そののち語末音節の母音 *a* が *i* に変わる変化が起きたと言える。項目 43 も同様、トゥルク方言の同源語は *adas* と言うことから、パラン方言においても荒尾の調査時は語末母音が *a* であったが、そののち語末母音の *a* が *i* に変わる変化が起きたと言える。

さらに (20) と (21) にあるように、現代パラン方言の *i* に対応する表記として荒尾が *u* または *ai* を用いる例がそれぞれひとつずつ見られた。

- (20) 現代パラン方言の *i* と荒尾の *u*
113 *habu* (*habik*)

- (21) 現代パラン方言の *i* と荒尾の *ai*
400 *tarahai* (*tulahi*)²⁸⁶

項目 113 について、荒尾からやや時代がくだった佐山 (1917) の調査において「ハビカ」(音韻的表記に転記すると *habik*) という形式が記録されており、この時代にも語末母音は *i* である。一方トゥルク方言の同源語は *habuk* と言い、荒尾の表記と同様語末母音が *u* である。そのため、この項目に関して荒尾はトゥルク方言の形式を記録したとも考えられる。項目 400 についてはトゥルク方言の同源語は *talahi* であり、現代パラン方言と同様語末母音は *i* である。そのため荒尾の表記に誤りがあると考えられる。

4.2.2 次末音節

(22) にあるように現代パラン方言の *i* に対応する表記として荒尾は *i* を用いている。

- (22) 現代パラン方言の次末音節の *i* と荒尾の *i*
61 *ya* (*iyā*), 51 *inni* (*ini*), 65 *maitsu* (*mīcu*), 69 *rita* (*nita*), 74 *lipak* (*sipaq*), 76 *brigun* (*burigun*),
77 *pira* (*pila*), 90 *kimita* (*qumita*), 91 *ish* (*isu*), 92 *hinni* (*hini*), 94 *ima* (*ima*), 96 *inu* (*inu*),

²⁸⁶ 直前の子音 *h* の影響によって母音 *a* が挿入された可能性がある。

140 r**i**bau (*ribo*), 162 a**r**ian (*diyan*), 171 s**i**a (*qusiya*), 195 kanch**i**a (*kanciya*), 196 ch**i**mo (*timu*),
 204 m**i**ma (*mimah*), 221 mal**i**ku (*buriku*), 268 n**i**au (*jiyo*), 287 inn**a** (*ina*), 319 p**i**ka (*pika*),
 322 p**i**pi (*pipi*), 342 rin**a** (*rima*), 344 map**i**t (*mpitu*), 399 kat**i**na (*mukutina*), 402 i**y**u (*iyu*),
 441 p**i**a (*piya*)

以下 (23) に挙げたように、現代バラン方言の *i* に対応する表記として荒尾は *ē* を用いている。

(23) 現代バラン方言の次末音節の *i* と荒尾の *ē*

10 ma^gēh**u**i (*mujihun*), 14 rē**r**in (*didin*), 19 chē**r**un (*gucilun*), 21 chēko**a**ha (*tikuh*), 28 machēro**h**o
 (*mutihax*), 48 kē**d**a (*kiya*), 160 chē**g**a (*ciga*), 165 sēp**a**u (*sipo*), 173 ēd**a**si (*idas*), 197 sēd**a**n
 (*sīyan*), 217 lēm**u**k (*limuk*), 228 gēt**s**an (*gicay*), 244 sasēb**u**sh (*susibus*), 270 mēd**i**shi (*miric*),
 292 lēs**a**u (*riso*), 316 ma^gēr**o**ho (*bukiluh*), 330 bē**r**asi (*birac*), 363 tēb**u** (*tibu*), 417 sēn**a**u (*sino*),
 420 lēp**a**k (*sipaq*), 421 ēd**a**u (*ido*)

荒尾の次末音節 *i* と *ē* は両者とも現代バラン方言の *i* に対応するが、荒尾がどのように使い分けたかは明らかでなく、(24) のように両者の表記を用いた語も見られた。

(24) 現代バラン方言の次末音節の *i* と荒尾の *i* または *ē*

74 lip**a**k, 420 lēp**a**k (*sipaq*)

荒尾の表記における *ā* は現代バラン方言で *e* を表すものだが、(25) に挙げたように、現代バラン方言の *i* に対応する例が二語見られた。

(25) 現代バラン方言の次末音節 *i* と荒尾の *ā*

189 ma^gāf**u**i (*bugihun*), 428 nā**k**an (*niqan*)

上の項目 428 の場合、隣接する子音 *q* の影響で母音 *i* が音声的により低い位置の *e* に聞こえたため *ā* を用いて表記したのかもしれない。

荒尾の表記における *e* は現代バラン方言で *e* を表すものだが、以下 (26) のように例外的に *i* に対応する例が二語得られた。

(26) 現代バラン方言の次末音節の *i* 荒尾の *e*

81 bek**i** (*biqu*), 475 ken^g**a**n (*kiqan*)

項目 81 の場合、隣接する子音 *q* によって母音 *i* が引き下げられて、音声的に *e* に近くなった可能性が高い。項目 475 についてだが、母音 *i* を表すのに荒尾が用いた別の文字に *ē* がある。この文字を書

くつもりだったがeの上に符号を忘れたのかもしれない。

4.3 現代パラン方言における u

4.3.1 語末音節²⁸⁷

(27) に見られるように、現代パラン方言の *u* に対応する表記として荒尾は *u* を用いている。

(27) 現代パラン方言の語末音節の *u* と荒尾の *u*

19 chērun (*guciluj*), 22 egu (*egu*), 23 paru (*paru*), 31 mare^ogu (*mudeŋu*), 33 baebu (*beebu*),
44 pakysun (*pulukusun*), 50 karaun (*kulaun*), 53 kufun (*kuxun*), 58 chebu (*cebu*), 58 harun
(*haluj*), 60 matakui (*mutakun*), 61 urun (*uruj*), 65 maitsu (*miicu*), 74 pakkun (*paqun*),
76 brigun (*burigun*), 95 maanu (*maanu*), 96 inu (*inu*), 97 kabu (*kahabu*), 103 rincui (*negun*),
114 tūbu (*tubu*), 135 ruhun (*duhuj*), 137 tūmun (*tumun*), 161 barebu (*murebu*), 166 yayun
(*yayuj*), 170 erru (*ehu*), 172 matakui (*mutakun*), 180 pūkun (*puqun*), 188 waru (*walu*),
189 ma^ogāfui (*bugihun*), 217 lēmuk (*limuk*), 221 maliku (*buriku*), 234 mūdū (*mudu*), 236
tarabush (*turabus*), 239 sūdū (*sudu*), 242 kairun (*qeluj*), 244 sasēbush (*susibus*), 259 padaushi
(*pudaus*), 262 pātui (*qupatin*), 274 būbu (*bubu*), 331 rupun (*rupun*), 361 putun (*putuj*),
362 chimitsuk (*cumucuj*), 363 tēbu (*tibu*), 365 bunebun (*bulebun*), 366 kadūruk (*kuduruk*),
369^ogūdus (*judus*), 375 tsakushi (*cakus*), 378 hakauduf (*hako utux*), 380 kare^ogun (*qurenun*),
402 iyu (*hyu*), 403 barukui (*buluqun*)

(28) にあるように、現代パラン方言の *u* に対応する表記として荒尾が *o* を用いる例も見られた。

(28) 現代パラン方言の語末音節の *u* と荒尾の *o*

9 maro (*malu*), 35 simaro (*sumalu*), 37 tareon (*nuleuj*), 83 maho (*mahu*), 104 puton (*putuj*),
141 tamako (*tumaku*), 196 chimo (*timu*), 359 gāpok (*gepuk*), 412 yakko (*yaku*)

荒尾の調査時は、語末に *o* という音素はなかったと分析される。現代パラン方言では語末に *o* が見られるが、これは二重母音 *aw* に遡るものである。そのため荒尾の調査時において、語末音節において表記された母音 *u* と母音 *o* は対立を成すものではなく、どちらも音素 *u* を表したものである。

(29) にあるように、現代パラン方言の *u* に対して、荒尾の表記において *u* と *o* の両方を用いた語も見られた。これらを明確に使い分けしているわけではないようである。

²⁸⁷ 現代パラン方言において語末が *uh* であるものは、荒尾は様々な表記を用いる。これについては、子音 *h* についての 5.13 節で取り上げる。

- (29) 現代パラン方言の語末音節の *u* と荒尾の *u* または *o*
 361 putun, 104 puton (*putuŋ*)

このほか、現代パラン方言の *u* に対応する表記として、荒尾が *ō*, *ū*, *ũ* を用いる語もそれぞれ (30), (31), (32) に挙げたように少数ながら見られた。

- (30) 現代パラン方言の語末音節の *u* と荒尾の *ō*
 100 tarō (*tehu*)

- (31) 現代パラン方言の語末音節の *u* と荒尾の *ū*
 115 kulū (*kulu*)

- (32) 現代パラン方言の語末音節の *u* と荒尾の *ũ*
 125 yayũ (*yayu*), 139 kaũ (*kayu*)

さらに、現代パラン方言の *u* に対応する表記として、荒尾が二重母音のような表記 *au*, *an*, *uo* を用いる例も (33), (34), (35) に挙げたようにひとつずつ見られた。なぜこのような表記を用いたのかはわからない。

- (33) 現代パラン方言の語末音節の *u* と荒尾の *au*
 371 pudahau (*pudahun*)

- (34) 現代パラン方言の語末音節の *u* と荒尾の *an*
 168 babyuan (*bubuyu*)

- (35) 現代パラン方言の語末音節の *u* と荒尾の *uo*
 404 kabuo (*kobu*)

次に (36) にあるように現代パラン方言での *u* (太字で示す) に対応する表記が、荒尾の表記では抜けている例が見られた²⁸⁸。

- (36) 現代パラン方言の語末音節の *u* と荒尾の無表記
 91 ish (*isu*), 299 tamuk (*tuhumuku*), 340 tel (*teru*), 344 mapit (*mpitu*), 398 ash (*asu*)

²⁸⁸ 次末音節の *u* が脱落している例も一つだけ見られた。項目 181 luksi (現代パラン方言 *lukas*) である。トゥルク方言の同源語も *lukas* であるため、荒尾の表記に母音の書き落としが認められる。また、語末子音の直前の母音が抜け落ちた例も見られた。項目 350 mateln (現代パラン方言 *mu-teru-n*) である。この語は現代パラン方言の *teru* 「三」から派生されたものである。

これらはすべて、現代パラン方言において後続する子音を伴わない開音節である。これらはトゥルク方言の同源語においても、語末音節の母音に *u* が存在している。トゥルク方言は順に *isu*, *təhəmuku*, *təru*, *pinu*, *asu* となる。そのため荒尾の表記においてこの母音が抜け落ちたということができる。

4.3.2 次末音節

以下 (37) に挙げたように現代パラン方言の *u* に対応する表記として荒尾は *u* を用いている。

- (37) 荒尾の次末音節の *u* と現代パラン方言の *u*
- 32 mahuriya* (*muhuriq*), 61 urun (*uruy*), 53 kufun (*kacun*), 104 puton (*putuy*), 111 kafurisi (*qubulic*), 121 umuki (*gumuki*), 126 baruku (*butuku*), 129 kumi (*qumi*), 130 puru (*puru*), 135 rufun (*duhuy*), 156 kumuchi (*qumuti*), 166 funna (*hunac*), 172 mafukin (*muhugin*), 176 maurai (*muure*), 186 putin (*putij*), 210 ush (*usuk*), 213 tsuki (*cuqi*), 222 bunnaha (*bunuh*), 225 ru^agai (*ruje*), 230 tsubura (*tubula*), 231 buna (*buja*), 232 uchiek (*ucik*), 247 funni (*quhuni*), 255 kuhin (*kuhin*), 300 uttashi (*utaq*), 304 kumutaq (*mutaq*), 360 pukan (*puqan*), 361 putun (*putuy*), 377 fuda (*juda*), 378 hakauduf (*hako utux*), 395 kutti (*quti*), 397 nukkaha (*nugah*), 403 barukui (*buluqun*), 452 ussa (*usa*)

以下 (38) に挙げたように、現代パラン方言の *u* に対応する表記として荒尾は *u* も用いている。

- (38) 現代パラン方言の次末音節の *u* と荒尾の *u*
- 3 kumuzoyo (*qumuyux*), 36 papurai (*pure*), 38 tutsui (*tutuy*), 44 pakysun (*pulukusun*), 49 mafylissi (*muhulis*), 99 panimukan (*pulumukan*), 101 tsunux (*tunux*), 108 papurin (*puhulij*), 114 tibu (*tubu*), 124 puniak (*puniq*), 127 batsunuh (*butunux*), 137 tumun (*humun*), 143 pukan (*puqan*), 147 rupi (*rupi*), 168 babuyan (*bubuyu*), 179 basukan (*busukan*), 180 pukun (*puqun*), 181 sinaruksi (*sino lukus*), 234 mydu (*mudu*), 239 sudu (*sudu*), 256 tsunmiyaka (*cunmiq*), 257 supuhu (*pucupux*), 260 kui (*kui*), 264 tsuruh (*qucurux*), 269 furin (*hulij*), 280 sumai (*sune*), 296 bubu (*bubu*), 302 mahukishi (*muhugin*), 303 bukui (*bukuy*), 305 sinunoho (*sununux*), 310 rupun (*rupun*), 321 tsuri (*curi*), 336 muhin (*muhij*), 361 rubui (*lubuy*), 366 kaduruk (*kuduruk*), 369 gjudus (*jjudus*), 394 buguraha (*bugurah*), 419 luksi (*lukus*), 435 tsurin (*culij*), 469 nunoho (*nunuh*)

以下 (39) に挙げたように、現代パラン方言の *u* に対応する表記として荒尾は *o* も用いている。

- (39) 荒尾の次末音節の *o* と現代パラン方言の *u*
- 87 okka (*uka*), 107 maowashi (*muuyas*), 177 raboasi (*nbuyas*), 182 pokaraudoho (*puqan rodux*),

252 koak (*quwaq*), 283 masolai (*qubusuran*), 294 soazi (*suwai*), 349 maposan (*mpusan*), 384 to^ograu (*tuguro*), 450 ohai (*uxe*), 484 mahokin (*mu^huqin*), 517 kinoan (*kuⁿuwan*), 533 masolai (*mu^ure*)

以上のように、荒尾の表記における *u* と *o* と *y* はすべて現代パラン方言の *u* に対応する。しかし、これらに使い分けがあったかどうかは不明である。(40) のように荒尾が *o* と *u* の両方を用いる語、(41) のように *u* と *ü* の両方を用いる語、(42) のように *o* と *u* と *ü* のすべてを用いる語が見られた。

(40) 現代パラン方言の次末音節の *u* と荒尾の *o* または *u*
533 maolai, 176 maurai (*mu^ure*)

(41) 現代パラン方言の次末音節の *u* と荒尾の *u* または *ü*
360 pukan, 143 p^ykan (*pu^uan*)

(42) 現代パラン方言の次末音節の *u* と荒尾の *o* または *u* または *ü*
484 mahokin, 172 ma^fukin, 302 ma^hukishi (*mu^huqin*)

現代パラン方言の *u* に対応する表記として、荒尾が *ü* を用いる例が (43) に挙げたように一例見られた。

(43) 現代パラン方言の次末音節の *u* と荒尾の *ü*
138 sh^üpā (*su^upih*)

また、現代パラン方言の *u* に対応する表記として、荒尾が *ö* を用いる例が (44) に挙げたように一例見られた。

(44) 現代パラン方言の次末音節の *u* と荒尾の *ö*
80 sep^öhan (*su^upuhan*), 401 ts^öhan (*cuxan*)

このほか、現代パラン方言の *u* に対応する表記として、(45) にあるように荒尾が *i* を用いる例も一つ見られた²⁸⁹。

(45) 現代パラン方言の次末音節の *u* と荒尾の *i*

²⁸⁹ 項目 331 ripun (現代パラン方言 *ru^upuⁿ*) もこの例外に含まれるが、同様の語が項目 310 では *ru^upuⁿ* として載っている。

この形式の語根は、現代パラン方言において *cuciq* である。これは *cuq* が本来の語根であり、この語頭子音と母音を重複して作られた形式が *cuciq* だと推測される。そうだとすれば、次末音節における母音は *u* だということになる。また、荒尾の表記では語頭子音が *ch* であり、この表記は口蓋化していることを示すものである (5.5 節参照)。なぜ口蓋化したかはわからないが、この子音の口蓋化につられて母音も *i* のように聞こえた可能性もある。

さらに (46) にあるように、現代パラン方言の *u* が荒尾の表記において二重母音 *au* になる語が一例見られた。

- (46) 現代パラン方言の次末音節 *u* 荒尾の *au*
290 *claudan* (*rudan*)

この語については、トゥルク方言の形式も *rudan* であり、現代パラン方言と同一の形式である。そのため荒尾の表記が誤っていると考えられる。

4.4 現代パラン方言における *e*

4.4.1 語末音節

(47) に挙げたように現代パラン方言の *e* に対応する表記として荒尾は *ai* を用いている。これは二重母音 *ay* を表すと考えられる。

- (47) 現代パラン方言の語末音節の *e* と荒尾の *ai*
21 *lowahai* (*ruwahe*), 36 *papurai* (*pure*), 63 *bārai* (*bale*), 154 *pādai* (*paye*), 225 *ru^hgai* (*ruje*),
280 *sumai* (*sume*), 358 *karai* (*kere*), 450 *ohai* (*uxe*), 533 *maolai* (*maure*)

また、(48) に挙げたように現代パラン方言の *e* に対応する表記として、荒尾が *ac* を用いる語が一例見られた。これも二重母音の *ay* を表していると考えられる。

- (48) 現代パラン方言の語末音節の *e* と荒尾の *ac*
41 *paanae* (*paane*)

4.4.2 次末音節

(49) に挙げたように現代パラン方言の *e* は、荒尾の表記でも *e* を用いている。

(49) 現代パラン方言の次末音節の *e* と荒尾の *e*

7 *egu* (*egu*), 3 *sakenoho* (*sukenux*), 17 *taeya* (*teheya*), 27 *masekui* (*musেকui*), 31 *mare^agu* (*mudeju*), 33 *barebu* (*beebu*), 37 *tareon* (*nuleun*), 45 *masekan* (*musেকan*), 47 *pare^agau* (*purejo*), 50 *kera* (*kela*), 71 *chebu* (*cebu*), 103 *rineui* (*negun*), 106 *kimeki* (*kameeki*), 161 *barebu* (*murebu*), 161 *eda* (*eyah*), 170 *erru* (*elu*), 178 *mate^agi* (*muterji*), 245 *rehi* (*lexi*), 340 *tel* (*teru*), 341 *seppa* (*sepac*), 365 *bunibun* (*bulebun*), 360 *kare^agun* (*qurejun*), 406 *magaeda* (*mugeela*), 429 *kancepa* (*kaneepah*), 454 *ekkan* (*ekan*), 460 *bahenni* (*qubuheni*), 461 *paheppa* (*pehepah*), 515 *mesi* (*mesa*), 542 *pagesa* (*putugesas*), 544 *matena* (*muntena*), 372 *makeyan* (*bukeyan*), 291 *waewa* (*weewa*)

現代パラン方言の *e* に対応する表記として, (50) に挙げたように荒尾は *ā* も用いている。

(50) 現代パラン方言の次末音節の *e* と荒尾の *ā*

20 *dakahāyan* (*deheran*), 62 *babāriak* (*mberiq*), 70 *mākan* (*mekan*), 187 *barābare* (*bulebun*), 190 *bahānni* (*qubuheni*), 200 *bāgaha* (*begax*), 285 *sānau* (*seno*), 288 *siāreck* (*seediq*), 359 *gāpok* (*geputuk*), 389 *baānuh* (*bureenux*), 407 *nākahan* (*nexan*)

荒尾の表記の *ā* と *e* はどちらも現代パラン方言の *e* に対応する。以下 (51) のように二種類とも用いた語も見られたため, 明確な使い分けをしているわけではないようである。

(51) 現代パラン方言の次末音節の *e* と荒尾の *ā* または *e*

187 *barābare*, 365 *bunibun* (*bulebun*)

また (52) にあるように現代パラン方言の *e* が, 荒尾の表記では *a* で現れる例が 8 語見られた²⁹⁰。

(52) 現代パラン方言の次末音節の *e* と荒尾の *a*

100 *tanō* (*telu*), 144 *po^agara* (*pujerah*), 163 *kaaman* (*keeman*), 278 *kannoho* (*ruenux*), 315 *hazi* (*hei*), 357 *bakkui* (*bekaj*), 358 *karai* (*kere*), 414 *kakaya* (*quqeya*)

荒尾が *e* という音を表すのに用いた表記のうちのひとつが *ā* である。そのため, これらの例は単にバーの書き忘れだったのかもしれない。または隣接する子音が *q* の場合, その影響で本来の *e* が音声的により低い位置で現れたため, 荒尾は *a* と表記した可能性もある。この可能性が疑われるのが項目 278 と項目 414 である。項目 315 についても, 隣接する *h* の影響で母音が引き下げられたのかもしれないが, そのほかについてはなぜ期待される *e* ではなく *a* として現れるかはわからない。

このほか, (53) に挙げたように現代パラン方言の *e* が, 荒尾の表記で *ō* となる例が一例だけ見られ

²⁹⁰ パラン方言における次末音節の *e* はタロコ方言の同源語との比較により, セデック祖語の **a* に遡る。

た。なぜこのような表記になったかはわからない。

- (53) 現代パラン方言の次末音節の *e* と荒尾の *ō*
1 orōbue (*lebi*)

次に、現代パラン方言の単母音 *e* が荒井の表記において二重母音になる例を見る。(54) に挙げた例では、現代パラン方言の *e* が荒尾の表記では *ai* に対応している。そのため荒尾の調査時代には次末音節二重母音 *ay* が存在したが、現代パラン方言では *e* に変わったことがわかる。

- (54) 現代パラン方言の次末音節の *e* と荒尾の次末音節 *ai*²⁹¹
16 matsairin (*cehedin*), 227 bairoaha (*beluh*), 242 kairun (*qelun*), 281 dakaidsi (*rukelic*), 284 makairin (*muqedin*), 368 dakairashi (*duqeras*), 374 rakaibu (*rukebux*)

このほか、(55) に挙げたように現代パラン方言の *e* に対応する表記として荒尾が *ae* を用いる語が二例みられた。

- (55) 現代パラン方言の次末音節の *e* と荒尾の *ae*
360 baetak (*betaq*), 367 hae^ama (*hema*)²⁹²

項目 360 についてトゥルク方言における同言語は *baytaq* 「刺す」であることから、荒尾の調査時代のパラン方言は次末音節に二重母音 *ay* を有していたことがわかる。項目 367 についてトゥルク方言における同源語は *hama* 「舌」である。そのため次末音節の母音は二重母音 *ay* に遡らない。荒尾の表記として期待されるのは *e* であるが、ここでは *a* が挿入されている。これは語頭子音 *h* の影響で母音が低く発音され *ae* のように聞こえたためかもしれない。

²⁹¹ 項目 487 にある *taiyak* (*teheyaq*) は、荒尾の表記の *ai* が現代パラン方言の第一母音の *e* または第二母音の *e* に対応しているように見える。推測にすぎないが、歴史的な由来は *ta-idaq* (NONV-go.play) であったのかもしれない。そして、語根の *i* が直前の母音 *a* と一体化して二重母音 *ay* となった可能性がある。また、*teyaq* が期待される現代パラン方言の形式であるが、第一音節の後に突発的に *he* が挿入されたと見なせるのではない。また、項目 186 *zakaizak* (*yugeyaq*) では、荒尾の表記の *ai* が現代パラン方言の *e* に対応しているように見えるが、実際は歴史的な曖昧母音が *e* に変わった例である。この語は *yaq* (古くは *daq*) を完全重複して作られた歴史的重複語 (*daqdaq*) であり、重複の境に生じる子音連続を避けるために曖昧母音が挿入される (*daqdaq*)。この母音は次末音節に当たるため現代パラン方言では *e* で現れる。また、項目 337 *bailin* (*belin*) は一見次末音節の *ai* が現代パラン方言で *e* に変わったように見えるが、タロコ方言の同源語は *balij* 「穴」であることから、パラン方言の *e* は *a* に由来することがわかる (セデック祖語として **bolij* が建てられる)。

²⁹² 直前の子音 *h* の影響で母音が低い位置で発音されたため *a* が挿入された可能性がある。

4.5 現代パラン方言における *o*

4.5.1 語末音節

(56) に挙げたように、現代パラン方言の *o* に対応する表記として荒尾は *au* を用いている。これは二重母音 *aw* を表していると考えられる。

- (56) 現代パラン方言の語末音節の *o* と荒尾の *au*
12 *kālau* (*qaro*), 14 *habālau* (*hubaro*), 136 *sārau* (*salo*), 140 *ribau* (*ribo*), 165 *sēpau* (*sipo*),
199 *ēdau* (*ido*), 261 *parabau* (*purobo*), 268 *niau* (*ŋijo*), 285 *sānau* (*seno*), 378 *hakauf* (*hako*
utux), 281 *mukarau* (*mukaro*), 384 *to^ggorau* (*ŋujuro*), 417 *sēnau* (*sino*), 446 *pare^ggau* (*pureŋo*)

ただし (57) に挙げたように、一例だけ現代パラン方言の *o* が荒尾の表記においても *o* で現れる例が見られた。

- (57) 現代パラン方言の語末音節の *o* と荒尾の *o*
148 *sāpo* (*sapo*)

4.5.2 次末音節

(58) にあるように現代パラン方言の *o* に対応する表記として荒尾は *au* を用いている。これは二重母音を表すと考えられる。このことから、荒尾の調査時代には次末音節二重母音 *aw* が存在していたが、現代パラン方言では *o* に変わったことがわかる。

- (58) 現代パラン方言の次末音節の *o* と荒尾の *au*²⁹³
15 *rauka* (*culokah*), 29 *mausa* (*mosa*), 103 *pausa* (*posa*), 151 *raudoho* (*rodutux*), 223 *taukan*
(*tokan*), 308 *daudeak* (*doriq*)

また、現代パラン方言の *o* が荒尾の表記では *a* で現れる例が (59) に挙げたように 2 語見られた。なぜこのような表記を用いたかはわからない。

- (59) 現代パラン方言の次末音節 *o* と荒尾の *a*
261 *parabau* (*purobo*), 404 *kabuo* (*kobu*)

現代パラン方言の次末音節 *o* は二重母音 *aw* に遡るため、*aw* が期待される。そのため、*aw* であつ

²⁹³ 項目 29 と項目 103 は歴史的に見て、それぞれ *ma-usa* (STAT-go) と *pa-usa* (CAUS-go) に遡る。そのため語根 *usa* の第一音節に強勢があったはずであるがその後、直前の母音 *a* と一体化し、二重母音 *aw* となったと考えられる。

たがものが *a* と表記されたと考えられる。項目 404 の場合、トゥルク方言の同源語では *kawbu* (Pecoraro 1977: 108) 「魚を採る容器」であり、次末音節が二重母音 *aw* として現れている。項目 261 については、トゥルク方言の同源語は *kərubaw* である。次末音節は *u* である。これは恐らく、トゥルク方言の形式のように、早期のパラン方言でも次末音節母音は *u* であったが、語末音節の *o* に同化したのではないだろうか。

このほか、現代パラン方言の *o* が荒尾の表記では *ō* で現れる例が (60) に挙げたように 1 語見られた。

- (60) 現代パラン方言の次末音節 *o* 荒尾の *ō*
276 *ōlishi* (*golic*)

この語についてのトゥルク方言における同源語は *qawlit* であり、次末音節は二重母音 *aw* である²⁹⁴。このことから、パラン方言の形式における次末音節も二重母音 *aw* に遡るはずである。実際に (50) では荒尾の表記に二重母音が用いられている。しかしこの例に限り、荒尾の表記に *o* であることから、この荒尾の調査時にすでに *o* 変わっていたことが予測される。しかも荒尾の表記では語頭子音 *q* が落ちている。

4.6 現代パラン方言における *uy*

現代パラン方言の語末音節における二重母音 *uy* は、荒尾の表記では (61) に挙げたように *ui* に対応する。

- (61) 現代パラン方言の語末音節の *uy* と荒尾の *ui*
27 *masekui* (*musekay*), 38 *tutsui* (*tutay*), 72 *kalābuy* (*kulabay*), 142 *nybuy* (*lubuy*), 216 *bukuy* (*bukay*), 254 *tamakui* (*tumaqay*), 267 *bābui* (*babay*), 357 *bakkui* (*kubekay*)

4.7 現代パラン方言の母音と荒尾の表記の対応のまとめ

ここまで次末音節並びに語末音節において、現代パラン方言に対応する荒尾の表記を検討してきた。それらのまとめを表 2 に示す。[] 内の数字は当該表記の頻度を表す。

表 2 荒尾の母音表記と現代パラン方言の対応のまとめ

現代次末	荒尾	現代語末	荒尾
<i>a</i>	<i>a</i> [73], <i>ä</i> [38], <i>oa</i> [1], <i>ai</i> [1]	<i>a</i>	<i>a</i> [90], <i>ä</i> [1], <i>ā</i> [1]

²⁹⁴ 正確に言えば、Rakaw 他 (編) (2006) における表記は *qawlit* である。この字典に見られる、次末音節の *aw* は歴史的に *aw* に遡るものであることを確認している。そのためここでは *qawlit* という表記を提示している。

<i>i</i>	<i>i</i> [28], <i>ē</i> [21], <i>ā</i> [2], <i>e</i> [2]	<i>i</i>	<i>i</i> [48], <i>e</i> [3], <i>ā</i> [2], <i>ue</i> [i], <i>ie</i> [1], <i>a</i> [2], <i>u</i> [1], <i>ai</i> [1]
<i>u</i>	<i>u</i> [40], <i>u</i> [34], <i>o</i> [13], <i>ō</i> [2], <i>i</i> [2], <i>ū</i> [1], <i>au</i> [1]	<i>u</i>	<i>u</i> [51], <i>o</i> [9], 無表記 [5], <i>ō</i> [1], <i>u</i> [1], <i>ū</i> [2], <i>au</i> [1], <i>an</i> [1], <i>uo</i> [1]
<i>e</i>	<i>e</i> [32], <i>ā</i> [11], <i>a</i> [8], <i>o</i> [1] / <i>ai</i> [7], <i>ae</i> [2]	<i>e</i>	<i>ai</i> [9], <i>ae</i> [1]
<i>o</i>	<i>a</i> [2], <i>ō</i> [1] / <i>au</i> [6]	<i>o</i>	<i>o</i> [1] / <i>au</i> [14]
---		<i>uy</i>	<i>ui</i> [8]

現代パラン方言の次末音節の*e*と*o*に対する荒尾の表記は二種類に大別される。この二種類を表中ではスラッシュによって分別している。前者は単母音系列（*e*と*o*に相当）であり、後者は二重母音系列（*ay*と*aw*に相当）である。現代パラン方言の語末音節の*o*にも二種類見られたが、単母音系列は一例のみであった。

現代パラン方言の次末音節の*o*に相当する荒尾の単母音系列の表記は*a*と*ō*があるものの、例は極めて少ない。しかも*a*を用いたものは荒尾の聞き損じまたは書き損じが疑われる。そのため、荒尾の調査時代において次末に*o*は見られず（一例の*ō*を除くが）、*aw*が見られると言える。

現代パラン方言の次末音節の*e*に相当する荒尾の表記は単母音系列（*e*に相当）と二重母音系列（*ay*に相当）のどちらも見られる。単母音系列について歴史的な観点から言えば、曖昧母音に遡るものである（Ochiai 2018）。単母音系列として荒尾の表記では*e*と*ā*を多く用いているが、これらの音価については〔*e*〕を表すものなのか、それとも歴史的により古い音価の〔*ə*〕を表すものなのかはよくわからない。

一方、現代パラン方言の語末の*e*と*o*では、一例の例外を除き、荒尾の表記は二重母音系列のみ用いている。これらから、荒尾の調査時代には次末音節・語末音節ともに二重母音 *ay* と *aw* が見られたが、これらは現代パラン方言において次末音節・語末音節ともにそれぞれ*e*と*o*に変わったことがわかる。

次に、荒尾の語彙に見られた発音区別符号について考える。発音区別符号の付いた文字は6種見られた（*ā*, *ā*, *ē*, *ō*, *u*, *ū*）。これら発音区別符号を用いた文字は少数の例外を除き、次末音節に現れる。そのため符号文字の使用は次末音節に強勢があることに関わると考えられる。次末音節は他の音節に比べ明瞭に、音声的に強くまたは時間的に長く、発声されることが、音の多様な現れとしてとらえられ、母音の表記を多様にしたのではないのか。ただ（62）にあるように語末音節にも少数ながら符号文字が使われていた。

(62) 語末音節に見られる荒尾の符号文字

287 innā (*ina*), 105 dan^ggā (*danji*), 138 shūpā (*supih*), 475 ken^ggān (*kinan*), 100 tarō (*telu*),
115 kulū (*kulu*), 125 yayū (*yayyu*), 139 kaū (*kayyu*)

4.8 荒尾の表記に見られる前次末音節母音について

現代パラン方言において、強勢が置かれる次末音節より前の音節における母音は弱化し *u* として現れる。また、前次末音節が母音から始まる場合、この母音が脱落するという音韻規則がある。そのため、前次末音節の母音が本来は何であったかを知るのは難しいことが多い。しかし、荒尾の表記には前次末音節が未だ脱落していない形式、未だ弱化を受けていない形式を示していると思われるものが見受けられる。ここでは、前次末音節の歴史的母音について考察する。

4.8.1 母音から始まる場合：音韻規則の未適用

楊 (1976) は、1970 年代のパラン方言について音韻規則を考察した論文だが、それらの規則の一つに、前次末音節が母音から始まる語に関するものがある。このような音素配列はパラン方言では許容されないため、前次末音節の母音が削除されるという規則である。例えば、語根 *iriq* 「体で圧迫する」という語に対し、接尾辞 *-i* (2 節参照) を附加すると *uriqu-i* となることが期待されるが、前次末音節が母音から始まるために、実際はこの母音が削除されて *riq-i* となる。しかし、荒尾の調査時期には、(63) にあるようにこの規則が適用されていなかったことを示す例が見られた。

- (63) 前次末音節が母音始まりの語における荒尾の前次末母音の保存
1 *oröbuc* (*lebi*, ***ulebi*), 202 *arian* (*diyan*, ***adiyan*)²⁹⁵

項目 1 であるが、現代パラン方言においてこの語根は *eluk* 「閉める、閉まる」(接尾辞が付加する際は語末 *k* が *b* に変化する) である。接尾辞 *-i* が付加した実際の形式は *leb-i* となる。しかし期待される形式は *uleb-i* である。荒尾の形式はこの期待される形式に近く、*l* の前に何等かの母音があったことを示している。項目 202 であるが、この形式は *ali* 「日、一日、日中、時間」という語根に接尾辞 *-an* を附加して作られている。荒尾の表記 *arian* では、語根がそのまま *ari* [*ali*] として残されており、この語の成り立ちとしての *ali-an* が明らかである。現代パラン方言では語頭子音が削除され *lian* となることが予想される。しかし時折 *l* と *d* と交替するが見られ、この語においても *l* ではなく *d* を用いて *dian* となる。さらに母音連続の間に渡り音として *y* が挿入され *diyan* となる。

4.8.2 子音から始まる場合：歴史的な音素の保存

セデック語パラン方言において典型的な語根は二音節から成るため、前次末音節に当たる要素は前置詞であることが多い。まず前置詞における荒尾の母音表記について見ていく。

オーストロネシア祖語には状態動詞を表す接頭辞に **ma-* (Blust 2013: 376) が再建されている。この接頭辞は現代パラン方言では母音弱化を被るため *mu-* として現れる。荒尾の表記では *ma* として現れるため、この接頭辞は母音弱化を受けていないことがわかる。これらの例を (64) に示す。

²⁹⁵ 二重のアステリクスを付けた形式は、これらが実際には得られない形式であることを示す。

(64) 荒尾の表記における静態接頭辞 *ma-*

67 *ma^agēhui* (*mu-ŋihun*), 5 *matsairin* (*cehedin²⁹⁶*), 27 *masekuy* (*mu-sekuy*), 28 *machēroho* (*mu-tihx*), 31 *marēgu* (*mu-deŋu*), 32 *mafurīya^k* (*mu-hurīq*), 39 *mataqe* (*mu-taqi*), 45 *maseyaŋ* (*mu-seyaŋ*), 49 *maŋilisi* (*mu-hulis*), 60 *matakui* (*mu-takun*), 65 *maitsu* (*mi-icu²⁹⁷*), 107 *maowashi* (*mu-uyas*), 172 *mafukin* (*mu-huŋin*), 176 *maurai* (*mu-ure*), 178 *mateŋi* (*mu-teŋi*), 317 *ma^agāga* (*mu-ŋaŋah*), 386 *mashia* (*busiya²⁹⁸*), 406 *magaeda* (*mu-geela*), 544 *matena* (*m<un>-tenda²⁹⁹*), 546 *makera* (*mu-kela*), 546 *mausa* (*mosa*)

また数詞に付く接頭辞にも同一音のものがあ、現代バラン方言では母音弱化を被り *mu-*になっているが、荒尾の表記では *ma* で現れる (65)。

(65) 荒尾の表記における数詞に付く接頭辞 *ma-*

343 *matel* (*mu-mu-teru*), 344 *mapit* (*mu-pitu/m-pitu*), 345 *maseppa* (*mu-mu-sepac*), 346 *magari* (*mu-ŋari*), 349 *maposan* (*m-pusa-n*), 350 *mateln* (*mu-teru-n*), 351 *masipad* (*mu-supat-un*), 352 *marinma* (*mu-rima-n*), 354 *mahadan* (*ku-muxal-an*)

さらに現代バラン方言では、他動詞（動作主態において接中辞<*um*>を取るもの）が未来を表す場合、語根に対し接頭辞の *mu-*が付くが、この接頭辞に相当すると考えられるものが、(66) にあるように荒尾の表記では *ma* で現れる。

(66) 荒尾の表記における他動詞接頭辞の *ma-*

67 *matara* (*mu-tara*), 73 *malawa* (*mu-lawa*)

このほか、現代バラン方言には *tu-* という非意志性を表す接頭辞があるが（落合 2016）、(67) にあるようにこの接頭辞は荒尾の表記では *ta* で示される。

(67) 荒尾の表記における非意志接頭辞の *ta-*

17 *taeya* (*te-heya*), 37 *tarcon* (*tu-leuŋ*), 111 *tairiak* (*te-heyaŋ*)

現代バラン方言には相互を表す接頭辞に *pu-* があるが、(68) にあるように荒尾の表記では *pa* で現れる。

²⁹⁶ 現代バラン方言では接頭辞が付かない形式が用いられる。

²⁹⁷ 接中辞の母音は弱化を受けた *u* が期待されるが、ここでは語根の語頭母音であると同時に強勢を受ける母音である *i* へ同化する。

²⁹⁸ 現代バラン方言では接頭辞を取らない。

²⁹⁹ 現代バラン方言では接中辞<*un*>が挿入された形式となる。この接中辞の本来の機能は過去を表すことであるが、この語根と過去時制との関係は明確でない。

- (68) 荒尾の表記における非意志接頭辞の *pa-*
47 *pare^agau* (*pureŋo*)

現代パラン方言には使役を表す接頭辞 *pu-*があるが、(69)にあるように荒尾の表記では *pa* で現れる。

- (69) 荒尾の表記における使役接頭辞の *pa-*
103 *pausa* (*posa*), 108 *papurin* (*pu-hulin*)

現代パラン方言には動詞を派生する接頭辞 *su-*があるが、(70)にあるように荒尾の表記では *si* で現れる。

- (70) 荒尾の表記における動詞派生接頭辞の *si-*
35 *simaro* (*su-malu*), 109 *sikari* (*su-kadi*)

現代パラン方言には疑問詞「いつ」について過去を表す接頭辞 *su-*があるが、(71)にあるように荒尾の表記では *si* で現れる。

- (71) 荒尾の表記における過去の「いつ」を表す接頭辞の *si-*³⁰⁰
467 *sinoan* (*su-kumwan*)

現代パラン方言には衣服等の着用を表す接頭辞として *kun-*があるが(例 *kun-bunuh*「帽子をかぶる」), これと同音の接頭辞が(72)にあるように荒尾の表記に一例見られた(ただし衣服着用の意味でない)。

- (72) 荒尾の表記における接頭辞 *kun-*
387 *kuntaran* (—)

(73)に挙げたように、語根の語頭子音を重複することで作られた形式において、重複された音節の母音を *a* で記す語が見られた³⁰¹。この語の語根は *sibus*「サトウキビ」であり派生語は「サトウキビ

³⁰⁰ 現代パラン方言では *sukumwan* というのが一般的であり、これは荒尾の形式に対して *ku* という要素が語中に加わっているが、中原集落において 80 歳を超えた高齢者の発話を耳にしたところ、荒尾の挙げた形式に一致する *sumwan* という形式を用いていた。

³⁰¹ 現代パラン方言には食物を表す名詞に付いてその食物のにおいや味がすることを意味する重複接頭辞 *suCu-*がある。重複子音は語頭子音を用いる(例 *suhu-timu*「塩っぱい」)。(65)もこの派生の一種と考えられそうだが接頭辞は *sa* に当たり、一音節しかない。語根が *s* から始まるため、本来なら接頭辞は *sIsI-* (*I* は任意の母音を表す)となるはずである。恐らく二音節ある接頭辞の一つが重音脱落によってなくなっている。

のような味がする, 甘い」を意味する。

- (73) 荒尾の表記における重複接頭辞 *Ca-*
244 *sasēbus* (*su-sibus*)

現代パラン方言には動作主態を表す接中辞<um>がある。この接中辞が付く多くの語根は二音節であり、その場合接中辞の母音は前次末音節に当たる。以下 (74) のように荒尾の表記においてこの接中辞の子音は、i または u で現れた。同一語根にこの揺れが見られる例もある (項目 90 と項目 445)。この揺れは、母音が曖昧母音であったことを示唆する。曖昧母音の表記に窮し、i や u で代用したのではないだろうか。

- (74) 荒尾の表記における動作主態接中辞 <am>
55 *chī^abābu* (*c<um>ebu*), 90 *kimita* (*q<um>ita*), 445 *kumita* (*q<um>ita*), 106 *kimeki* (*k<um>eekei*),
156 *kumuchi* (*q<um>uti*), 362 *chimitsuk* (*c<um>ucuq*)

次に語根が三音節以上から成る語について、荒尾の前次末音節母音を考察する。荒尾の表記では前次末音節の母音が a で記されるもの (75), i で記されるもの (76), u または o で記されるもの (77) が見られる。

- (75) 荒尾の表記における前次末母音 a
13 *sakenoho* (*sukemux*), 14 *habālau* (*hubaro*), 20 *dakahāyan* (*deheran*), 33 *baebu* (*beebu*), 62 *babāriak* (*mberiq*), 72 *kalābui* (*kulabuy*), 78 *habāgan* (*hubayan*), 82 *kanecepa* (*kanecepah*), 99 *panimukan* (*pulumukan*), 111 *kafurisi* (*quburic*), 112 *tarashi* (*turasi*), 116 *marā^agan* (*sunburayan*), 126 *baruku* (*butuku*), 127 *bat^asnuh* (*butumux*), 142 *tamako* (*tumako*), 159 *makaxa* (*mukaxa*), 161 *barebu* (*murebu*), 168 *babuyan* (*bubuyu*), 177 *rafoasi* (*nbyas*), 179 *basukan* (*busukan*), 183 *pa^agara* (*pujerah*), 186 *zakaizak* (*yugyayaq*), 190 *bahanni* (*qubuheni*), 195 *kanchia* (*kunciya*), 218 *kanawa* (*qunawan*), 221 *maliku* (*buriku*), 236 *tarabush* (*turabus*), 237 *batakan* (*butakan*), 254 *tamakui* (*tumaquy*), 259 *padaushi* (*pudaus*), 261 *parabau* (*puobo*), 278 *kakannoho* (*ruqenux*), 284 *makairin* (*muqedin*), 291 *waewa* (*weewa*), 295 *masolan* (*qubusuran*), 364 *pa^agawan* (*pulujawan*), 366 *kaduruk* (*kuduruk*), 365 *dakairashi* (*duqeras*), 374 *rakaibu* (*rukebuc*), 380 *kare^agun* (*qurejun*), 389 *ba^anuh* (*b<ur>eenux*), 399 *katina* (*mututina*), 403 *barukui* (*buluqun*), 414 *kakaya* (*quqeya*), 431 *papurai* (*hupure*), 461 *paheppa* (*puhepah*), 535 *kasia* (*qusiya*), 542 *pagesa* (*tugesu*)

- (76) 荒尾の表記における前次末母音 i
39 *mināroho* (*munarux*), 99 *panimukan* (*pulumukan*), 117 *simada* (*hulumadac*), 305 *sinⁱnoho*

(*sunumux*), 484 *kinoan* (*kunuwān*)³⁰²

(77) 荒尾の表記における前次末母音 *u*

144 *po^ggara* (*pu^gerah*)³⁰³, 294 *soazi* (*su^wai*), 365 *bunibun* (*bulebun*), 371 *pudahau* (*pu^dahuy*),
381 *mukarau* (*mukaro*), 384 *to^ggorau* (*tujuro*), 394 *bugurah* (*bugurah*)

ここまで荒尾の表記において前次末音節の母音が保存されていると考えられる語例を挙げてきた。しかしながら、以下 (78) のように荒尾の表記には、語根に一音節から成る接尾辞が付いた形式において、前次末音節の母音が弱化していると考えられる例が見られる。

(78) 荒尾の表記における接尾辞付加後の前次末母音の弱化

76 *brigun* (*burig-un*), 80 *sepōhan* (*supuh-an*)

これらの語根は *barig* 「買う」と *sapuh* 「医術を施す」である。これらにおいて次末音節にあたる母音の *a* が、荒尾の形式では接尾辞付加後に脱落するか *e* に変化している。この表記は、荒尾の調査時代においてすでに、接尾辞付加後には次末音節より前の母音が弱化していたことを示すと考えられる。

5. 子音

子音は語頭、語中、語末に分けて現代パラン方言の音素と荒尾の表記の対応関係を考察する。5.19 節でまとめる。

5.1 現代パラン方言の *y*

現代パラン方言の *y* は、荒尾の表記では語頭では *y* または *z* に対応するが、語中では *y*, *d*, *z*, *r*, *w* など様々な表記が見られる。また、現代では母音連続に挿入される渡り音 *y* が荒尾では表記されないことがある。荒尾の表記における語頭の *y* と *z* をそれぞれ (79) と (80) に挙げる。

(79) 現代パラン方言の語頭の *y* と荒尾の *y*

125 *yayū* (*yayū*), 166 *yayun* (*yayun*)

(80) 現代パラン方言の語頭の *y* と荒尾の *z*

186 *putinzakaizak* (*puti^zy^zuqeyaq*)

上の (71) における荒尾の表記 *y* と (72) における荒尾の表記 *z* は、それぞれ別々の音素を表して

³⁰² 小川 (1939: 14) によるとこの形式は疑問詞 *mu* に接頭辞 *ka-* と接尾辞 *-an* が付いたものである。そのため前次末音節の母音は荒尾が表記した *i* よりも曖昧母音の可能性が高い。

³⁰³ この形式に関して、荒尾の表記では前次末音節の母音が *o* のもの (項目 144) と *a* のもの (項目 183) が見られた。

いる。前者は音素 *y* を表す。一方後者については、早期パラン方言には音素 *ð* があったことが Asai (1953: 3) に記されており、荒尾の表記 *z* はこの音素を表すものだと考えられる。Ochiai (2018: 140–141) は、この音素が 1900 年におけるパラン方言の語彙 (鳥居 1900) では *d*, *z*, *r*, *j* などの表記を用いて示されていること、この音素が現代パラン方言では *y* に変わったことを述べている。

現代パラン方言の語中 *y* が荒尾の表記でも *y* で現れる例を (81) に挙げる。これは音素 *y* を表したものである。

- (81) 現代パラン方言の語中の *y* と荒尾の *y*
 6 *iya* (*iya*), 45 *maseyan* (*museyan*), 125 *yayū* (*yayu*), 166 *yayun* (*yayun*), 167 *daya* (*daya*),
 168 *mabuyan* (*bubiyu*), 402 *iyu* (*iyu*), 414 *kakaya* (*quqeya*), 487 *taiyak* (*teheyaq*)

次に、現代パラン方言の語中における *y* が荒尾の表記において *d*, *z*, *r* と表記される例をそれぞれ (82), (83), (84) に挙げる。これら荒尾の表記は、早期パラン方言における音素 *ð* を反映するものである。

- (82) 現代パラン方言の語中の *y* と荒尾の *d*
 48 *kēda* (*kīya*), 164 *eda* (*eyah*), *sēdan* (*sīyan*), 240 *pādai* (*paye*), 519 *sāda* (*sayu*)

- (83) 現代パラン方言の語中の *y* と荒尾の *z*
 3 *kumūzohō* (*qumūyux*), 186 *putinzakaizak* (*putinyuqeyaq*), 279 *bauzak* (*boyak*), 410 *gāzan* (*hayan*)

- (84) 現代パラン方言の語中の *y* と荒尾の *r*
 110 *tairiak* (*teheyaq*), 474 *pira* (*piya*)

以下 (85) に挙げたように荒尾が *r* で表記した項目 110 は、同一の語において *y* で表記されている例も見られた。荒尾の調査時代の音素 *ð* が *y* に変化しつつあったことが垣間見える。

- (85) 現代パラン方言の語中の *y* と荒尾の *r* または *y*
 487 *taiyak*, 110 *tairiak*³⁰⁴ (*teheyaq*)

歴史的な音素 *ð* は荒尾の表記においては前述のように *z*, *d*, *r* で記されているが、(86) にあるように無表記の例も見られる。括弧内には Asai (1935) などを参照に再建した早期パラン方言の形式も*を付けて加えた。

- (86) 歴史的 *ð* と荒尾の無表記

³⁰⁴ この荒尾の語形では *r* の後にさらに *i* が添えられていることも現代パラン方言とは異なる。

328 raboashi (*nbiyas* < *rabuðas), 441 pia (*piya* < *piða), 294 soazi (*suwai* < *suwaði), 315 hazi (*hei* < *həði)

上の項目 294 と項目 315 に共通しているのは *ð* の後続の母音が *i* である点で、現代パラン方言では *ð* の反映形である *y* は母音 *i* の前で消失する。

次に (87) のように一例だけが現代パラン方言の *y* が荒尾の表記で *w* になる例があった。この語について、小川・浅井 (1935: 43) のパラン方言の当該語集においても *uwes* 「歌」と表記され (荒尾の表記における語頭の *ma* は接頭辞), *w* が認められることから、荒尾の調査時代では *w* であった音素が現代では突発的に *y* に変化したと考えられる。

- (87) 現代パラン方言の語中の *y* と荒尾の *w*
107 maowashi (*maɲas*)

現代パラン方言では前舌母音 *i* または *e* に後舌母音が連続する場合、渡り音として *y* が挿入される規則がある (楊 1976: 625)。この渡り音は、(88) にあるように荒尾の表記においては見られなかった。

- (88) 現代パラン方言の語中の渡り音 *y* と荒尾の無表記
162 arian (*dɪyan*), 195 kanchia (*kanciya*), 168 niau (*ɲiyo*)

また (89) のように、現代パラン方言に見られる語中の *y* が荒尾の表記では見られない例もあった。

- (89) 現代パラン方言の語中 *y* と荒尾の無表記
139 kaū (*kayū*)

現代パラン方言のこの語において *y* が現れている環境は渡り音の挿入条件に当てはまらないことから、この語における *y* は渡り音として挿入されたものではない。そのため音素であると考えられるのだが、なぜ荒尾の表記では *y* が見られないかはわからない。

5.1 現代パラン方言の *w*

現代パラン方言の *w* は荒尾の表記でも *w* に相当する。荒尾の表記において *w* は語頭と語中に見られる。語頭に *w* が見られる例を (90) に、語中に見られる例を (91) に挙げる。

- (90) 現代パラン方言の語頭の *w* と荒尾の *w*
86 wada (*wada*), 188 waru (*walu*), 291 wacwa (*weewa*)

- (91) 現代パラン方言の語中の *w* と荒尾の *w*

21 lowahai (*ruwahi*), 73 marawa (*mulawa*), 218 kanawa (*qunawan*), 210 tawak (*tahawak*), 291
wacwa (*weewa*), 364 pa^gawan (*puluhawan*), 366 wairoho (*quwarux*), 492 lawa (*lawā*)

現代パラン方言では *ua* という母音連続の間に、渡り音の *w* が挿入される音韻規則がある (楊 1976: 625)。現代では音声的に挿入されるこの渡り音が、以下 (92) のように荒尾の表記には反映されていない。

- (92) 現代パラン方言の渡り音 *w* と荒尾の無表記
294 soazi (*suwai*), 333 koak (*quwaq*)

5.3 現代パラン方言の *p*

現代パラン方言における語頭の *p* は、以下 (93) にあるように荒尾の表記でも *p* で現れる。

- (93) 現代パラン方言の語頭の *p* と荒尾の *p*
7 paru (*paru*), 41 paanae (*paane*), 47 pare^ggau (*purejo*), 54 pattashi (*patis*), 74 pakkun (*paqun*),
77 pira (*pila*), panimukan (*pulumukan*), 103 pausa (*posa*), 104 puton (*putuj*), 108 papurin
(*puhulij*), 124 puniak (*puniq*), 130 puru (*puri*), 143 pukan (*puqan*), 144 po^ggara (*pujerah*),
154 pädai (*paye*), 180 pukun (*puqun*), 186 puttin (*putij*), 216 para (*pala*), 250 päpak (*papak*),
259 padaushi (*pudaus*), 261 parabau (*purobo*), 319 pika (*pika*), 322 pipi (*pipi*), 364 pa^gawan
(*puluhawan*), 371 pudahau (*pudahuj*), 390 paai (*pai*), 438 pakysun (*pulukusun*), 441 pia (*piya*),
461 paheppa (*pehepah*), 542 pagesa (*putugesā*)

現代パラン方言における語中の *p* は、以下 (94) にあるように荒尾の表記でも *p* で現れる。

- (94) 現代パラン方言の語中の *p* と荒尾の *p*
36 papurai (*hupure*), 42 mapa (*mapa*), 74 lipak (*sipaq*), 80 säpoa (*sapuh*), 85 tsäpan (*capay*),
138 shūpā (*supih*), 147 rūpi (*rupi*), 148 säpo (*sapo*), 149 säpa (*sapah*), 250 päpak (*papak*),
257 süpuhu (*puçupux*), 263 pätui (*qupatum*), 310 rūpun (*rupun*), 322 pipi (*pipi*), 359 gäpok
(*gepuk*), 388 sapishi (*sapic*), 429 kaneeppa (*kuneepah*)

また、現代パラン方言における語中の *p* は、以下 (95) にあるように荒尾は二重表記 *pp* もを用いている。なお、セデック語において子音の長短は弁別的な音素ではない。ここでは次末子音に強勢の置かれることの音声的な表れとして子音が音声的に長く聞こえたため、このような表記を用いたのだろう。

- (95) 現代パラン方言の語中の *p* と荒尾の *pp*

153 lappa (*dapa*), 341 seppa (*sepac*), 461 paheppa (*pehepah*)

5.4 現代パラン方言の b

現代パラン方言における語頭の *b* は、以下 (96) にあるように荒尾の表記でも *b* で現れる。

- (96) 現代パラン方言の語頭の *b* と荒尾の *b*
- 33 *baebu* (*beebu*), 63 *bārai* (*bale*), 76 *brigun* (*burigun*), 81 *bekki* (*biqi*), 112 *bāga* (*bagah*),
126 *baruku* (*butuku*), 128 *batsunuh* (*butunux*), 168 *babuyan* (*bubuyu*), 179 *basukan* (*busukan*),
187 *barābare* (*bulebun*), 193 *bārun* (*baluy*), 200 *bāgaha* (*begax*), 216 *būkui* (*bukuy*), 222 *bunnaha*
(*bunuh*), 227 *bairoha* (*beluh*), 231 *buna* (*buja*), 237 *batakan* (*butakan*), 267 *bābui* (*babuy*),
279 *bauzak* (*boyak*), 296 *būbu* (*bubu*), 327 *bāga* (*bag*), 330 *bērasi* (*birac*), 360 *baetak* (*betaq*),
370 *bakki* (*baki*), 389 *baānuh* (*bureenux*), 394 *buguraha* (*bugurah*), 403 *barukui* (*buluqun*)

この他、現代パラン方言における語頭の *b* が、荒尾の表記では *m* で表記される例を (97) に挙げる。

- (97) 現代パラン方言の語頭の *b* と荒尾の *m*
- 33 *maebu* (*beebu*), 168 *mabuyan* (*bubuyu*), 189 *ma^gāfui* (*bugihun*), 221 *maliku* (*buriku*),
316 *ma^gēroho* (*bukiluh*), 386 *mashia* (*busiyag*)

以下 (98) にあるように現代パラン方言の語頭 *b* が、荒尾の表記では語頭で *m* と *b* で揺れる項目も 2 例見られた。

- (98) 現代パラン方言の語頭の *b* と荒尾の *m* または *b*
- 33 *baebu*, 33 *maebu* (*beebu*)
168 *babuyan*, 168 *mabuyan* (*bubuyu*)

次に (99) に挙げたように現代パラン方言の語中における *b* は荒尾の表記でも *b* で現れる。

- (99) 現代パラン方言の語中の *b* と荒尾の *b*
- 1 *orōbue* (*lebi*), 14 *habālau* (*hubaro*), 33 *baebu* (*beebu*), 62 *babāriak* (*mberiq*), 71 *chebu* (*cebu*),
72 *kalābui* (*kulabuy*), 75 *bahan* (*qubahay*), 78 *habāgan* (*hubayan*), 97 *kabu* (*kahabu*), 113
habu (*habik*), 114 *tūbu* (*tubu*), 123 *bāri* (*bubali*), 140 *nibau* (*ribo*), 142 *nyūbui* (*lubuy*), 152
bābui (*babuy*), 161 *barebu* (*murebu*), 168 *babuyan* (*bubuyu*), 187 *barābare* (*bulebun*), 190
bahānni (*qubuheni*), 230 *tsubura* (*tubula*), 236 *tarabushi* (*turabus*), 244 *sasēbush* (*susibus*),
261 *parabau* (*purobo*), 274 *būbu* (*bubu*), 301 *raoashi* (*nibuyas*), 363 *tēbu* (*tibu*), 374 *rakaihu*
(*rukebux*), 474 *rābi* (*rabi*)

また (100) のように現代パラン方言の語中における *b* が荒尾の表記では *f* で現れる語が一例見られた。ただし、セデック語には *w*, */f/* といった音素はない。この荒尾の表記は音素としての */b/* を表したものに相違ない。

- (100) 現代パラン方言の語中 *b* と荒尾の *f*
111 *kafurisi* (*qubulic*)

上記 (97), (98) では語頭において現代パラン方言の *b* に対し荒尾が *m* を用いる例が見られたが、(101) にあるように語中においても同様の例が見られた。

- (101) 現代パラン方言の語中の *b* と荒尾の *m*
116 *maragang* (*sunburangan*)

(97), (98), (101) のように荒尾が *b* に対して *m* と表記しがちなのは、もしかしたら調査協力者の李阿輝氏の母語であったと考えられる閩南語が影響している可能性もある。Chappell (2018) によると、閩南語において音素として */b/* は立てられないが、*[b]* は */m/* の異音として現れるとある³⁰⁵。つまり、*m* と *b* は相補分布の関係にある。このことが、荒尾の調査協力者のセデック語の発音に影響を与え、*m* と *b* とを混同する傾向があるのではないだろうか。ここでは *b* であるはずの分節音が荒尾では *m* で表記する例を挙げたが、逆に *m* であるはずの分節音が荒尾では *b* で表記される例も見られる (5.16 節)。

5.5 現代パラン方言の *t*

現代パラン方言における語頭の *t* は、以下 (102) にあるように荒尾の表記でも *t* で現れる。

- (102) 現代パラン方言の語頭の *t* と荒尾の *t*
17 *taeyā* (*teheya*), 27 *tanna* (*tanah*), 37 *tareon* (*tuleuy*), 38 *tutsui* (*tutuy*), 39 *take* (*taqi*), 100 *tarō* (*telu*), 110 *tairiak* (*teheyaq*), 114 *tūbu* (*tubu*), 122 *tarashi* (*turasi*), 137 *tūmun* (*humun*), 141 *tamako* (*tumaku*), 219 *tawak* (*tahawak*), 223 *taukan* (*tokan*), 236 *tarabush* (*turabus*), 251 *tama* (*tama*), 254 *tamakui* (*humaquy*), 299 *tamuk* (*tuhumuki*), 340 *tel* (*teru*), 363 *tēbu* (*tibu*), 384 *to'gorau* (*tujuro*), 400 *tulahai* (*tulahi*)

現代パラン方言における語中の *t* は、以下 (103) にあるように荒尾の表記でも *t* で現れる。

³⁰⁵ 具体的に言うと、オンセットが *m* であり、ライムが鼻母音である場合、このオンセットは *[b]* に変わる。

(103) 現代パラン方言の語中の *t* と荒尾の *t*

67 *matara* (*mutara*), 39 *matake* (*mutaqi*), 59 *atak* (*atak*), 60 *matakui* (*mutakun*), 69 *rita* (*nita*),
90 *kimita* (*qumita*), 104 *puton* (*putuy*), 175 *matēroho* (*mutihex*), 178 *mate^{ngi}* (*mutēji*), 237
batakan (*butakan*), 262 *pātui* (*qupatin*), 304 *kumutak* (*mutaq*), 344 *mapit* (*mupitu*), 350 *mateln*
(*mulerun*), 360 *bactak* (*betaq*), 399 *katina* (*mukutina*)

一語だけ現代パラン方言における語中の *t* が, (104) のように荒尾の表記において *d* で現れることがあったが, これは無声音を有声音と聞き誤ったと考えられる。

(104) 現代パラン方言の語中の *t* と荒尾の *d*

378 *hakauduf* (*hako utux*)

このほか現代パラン方言における語中の *t* は, 以下 (105) にあるように荒尾の表記において二重表記 *tt* を用いる例も見られた。

(105) 現代パラン方言の語中の *t* と荒尾の *tt*

186 *puttinzakaizak* (*putij yuqeyaq*), 395 *kutti* (*quti*)

さらに現代パラン方言における語中の *t* は, 以下 (106) にあるように荒尾の表記において *ts* を用いる例も見られた。なぜ荒尾が *ts* を用いたかはわからない。

(106) 現代パラン方言の語頭・語中 *t* と荒尾の *ts*

230 *tsubula* (*tubula*), 38 *tsutsui* (*tutuy*), 128 *bats^{unh}* (*butunux*)

さらに語頭・語中とも後続母音 *i* の口蓋化により荒尾が *ch* と表記する語も (107) のように見られた。

(107) 現代パラン方言の語頭・語中の *t* と荒尾の *ch*

21 *chēkoaha* (*tikuh*), 196 *chimo* (*timu*), 28 *machēroho* (*mutihex*), 156 *kumuchi* (*qumuti*)

一方で (108) のように後続母音が *i* であっても口蓋化せずに, *t* または *tt* で表記される例もある。

(108) 現代パラン方言の語頭・語中の *t* と荒尾の *t* または *tt*

363 *tibu* (*tibu*), 399 *katina* (*mukutina*), 186 *puttinzakaizak* (*putij yuqeyaq*), 395 *kutti* (*quti*)

荒尾の調査時代, 母音 *i* の前の *t* が口蓋化するかもしれないかは揺れていたのかもしれない。実際荒尾の

例にも (109) のように口蓋化した形式としない形式の対が見られる。項目 156 と項目 395 の対については、語根が同一である。現代パラン方言では母音 *i* の前の *t* は口蓋化しない。

- (109) 現代パラン方言の語中の *t* と荒尾の *ch* または *t* (および *tt*)
 28 *machēroho*, 542 *matēroho* (*mutihux*)
 156 *kumuchi* (*q<um>uti*), 395 *kutti* (*quti*)

5.6 現代パラン方言の *c*

現代パラン方言における語頭の *c* [ʈ] は、以下 (110) にあるように荒尾の表記では *ts* で現れる。

- (110) 現代パラン方言の語中 *c* と荒尾の *ts*
 67 *tsūrin* (*culiŋ*), 85 *tsāpan* (*capaŋ*), 158 *tsāman* (*caman*), 213 *tsuki* (*cuqi*), 256 *tsūmiyaka*
 (*cumiq*), 264 *tsūruh* (*qucurax*), 321 *tsūri* (*curi*), 375 *tsakushi* (*cakus*), 401 *tsōhan* (*cuxan*)

現代パラン方言における語中の *c* も、以下 (111) にあるように荒尾の表記では *ts* で現れる。

- (111) 現代パラン方言の語中の *c* と荒尾の *ts*
 16 *matsairin* (*cehedin*), 65 *maitsu* (*miicu*), 228 *gētsan* (*gicay*), 362 *chimitsuk* (*cumucuq*)

現代パラン方言の *c* [ʈ] は、前舌母音 *i* または *e* の前で口蓋化し [t͡ɕ] となる。この口蓋化は荒尾の調査期にも見られたらしいことは、荒尾がこれらを書き分けていることからわかる。口蓋化しない場合は *ts* を口蓋化した場合は *ch* を用いている。以下 (112) に語頭・語中ともに母音 *i* の前で口蓋化したと考えられる表記 *ch* を用いる例を挙げる。

- (112) 現代パラン方言の語頭・語中の *c* と荒尾の *ch*
 19 *chērun* (*gucihun*), 58 *chebu* (*cebu*), 160 *chēga* (*ciga*), 362 *chimitsuk* (*cumucuq*)³⁶, 195
kanchia (*kanciya*), 232 *uchick* (*ucik*)

現代パラン方言において、*c* は語末にも見られる。現代パラン方言の語末 *c* にあたる分節音に対し用いられる荒尾の表記は二種類見られる。ひとつは (113) に挙げたように *si* または *shi*、もうひとつは (114) に挙げたように無表記である。

- (113) 現代パラン方言の語末の *c* と荒尾の *si* または *shi*
 111 *kafurisi* (*qubulic*), 281 *dakaidsi* (*rukelic*), 330 *bēraši* (*birac*), 270 *mēdishi* (*miric*), 276 *ōlishi*

³⁶ この語は荒尾の表記では母音 *i* の前で口蓋化しているが、現代パラン方言では当該母音が *u* であるため口蓋化しない。

(*qolic*), 388 **sapishi** (*sapic*)

(114) 現代パラン方言の語末 *c* と荒尾の無表記

117 *simada* (*sulumadac*), 166 *funna* (*hunac*), 198 *rāma* (*damac*), 341 *seppa* (*sepac*)

(113) と (114) における荒尾の表記の違いが何によるものかわからない³⁰⁷。ただ、現代パラン方言の語末 *c* は *t* に遡るものだという点はわかっている。現代パラン方言の語末 *c* は、表 3 に示したようにトゥルク方言において *t* に対応する。パラン方言でも早期には *t* であった語末が後に *c* に変わった。これは現代パラン方言において後部に接尾辞が付く場合に語末 *c* が *t* に変わるという共時的音韻変化（例 *damac* 「おかず」、*dumat-i* 「おかずとして食べろ」）にも見て取れる。

表 3 現代パラン方言の語末 *c* とそれに対応するトゥルク方言の *t*

荒尾の表記	パラン方言（現代）	トゥルク方言
<i>kafurisi</i>	<i>qubulic</i>	<i>qəbulit</i>
<i>dakaidsi</i>	<i>rukelic</i>	<i>rəkəlit</i>
<i>bēraši</i>	<i>birac</i>	<i>birat</i>
<i>mēdishī</i>	<i>miric</i>	<i>mirit</i>
<i>ōlishi</i>	<i>qolic</i>	<i>qowlit</i>
<i>sapishi</i>	<i>sapic</i>	---
<i>simada</i>	<i>sulumadac/hulumadac</i>	---
<i>funna</i>	<i>hunac</i>	<i>hunat</i>
<i>rāma</i>	<i>damac</i>	<i>damat</i>
<i>seppa</i>	<i>sepac</i>	<i>səpat</i>

5.7 現代パラン方言の *d*

現代パラン方言における語頭の *d* は、以下 (115) にあるように荒尾の表記でも *d* で現れる。

(115) 現代パラン方言の語頭の *d* と荒尾の *d*

18 *dārin* (*daliŋ*), 20 *dakahāyan* (*deheran*), 105 *dan^agā* (*dayi*), 167 *dāya* (*daya*), 192 *daroho* (*darix*), 308 *daudeak* (*doriq*), 339 *daha* (*daha*), 368 *dakairashi* (*duqeras*), 472 *dama* (*damac*)

現代パラン方言における語中の *d* は、以下 (116) にあるように荒尾の表記でも *d* で現れる。

³⁰⁷ この表記の差はそれぞれの音素の異なりを表しているのかもしれない。(105) における語末子音は /s/, (106) における語末子音は /v/ を表しているとも考えられる。さらに前者は *d に遡る可能性が高いのだがこの点については今後の課題とする。

(116) 現代パラン方言の語中の *d* と荒尾の *d*

43 *ādasī* (*desi*), 86 *wada* (*wada*), 117 *simada* (*sulumadac*), 151 *raudoho* (*rodux*), 173 *ēdasi* (*idas*), 199 *ēdau* (*ido*), 239 *sūdu* (*sudu*), 259 *padaushi* (*pudaus*), 290 *daudan* (*rudan*), 298 *mādan* (*hulumadan*), 366 *kaduruk* (*kuduruk*), 369 *gudus* (*judus*), 371 *pudahau* (*pudahun*), 377 *fuda* (*huda*)

このほか、現代パラン方言における語頭の *d* が、以下 (117) にあるように荒尾の表記において *r* で現れる例も見られた。

(117) 現代パラン方言の語頭の *d* と荒尾の *r*

40 *rērin* (*didin*), 18 *rārin* (*daliṅ*), 135 *rufun* (*duhun*), 198 *rāma* (*damac*)

同じく、現代パラン方言における語中の *d* が、以下 (118) にあるように荒尾の表記において *r* で現れる例も見られた。

(118) 現代パラン方言の語中の *d* と荒尾の *r*

40 *rērin* (*didin*), 31 *marengu* (*mudeṅu*), 109 *sikari* (*sukadi*), 162 *arian* (*diyan*), 284 *makairin* (*muqedin*), 288 *siārek* (*seediq*)

また、現代パラン方言における語頭の *d* は、以下 (119) にあるように荒尾の表記で *l* を用いることがある。

(119) 現代パラン方言の語頭の *d* と荒尾 *l*

153 *lappa* (*dapa*)

同様に、現代パラン方言における語中の *d* が、以下 (120) にあるように荒尾の表記で *l* を用いることがある。

(120) 現代パラン方言の語中の *d* と荒尾の *l*

434 *siāliek* (*seediq*)

さらに、(121) のように荒尾が *d* と *r* または *r* と *l* の両方で表記する語も見受けられた。

(121) 現代パラン方言の語頭・語中の *d* と荒尾の *d* または *r* または *l*

18 *dārin*, 18 *rārin* (*daliṅ*)

472 *dāma*, 198 *rāma*³⁰⁸ (*damac*)

288 *siārek*, 434 *siālick* (*seediq*)

このように現代パラン方言の *d* は荒尾の表記では多くが *d* で表されているが、ところどころ *r* または *l* でも現れる。このように *d* が *r* で現れるのには、調査協力者のアタヤル語の知識が影響を及ぼしている可能性がある。例えば Li (1981:253) におけるセデック語とアタヤル語の同源語の対応、セデック語 *pada*, アタヤル語 *para* 「キョン」などに見られるようにセデック語の *d* に対応するアタヤル語の分節音が *r* である。セデック語で *d* を持つ単語について、アタヤル語の音韻的規則に影響されて、*d* を *r* にした形式を伝えたのではないだろうか。

現代パラン方言では *d* である分節音が荒尾では *l* と表記される例は、荒尾と同時期に出版された鳥居龍蔵によるパラン方言の語彙表(鳥居 1900)でも見られる (Ochiai 2018:135)。そのため、*d* が *l* に音声的に近似していたとも考えられ、荒尾にとっては *d* が *l* のように聞こえた可能性もある。実際現代パラン方言でも *d* と *l* とで揺れる語が稀に見られる。例えば *dedax* と *ledax* 「光」などである。

ただこの *d* と *r*, さらに *d* と *l* の混同については、調査協力者の母語である閩南語の影響という可能性も残されている。Chappell (2018) によると、閩南語において音素 /d/ はない。その代わり *l* が有り(ただし、/n/ の異音として現れる)、これは音声的に *d* に近似すると述べている³⁰⁹。このことが、荒尾の調査協力者の発音に影響を与え、*d* と *l* とを混同する傾向があるのではないだろうか。さらに言えば、荒尾自身の日本人母語話者としての特徴として *l* と *r* を混同する傾向が見られる (5.14 節, 5.15 節)。

そのため *d* と *r* と *l* に対する荒尾の表記は入り乱れる。本節で見たように *d* が *r* で書かれる、または *d* が *l* で書かれることがある。また、5.14 節で挙げるように *r* が *d* で書かれる³¹⁰、または *r* が *l* で書かれることがある。さらに、5.15 節に挙げるように *l* が *d* で書かれる、または *l* が *r* で書かれることがある。

5.8 現代パラン方言の *k*

現代パラン方言における語頭の *k* は、以下 (122) にあるように荒尾の表記でも *k* で現れる。

(122) 現代パラン方言の語頭の *k* と荒尾の *k*

47 *kāle* (*kari*), 48 *kēda* (*kiya*), 50 *kera* (*kela*), 53 *kufun* (*kuxun*), 60 *kana* (*kana*), 72 *kalābui* (*kalabuy*), 82 *kancepa* (*kunee pah*), 97 *kabu* (*kahabu*), 106 *kimeki* (*kumeeki*), 115 *kuḷu* (*kulu*), 139 *kaū* (*kayū*), 163 *kaaman* (*keeman*), 195 *kamchia* (*kanciya*), 255 *kuhin* (*kuhiŋ*), 260 *kui*

³⁰⁸ アタヤル語の形式は *ra-ramas* である (小川 1931:57)。

³⁰⁹ さらに、Chappell (2018) の脱鼻音化の音韻変化の説明では、/l/ が破裂音 *d* の代替のように扱われている。オンセットの鼻音 *m*, *n*, *ŋ* は鼻母音が続く場合に *b*, *l*, *g* に変わる。これらが破裂音と言う自然音を成すとする。このことから *l* と *d* が表裏一体であることがわかるだろう。

³¹⁰ 現代パラン方言の *r* が荒尾で *d* と表記される語はふたつ見られたが、これは調査協力者の閩南語の影響 (*l* と *d* の混同) と言うよりも、セデック語の *r* がたたき音であり、音声的に *d* に近いため、そのような表記になったと考える。

(*kui*), 358 *karai* (*kere*), 399 *katina* (*mukutina*), 404 *kabuo* (*kobu*), 475 *ken^ggān* (*kinjan*), 484 *kinoan* (*kumowan*)

現代パラン方言における語中の *k* は、以下 (123) にあるように荒尾の表記でも *k* で現れる。

- (123) 現代パラン方言の語中の *k* と荒尾の *k*
- 13 *sakenoho* (*sukemox*), 15 *raulka* (*culokah*), 21 *chēkoaha* (*tikuh*), 27 *masekui* (*musokay*), 44 *pakusun* (*pulukusun*), 50 *makera* (*mukela*), 60 *matakui* (*mutakun*), 70 *mākan* (*mekan*), 99 *panimukan* (*pulumukan*), 109 *sikari* (*sukari*), 121 *umuki* (*gumuki*), 141 *tamako* (*namaku*), 159 *makaha* (*mukaxa*), 179 *basukan* (*busukan*), 216 *bykui* (*bukay*), 221 *maliku* (*buriku*), 223 *taukan* (*token*), 238 *batakan* (*butakan*), 281 *dakaidisi* (*rutekic*), 299 *tamuk* (*tuhumuku*), 372 *makeyan* (*bukeyan*), 374 *rakaibu* (*rukebux*), 375 *tsakushi* (*cakus*), 378 *hakauduf* (*hako utux*), 419 *luksi* (*lukus*)

また、現代パラン方言における語中の *k* は、以下 (124) にあるように荒尾では二重表記 *kk* を用いることもある。

- (124) 現代パラン方言の語中の *k* と荒尾の *kk*
- 87 *okka* (*uka*), 357 *bakkui* (*bekay*), 370 *bakki* (*baki*), 454 *ekkan* (*ekan*), 470 *yakko* (*yaku*)

ひとつだけ、現代パラン方言の語中における *k* が、(125) にあるように荒尾の表記で *ᵑg* (*y* に相当する) として現れた。なぜこのような表記を用いたかはわからない。

- (125) 現代パラン方言の語中の *k* と荒尾の *ᵑg*
- 316 *maᵑgēroho* (*bukiluh*)

以下 (126) にあるように、現代パラン方言の語末 *k* は、荒尾の表記においても *k* で現れる。

- (126) 現代パラン方言の語末の *k* と荒尾の *k*
- 59 *atak* (*atak*), 217 *lēmuk* (*limuk*), 219 *tawak* (*tahawak*), 232 *ucihēk* (*ucik*), 250 *pāpak* (*papak*³¹¹), 279 *bauzak* (*boyak*), 359 *gāpok* (*gepuk*), 366 *kaduruk* (*kuduruk*)

また、(127) にあるように現代パラン方言の語末 *k* が荒尾の表記では抜け落ちる例も見られる。

- (127) 現代パラン方言の語末 *k* と荒尾の無表記
- 113 *habu* (*habik*), 210 *ush* (*usuk*)

³¹¹ 現代パラン方言では *papaq* とも言う。

5.9 現代パラン方言の g

現代パラン方言における語頭の *g* は、以下 (128) にあるように荒尾の表記でも *g* で現れる。

- (128) 現代パラン方言の語頭の *g* と荒尾の *g*
88 *gāga* (*gaga*), 174 *goagi* (*gagi*), 228 *gētsan* (*gican*), 359 *gāpok* (*gepok*)

現代パラン方言における語中の *g* は、以下 (129) にあるように荒尾の表記でも *g* で現れる。

- (129) 現代パラン方言の語中の *g* と荒尾の *g*
67 *agoa* (*aguh*), 22 *cgu* (*egu*), 76 *brigun* (*burigun*), 88 *gāga* (*gaga*), 112 *bāga* (*bagah*),
160 *chēga* (*ciga*), 174 *goagi* (*gagi*), 327 *bāga* (*baga*), 391 *bāgaha* (*begax*), 394 *buguraha*
(*bugurah*), 460 *magaeda* (*mugeela*)

ほかに (130) のように現代パラン方言の語中 *g* を荒尾が *u* で表記する語が一例見られた。これは半母音の *w* を示していると考えられる。この語について言えば、現代パラン方言においても、*sunagi* のほかに *sunawi* と発音する場合もある。後者の方が古い発音だった可能性がある。

- (130) 現代パラン方言の語中の *g* と荒尾の *u*
83 *sinai* (*sunagi*)

また (131) のように、現代パラン方言の語中 *g* を荒尾が *ⁿg* と表記する例も見られた。これは誤って鼻音を加えてしまったと考えられる。

- (131) 現代パラン方言の語中の *g* と荒尾の *ⁿg*
189 *maⁿgāfui* (*bugihun*)

さらに (132) のように現代パラン方言の *g* が荒尾の表記に現れない例が語頭・語中にそれぞれひとつずつ得られた。

- (132) 現代パラン方言の語頭・語中の *g* と荒尾の無表記
121 *umuki* (*gumuki*), 103 *rineui* (*negun*)

これら *g* が現れない例は後続の母音とともに *u* である。このような条件下で *g* が脱落しやすかったとも考えられるが、脱落していない例も (121) 中の項目 22, 項目 76, 項目 394 に見受けられる。

一方で、項目 121 において *g* が現れないのは、アタヤル語の影響の可能性も考えられる。アタヤル

語においてこの語は *əm-umuk* 「蓋をする」と記録されている (小川 1931: 329)。セデック語 (現代パラン方言) の同源語は *g<um>emuk* と言う。この語根はアタヤル語 *umuk* に対しセデック語 *gemuk* である。項目 121 は語根 *umuk* の後に接尾辞の *-i* (命令形) が付いた形式であり、アタヤル語により近いと言える。項目 103 の荒尾の形式 *rineui* において現代パラン方言の *negun* 「紐」に対応するのは後部の *neui* の部分である。因みにトゥルク方言では *nəgul* と言い、このふたつから再建される祖形は **nəgul* となる。荒尾の表記において *g* が抜ける理由は見いだせない。ただ、現代パラン方言において、語根 *negun* をもとに派生された動詞に *ul-un* 「縛られる」(対象態) があり、この派生形では *g* が現れない点が、荒尾の表記に類似している。

5.10 現代パラン方言の *q*

現代パラン方言における語頭の *q* は、以下 (133) にあるように荒尾の表記では *k* で現れる。荒尾の表記に *q* は無い。その代わりに *k* を用いる。そのため音素 *q*/*k* は荒尾の表記では区別されず、ともに *k* で示される。

- (133) 現代パラン方言の語頭の *q* と荒尾の *k*
- 3 *kumɯzoh* (*qumɯɣɔx*), 12 *kākau* (*qaro*), 90 *kimita* (*qumita*), 111 *kafurisi* (*qubulic*), 129 *kumi* (*qumi*), 156 *kumuchi* (*qumuti*), 218 *kanawa* (*qunawan*), 242 *kairun* (*qelun*), 278 *kannoh* (*ruqenux*), 333 *koak* (*quwaq*), 380 *kare^ggun* (*qurejun*), 395 *kutti* (*quti*), 414 *kakaya* (*quqeya*)

また、(134) にあるように現代パラン方言における語中の *q* が荒尾の表記に現れない例も見られた。

- (134) 現代パラン方言の語頭の *q* と荒尾の無表記
- 276 *ōlishi* (*qolic*)

現代パラン方言における語中の *q* は、以下 (135) にあるように荒尾の表記では *k* で現れる。

- (135) 現代パラン方言の語中の *q* と荒尾の *k*
- 39 *take* (*taqi*), 180 *pukun* (*puqun*), 186 *putinzakaizak* (*putinjyqeqyaq*), 213 *tsuki* (*cuqi*), 254 *tamakui* (*tumaqiy*), 284 *makairin* (*muqedin*), 302 *mahukishi* (*muhuqin*), 360 *pukan* (*puqan*), 368 *dakairashi* (*duqeras*), 403 *barukui* (*buluqun*), 414 *kakaya* (*quqeya*), 428 *nākan* (*niqan*)

また、現代パラン方言における語中の *q* は、以下 (136) にあるように荒尾の表記では二重表記 *kk* でも現れる。

- (136) 現代パラン方言の語中の *q* と荒尾の *kk*
- 8 *nakka* (*naqah*), 74 *pakkun* (*paqun*), 81 *bekki* (*biqu*), 397 *nukkaha* (*nuqah*)

次に (137) のように現代パラン方言の語末 *q* は、直前の母音が後舌母音 *a* または *u* である場合、荒尾の表記では **k** で表記される。

- (137) 現代パラン方言の語末の *q* と荒尾の **k** (後舌母音 *a*, *u* の直後)
74 *lipak* (*sipaq*), 110 *tairiak* (*teheyaq*), 186 *putinzakaizak* (*putinyuqeyaq*), 252 *koak* (*quvraq*),
279 *bauzak* (*boyaq*), 304 *kumutak* (*mutaq*), 360 *baetak* (*betaq*), 362 *chimitsuk* (*cumucuq*),
453 *nānak* (*nanaq*)

また、(138) のように現代パラン方言の語末が、荒尾の表記には見られない例もあった。

- (138) 現代パラン方言の語末の *q* と荒尾の無表記 (後舌母音 *a* の直後)
386 *mashia* (*busiyaq*)

語末子音 *q* の直前の母音が *i* である場合、この語末の *iq* に対し、荒尾は **iek** (139), **ek** (140), **iak** (141), **iyak** (142), **eak** (143) など様々な表記を用いる。現代パラン方言においてこの音連続は渡り音が挿入され [ɪq] または [ɪq̚] のように発音される。荒尾の表記はこの渡り音も表示していると言える。また (144) の **iyaka** というように語末子音のあとでさらに支え母音の *a* を添えた表記も見られた。

- (139) 現代パラン方言の語末の *iq* と荒尾の **iek**
434 *siāliek* (*seediq*)

- (140) 現代パラン方言の語末の *iq* と荒尾の **ek**
288 *siārek* (*seediq*)

- (141) 現代パラン方言の語末の *iq* と荒尾の **iak**
62 *babāriak* (*mberiq*), 124 *pūniak* (*puniq*)

- (142) 現代パラン方言の語末の *iq* と荒尾の **iyak**
32 *mafuriyak* (*muhuriq*)

- (143) 現代パラン方言の語末の *iq* と荒尾の **eak**
308 *claudek* (*doriq*)

- (144) 現代パラン方言の語末の *iq* と荒尾の **iyaka**

5.11 現代パラン方言の s

現代パラン方言における語頭の *s* は、以下 (145) にあるように荒尾の表記でも *s* で現れる。

- (145) 現代パラン方言の語頭の *s* と荒尾の *s*
- 13 sakenoho (sukemux), 35 simaro (sumalu), 80 sāpoa (sapuh), 80 sepōhan (supuhan), 83 sinaui (sunagi), 109 sikari (sukadi), 117 simada (suhumadac), 136 sārau (salo), 148 sāpo (sapo), 149 sāpa (sapah), 157 sāda (saya), 165 sēpau (sipo), 197 sēdan (siyay), 229 sāma (sama), 239 sūdu (sudu), 244 sasēbush (susibus), 280 sūmai (sume), 285 sānau (seno), 288 siārek (seediq), 294 soazi (stawai), 305 sinūnoho (sununux), 341 seppa (sepac), 388 sapishi (sapic), 417 sēnau (seno), 473 sāli (sari)

このほか、現代パラン方言における語頭の *s* が、以下 (146) にあるように荒尾の表記において *ch* で現れる例がひとつ見られた。これは、セデック語パラン方言に隣接する言語であるアタヤル語万大方言の影響が疑われる。アタヤル語万大方言における同源語は *cumaʔs* (Li 1981: 292) であり、初頭子音が *c* [ts] である。

- (146) 現代パラン方言の語頭の *s* と荒尾の *ch*
- 430 chimaisi (sumais)

現代パラン方言における語中の *s* は、以下 (147) にあるように荒尾の表記でも *s* で現れる。

- (147) 現代パラン方言の語中の *s* と荒尾の *s*
- 27 masekui (musekay), 29 mausa (mosa), 44 pakūsun (pulukusun), 45 maseyan (museyan), 103 pausa (posa), 179 basūkan (busukan), 244 sasēbush (susibus), 283 masolai (qubusuran), 292 lēsau (riso), 345 maseppa (mumusepac), 349 maposan (mupusan), 351 masipad (musupatun), 435 kasia (qusiya), 542 pagesa (putugesas)

また、現代パラン方言における語中の *s* は、(148) にあるように荒尾の表記では *sh* でも現れる。これは *s* の口蓋化を表した表記かと思われるが、セデック語において */s/* が口蓋化するかどうかは弁別的ではない。

- (148) 現代パラン方言の語中の *s* と荒尾の *sh*
- 91 ish (isu), 210 ush (usuk), 298 ash (asu), 386 mashia (busiyag)

さらに、現代パラン方言における語中の *s* が、以下 (149) にあるように荒尾の表記において二重表記 *ss* で現れる例がひとつ見られた。

- (149) 現代パラン方言の語中の *s* と荒尾の *ss*
29 *ussa* (*usa*)

現代パラン方言の語末 *s* にあたる表記として、荒尾は (150) と (151) にあるように *si* または *shi* を用いる。

- (150) 現代パラン方言の語末の *s* と荒尾の *si*
43 *ādasi* (*adis*), 173 *ēdasi* (*idas*), 177 *raoasi* (*nbuyas*), 430 *chimaishi* (*sumais*), 438 *lyksi* (*lukas*),
457 *mafūlisi* (*muhulis*)

- (151) 現代パラン方言の語末の *s* と荒尾の *shi*
54 *pattashi* (*patis*), 107 *maowashi* (*muqyas*), 259 *padaushi* (*pudaus*), 301 *raoashi* (*nbuyas*),
368 *dakairashi* (*duqeras*), 375 *tsakushi* (*cakas*), 506 *mafūlishi* (*muhulis*)

このほか、(152), (153), (154) にそれぞれ見られるように現代パラン方言の語末 *s* に対する荒尾の表記として *ssi*, *sh*, *s* も見られた。

- (152) 現代パラン方言の語末 *s* と荒尾の *ssi*
49 *mafūlissi* (*muhulis*)

- (153) 現代パラン方言の語末 *s* と荒尾の *sh*
236 *tarabush* (*turabus*), 224 *sasēbush* (*susibus*)

- (154) 現代パラン方言の語末 *s* と荒尾の *s*
369 *gudus* (*gudus*)

語末の *s* について、荒尾の表記では (150), (151), (152) に見られるように、語末子音の後に頻繁に *i* を付するのが特徴である。このことから語末の *s* が口蓋化を伴っていたことが推察される。

また、現代パラン方言の *muhulis* 「笑う」という語の語末子音に対し、荒尾は *si* (項目 457), *shi* (項目 506), *ssi* (項目 49) という多様な表記を用いている。

5.12 現代パラン方言の *x*

現代パラン方言の *x* を表す文字として、荒尾は *h* また *f* が使われており、*f* の場合は母音 *u* の前に現

れる。現代パラン方言において *x* が語頭に現れることはない³¹²。

現代パラン方言における語中の *x* は、以下 (155) と (156) にあるように荒尾の表記ではそれぞれ *h* または *f* で現れる。

- (155) 現代パラン方言の語中の *x* と荒尾の *h*
159 *makaha* (*mukaxa*), 347 *mahal* (*maxan*), 354 *mahadan* (*kumuxalan*), 401 *tsōhan* (*cuxan*),
450 *ohai* (*uxe*)

- (156) 現代パラン方言の語中の *x* と荒尾の *f*
53 *kufun* (*kuxun*)

現代パラン方言の語中の *x* が荒尾の表記では *kah* に相当する例も (157) に挙げたように二例見つけた。これは *x* と同じ軟口蓋の調音位置を *k* で表し、*x* と同じ摩擦音という調音法を *h* で表しているように見受けられる。荒尾の表記ではこれら子音の間に、母音 *a* が入りこんでいるが、なぜこの母音が入るかは分からない。

- (157) 現代パラン方言の語中の *x* と荒尾の *kah*
20 *dakahāyan* (*deheran*), 407 *nākahan* (*nexan*)

上の項目 20 における現代パラン方言の形式では、語中の子音が *x* ではなく *h* で現れている。セデック語トゥルク方言の同源語は *daxəgal* であり、語中の子音は *x* である。そのため、早期パラン方言においても語中の子音は *x* であったと推測される。荒尾の調査時代の後、パラン方言においてこの語の *x* が *h* に変わったのだろう。

現代パラン方言の語末における *x* は直前の母音が *u* の場合、語末の *ux* に対し荒尾は *oho* (158), *uh* (159), *uf* (160), *of* (161) など様々な表記を用いる。

- (158) 現代パラン方言の語末の *ux* と荒尾の *oho*
3 *kumyzoho* (*qumyux*), 13 *sakenoho* (*sukemux*), 28 *machēroho* (*mutilux*), 30 *mināroho* (*munarux*),
192 *daroho* (*darux*), 193 *raudoho* (*rodux*), 278 *kannoho* (*ruqemux*), 305 *sinynoho* (*sumumux*),
396 *wairoho* (*quwarux*)

- (159) 現代パラン方言の語末の *ux* と荒尾の *uh*
101 *tsynuh* (*tunux*), 127 *batsynuh* (*butumux*), 264 *tsyruh* (*gucurux*), 389 *baānuh* (*bureemux*)

- (160) 現代パラン方言の語末の *ux* と荒尾の *uf*

³¹² ただし「鉄」に限り *xiluy* と言う。

378 **hakauduf** (*hako utux*), 459 **tsuruf** (*qucurux*)

- (161) 現代パラン方言の語末の *ux* と荒尾の *of*
404 **tsurof** (*qucurux*)

現代パラン方言の語末の *x* の直前の母音が *a* の例は一例だけ見られ、*ax* を荒尾は (162) のように *aha* と記している。

- (162) 現代パラン方言の語末の *ax* と荒尾の *aha*
391 **bāgaha** (*begax*)

また現代パラン方言の語末の *ux* において、(163) にあるように荒尾の表記では語末の子音が抜けている例も見られた。

- (163) 現代パラン方言の語末の *ux* と荒尾の無表記
374 **rakaibu** (*rukebux*)

なお、(164) に挙げたように現代パラン方言の *qucurux* 「魚」という語の語末 *ux* に対し、荒尾は *uh*, *uf*, *of* という多様な表記を用いていた。

- (164) 現代パラン方言の語末の *ux* と荒尾の *uh* または *uf* または *of*
264 **tsuruh**, 459 **tsuruf**, 404 **tsurof** (*qucurux*)

5.13 現代パラン方言の *h*

現代パラン方言における語頭の *h* は、以下 (165) にあるように荒尾の表記でも *h* で現れる。

- (165) 現代パラン方言の語頭の *h* と荒尾の *h*
67 **hāle** (*hari*), 14 **habālau** (*hubaro*), 58 **harun** (*haluj*), 78 **habāgan** (*hubayan*), 92 **hinni** (*hini*),
113 **habu** (*habik*), 315 **hazi** (*hei*), 367 **hae^{ma}** (*hema*), 378 **hakauduf** (*hako utux*)

現代パラン方言における語中の *h* は、以下 (166) にあるように荒尾の表記でも *h* で現れる。

- (166) 現代パラン方言の語中の *h* と荒尾の *h*
2 **lowahai** (*rawahe*), 20 **dakahāyan** (*deheran*), 29 **maha** (*maha*), 75 **bahan** (*qubahay*), 80 **sepōhan** (*supuhan*), 83 **maho** (*mahu*), 190 **bahānni** (*qubuheni*), 255 **kuhin** (*kuhiy*), 302 **mahukishi** (*muhuqin*), 336 **mūhin** (*muhiy*), 339 **daha** (*daha*), 371 **pudahau** (*pudahuy*), 400 **tarahai** (*tulahi*),

461 paheppa (*puhepah*)

ただし (167) にあるように、現代パラン方言における語頭 *h* が *u* の前にある場合は、荒尾の表記では *f* を用いている。

- (167) 現代パラン方言の語頭の *h* と荒尾の *f*
166 funna (*hunac*), 269 fūrin (*hulīn*), 377 fuda (*huda*), 241 funni (*quhuni*)

同じく、(168) にあるように、現代パラン方言における語中 *h* が *u* の前にある場合は、荒尾の表記では *f* を用いている。

- (168) 現代パラン方言の語中の *h* と荒尾の *f*
10 ma^gēfui (*mujihun*), 32 mafuriya^k (*muhuriq*), 49 mafūlissi (*muhulis*), 135 rufun (*duhun*),
172 mafukin (*muquīn*), 189 ma^gāfui (*bugihun*)

また、現代パラン方言での *muquīn* 「死ぬ」における語中 *h* に対し、その直後の母音が *u* であるため、(169) にあるように、*f* を用いる例が見られるのだが、*h* を用いる例も見られた。それらの使い分けがはっきりしているわけではないことを示している。

- (169) 現代パラン方言の語中の *h* と荒尾の *f* または *h*
392 mahūkishi, 172 mafukin (*muquīn*)

以下 (170) のように語中において、現代パラン方言の語中 *h* が荒尾では無表記になっている例も見られた。

- (170) 現代パラン方言の語中の *h* と荒尾の無表記
16 matsairin (*cehedin*), 17 taeya (*teheya*), 97 kabu (*kahabu*), 487 taiyak (*teheyaq*), 219 tawak (*tahawak*), 299 tamuk (*tuhumukū*)

これらについては、荒尾の調査時代に、これらの単語には *h* が入っておらず、その後 *h* が挿入されるようになったのか、それとも本来あった *h* が荒尾の表記では書かれなかったのかは今のところ不明である。

次に、現代パラン方言の語末子音 *h* の直前の母音が *a* の場合、この語末の *ah* に対し、荒尾は *a* (171) または *aha* (172) で記す。

- (171) 現代パラン方言における語末の *ah* と荒尾の *a*

8 nakka (*naqah*), 15 rauka (*culokah*), 101 tana (*tanah*), 112 bāga (*bagah*), 144 po^ogara (*pujerah*),
149 sāpa (*sapah*), 204 mima (*mimah*), 317 ma^ogāra (*muja^ojah*), 41 kaneepa (*kuneepah*), 461
paheppa (*puhepah*), 471 e^oda (*eyah*)

- (172) 現代パラン方言における語末の *ah* と荒尾の *aha*
394 buguraha (*bugurah*), 397 kukkaha (*muqah*)

現代パラン方言の語末子音 *h* の直前の母音が *u* の場合、この語末 *uh* に対し、荒尾は *oho* (173),
oaha (174), *aha* (175), *oa* (176) など様々な表記を用いている。語末子音 *h* の前の母音として荒尾は
o を多く用いているが、これは音声的な現れに即している。現代パラン方言において、語末の *h* の前
の母音 *u* は、発音位置が引き下げられ、音声的に *o* に近くなる。この音変化が荒尾の時代にも見ら
れたことを示している。

- (173) 現代パラン方言における語末の *uh* と荒尾の *oho*
316 ma^ogēroho (*bukiluh*), 324 nūnoho (*munuh*)

- (174) 現代パラン方言における語末の *uh* と荒尾の *oaha*
21 chēkoaha (*tikuh*), 227 bairoaha (*beluh*)

- (175) 現代パラン方言における語末の *uh* と荒尾の *aha*
222 bunnaha (*bunuh*)

- (176) 現代パラン方言における語末の *uh* と荒尾の *oa*
67 agoa (*aguh*), 80 sāpoa (*sapuh*)

さらに、(177) にあるように現代パラン方言の語末子音 *h* の直前の母音が *i* の例がひとつ見られた
が、この例では現代パラン方言の語末の *h* が荒尾の表記では見られない。また、荒尾は直前の母音を
ā で記している（この母音表記は現代パラン方言の *e* に相当する）。これは音声的な現れに即している。
現代パラン方言において、語末の *h* の前の母音 *i* は、発音位置が引き下げられ、音声的に *e* に近くな
る。この音変化が荒尾の時代にも見られたことを示している。

- (177) 現代パラン方言における語末の *ih* と荒尾の *ā*
138 shūpā (*supih*)

5.14 現代パラン方言の *r*

現代パラン方言における語頭の *r* は、以下 (178) にあるように荒尾の表記でも *r* で現れる。

(178) 現代パラン方言における語頭の *r* と荒尾の *r*

140 *ribau* (*ribo*), 147 *rupi* (*rupi*), 151 *raudoho* (*rodux*), 225 *ru^ogai* (*ruje*), 310 *rupun* (*rupun*),
342 *rinma* (*rima*), 374 *rakaibu* (*rukebux*), 474 *räbi* (*rabi*)

現代パラン方言における語中の *r* は、以下 (179) にあるように荒尾の表記でも *r* で現れる。

(179) 現代パラン方言における語頭 *r* と荒尾の *r*

67 *matara* (*mutara*), 7 *paru* (*paru*), 30 *minäroho* (*munarux*), 32 *mafuriya^k* (*muhuriq*), 36 *papurai*
(*hupure*), 47 *pare^ogau* (*purejo*), 52 *habärau* (*hubaro*), 61 *urun* (*uruj*), 62 *babäriak* (*mberiq*),
76 *brigun* (*burigun*), 116 *mara^ogan* (*sunburanjan*), 122 *tarashi* (*turasi*), 130 *puru* (*puru*), 144
po^ogara (*pujerah*), 161 *barebu* (*murebu*), 176 *maurai* (*maure*), 192 *daroho* (*darux*), 236 *tarabush*
(*turabus*), 261 *parabau* (*purobo*), 64 *tsuruh* (*qucurux*), 330 *bërasi* (*birac*), 346 *magari* (*mu^ogari*),
352 *marinma* (*muriman*), 358 *karai* (*kere*), 366 *kaduruk* (*kuduruk*), 368 *dakairashi* (*du^ogeras*),
380 *kare^ogun* (*quregun*), 381 *mukarau* (*mukaro*), 384 *to^ogorau* (*tu^oguro*), 394 *buguraha* (*bugurah*),
396 *wairoho* (*quwanux*), 448 *kärau* (*qaro*), 489 *masoran* (*qubusuran*), 515 *sari* (*sari*), 527 *kare*
(*kari*)

また、現代パラン方言における語中の *r* は、以下 (180) にあるように荒尾では *l* でも現れる。

(180) 現代パラン方言における語頭の *r* と荒尾の *l*

2 *lowahai* (*ruwahe*), 277 *lunai* (*ruje*), 292 *lësau* (*riso*), 468 *linma* (*rima*), 475 *läbi* (*rabi*)

同様に、現代パラン方言における語中の *r* は、以下 (173) にあるように荒尾では *l* でも現れる。

(181) 現代パラン方言における語中の *r* と荒尾の *l*

67 *häle* (*hari*), 12 *kälu* (*qaro*), 14 *habälu* (*hubaro*), 47 *käle* (*kari*), 221 *maliku* (*buriku*),
295 *masolan* (*qubusuran*), 340 *tel* (*teru*), 350 *mateln* (*muterun*), 473 *säli* (*sari*)

現代パラン方言の *r* に対して荒尾が *r* と *l* を混同している例が以下 (182) である。このことから、荒尾の表記における *r* と *l* にははっきりした区別があるのではなく、日本人母語話者の特徴として *r* と *l* を聞き分けるのが困難であったことを示している。

(182) 現代パラン方言における語頭・語中の *r* と荒尾の *r* または *l*

342 *rinma*, 468 *linma* (*rima*)
225 *ru^ogai*, 227 *lunai* (*ruje*)

474 räbi, 475 läbi (*rabi*)
 52 häbarau, 14 habälau (*hubaro*)
 448 kärau, 12 kälau (*qaro*)
 489 masoran, 295 masolan (*qubusuran*)
 515 sari, säli (*sari*)
 527 karc, käle (*kari*)

このほか (183) と (184) に挙げたように少数ではあるが、現代パラン方言の語頭・語中における *r* に対し、荒尾が *d* を用いる例もある。これは、現代パラン方言における *r* の音価がたたき音 [ɾ] であることから、音声的に類似している [d] と混同されることがあったためと考えられる。

(183) 現代パラン方言における語頭の *r* と荒尾の *d*
 281 dakaidisi (*ruketic*), 290 daudan (*rudan*)

(184) 現代パラン方言における語中の *r* と荒尾の *d*
 168 mēdishī (*miric*), 318 daudeak (*doriq*)

また (185) の一例のみ語中において *y* を用いる例があった。これに関しては、語中に *y* を持つアタヤル語の同源語 *rhial* [ɾəhiyal] (Egerod 1980: 155) の影響を受けた可能性が考えられる。

(185) 現代パラン方言における語中の *r* と荒尾の *y*
 20 dakahāyan (*deheran*)

5.15 現代パラン方言の *l*

現代パラン方言における語頭の *l* は、以下 (186) にあるように荒尾の表記でも *l* で現れる。

(186) 現代パラン方言における語頭の *l* と荒尾の *l*
 217 lēmuk (*limuk*), 272 lakki (*laqi*), 419 lüksī (*lukus*), 492 lawa (*lawā*)

現代パラン方言における語中の *l* は、以下 (187) にあるように荒尾の表記でも *l* で現れる。

(187) 現代パラン方言における語中の *l* と荒尾の *l*
 49 mafūlissi (*muhulis*), 72 kalābui (*kulabuy*), 115 kulū (*kulu*), 276 ōlishi (*qolic*), 337 bailin (*belij*), 434 fūlin (*hulij*), 436 ma'gēlisi (*lipis*)

また、現代パラン方言における語頭の *l* は、以下 (188) にあるように荒尾では *r* でも現れる。

(188) 現代パラン方言における語中の *l* と荒尾の *r*

15 rauka (culokah), 181 sinaruksi (sino lukus), 245 rehi (lexi), 316 ma^gēroho (bukihuh), 365
rūbui (lubuy)

同様に、現代パラン方言における語中の *l* は、以下 (189) にあるように荒尾では *r* でも現れる。

(189) 現代パラン方言における語中の *l* と荒尾の *r*

1 orōbue (lebi), 9 maro (malu), 18 dārin (daliŋ), 19 chērun (gucihuy), 28 machēroho (mutihax),
35 simaro (sumahu), 37 tarcon (tuleuy), 50 kera (kela), 63 bārai (bale), 67 tsūrin (culiŋ),
73 marawa (mulawa), 77 pira (pila), 98 aran (alaŋ), 108 papūrin (puhuliŋ), 111 kafurisi (qubulic),
133 kuru (kulu), 123 bāri (bubali), 136 sārau (salo), 187 barābare (bulebun), 188 waru (walu),
193 bārun (bahuy), 216 para (pala), 230 tsubura (tubula), 242 kairun (qeluy), 269 fūrin (huliŋ),
400 taharai (tulahi), 403 barukui (buluqun), 433 ōrisi (qolic), 501 ma^gērīsi (liŋis)

さらに、現代パラン方言における語中の *l* は、以下 (190) にあるように荒尾では二重表記 *rr* でも現れる。

(190) 現代パラン方言における語中の *l* と荒尾の *rr*

100 tarrō (telu), 170 erru (elu)

5.14 節において現代パラン方言の *r* に対して荒尾が *r* と *l* を混同していたように、現代パラン方言の *l* に対して荒尾が *l* と *r* を混同している例が以下 (191) である。このことから、荒尾の表記 *l* と *r* にはっきりした区別があるのではなく、日本人母語話者の特徴として *l* と *r* を聞き分けるのが困難であったことを示している。

(191) 現代パラン方言における語頭・語中の *l* と荒尾の *l* または *r*

115 kulū, 133 kuru (kulu)
276 ōlishi, 473 ōrisi (qolic)
419 lūksi, 181 rūksi (lukus)
434 fūlin, 269 fūrin (huliŋ)
436 ma^gēlīsi, 501 ma^gērīsi (liŋis)

また、現代パラン方言の語頭・語中の *l* に対し、荒尾が *d* を用いる例 (192) と (193) も見られた。調査協力者の母語である閩南語の音韻が影響を与えた可能性がある (5.7 節参照)。

- (192) 現代パラン方言における語頭の *l* と荒尾の *d*
15 **dauka** (*culokah*)

- (193) 現代パラン方言における語中の *l* と荒尾の *d*
281 **dakaidisi** (*ruleic*), 354 **mahadan** (*kumuxalan*), 406 **magacda** (*mugeela*)

さらに (194) に挙げたように、現代パラン方言の語頭 *l* に対して、荒尾が *r* と *d* の両方を用いる語が見られた。

- (194) 現代パラン方言における語頭の *l* と荒尾の *r* または *d*
15 **rauka, dauka** (*culokah*)

(192), (193), (194) のように、現代パラン方言の *l* の表記として荒尾では *d* が見られる点については、現代パラン方言においても *d* と *l* が自由交替する語 (例 *dedax* ~ *ledax* 「光」) が少数だが見受けられることに類似している。しかし、調査協力者の母語である閩南語の音韻が影響を与えた可能性もある (5.7 節参照)。

このほか (195) にあるように、現代パラン方言の語中 *l* に対し、荒尾が *n* を用いる語が二例みられた。その理由はよくわからないが、調査協力者の母語である閩南語が影響を与えた可能性もある。Chappell (2018) によると、閩南語において音素としての *l* はないが、音素 *n* の異音として現れるのが *l* である。そのため、調査協力者が *l* と *n* を混同し、ここでは *l* であるべき分節音を *n* と発音したのかもしれない。

- (195) 現代パラン方言における語中の *l* と荒尾の *n*
99 **panimukan** (*pulumukan*), 365 **buncbun** (*bulebun*)

5.16 現代パラン方言の *m*

現代パラン方言における語頭の *m* は、以下 (196) にあるように荒尾の表記でも *m* で現れる。

- (196) 現代パラン方言における語頭の *m* と荒尾の *m*
67 **matara** (*mutara*), 9 **maro** (*malu*), 10 **ma^agēhui** (*mujihun*), 27 **masekui** (*musekay*), 28 **machēroho** (*mutilux*), 29 **mausa** (*mosa*), 29 **maha** (*maha*), 30 **mināroho** (*munarux*), 31 **mare^agu** (*mudeŋu*), 32 **mafuriya^k** (*muhuriq*), 39 **matake** (*mutaqi*), 42 **mapa** (*mapa*), 45 **maseyan** (*museyan*), 49 **mafūlissi** (*muhulis*), 60 **matakui** (*mutakun*), 65 **maitsu** (*miicu*), 70 **mākan** (*mekan*), 73 **marawa** (*mulawa*), 83 **maho** (*mahu*), 95 **maanū** (*maanu*), 107 **maowashi** (*muayras*), 145 **magāriak** (*mugeriq*), 159 **makaha** (*mukaxa*), 172 **mafukin** (*muhuqin*), 176 **maurai** (*muare*), 178 **mate^agi** (*mutenji*), 204 **mima** (*mimah*), 234 **mūdu** (*mudu*), 270 **mēdishī** (*miric*), 284 **makairin**

(*muqedin*), 317 **ma**^agāga (*mujaŋah*), 336 **m**ūhin (*muhiŋ*), 343 **matel** (*mumuteru*), 344 **mapit** (*mupitu*), 345 **maseppa** (*mumusepac*), 350 **mateln** (*muterun*), 351 **masipad** (*musupatun*), 352 **marinma** (*muriman*), 354 **mahadan** (*kumuxalan*), 406 **magaeda** (*mugeela*), 544 **matena** (*muntena*)

ただし、現代パラン方言の語頭 *m* に対して、(197) のように荒尾が **b** を用いる例も見られた。これも、5.4 節で見たように調査協力者の母語であったと考えられる閩南語の影響かもしれない。

- (197) 現代パラン方言における語頭の *m* と荒尾の **b**
62 **babāriak** (*muberiq*)³¹³, 161 **barebu** (*murebu*)

現代パラン方言における語中の *m* は、以下 (198) にあるように荒尾の表記でも *m* で現れる。

- (198) 現代パラン方言における語中の *m* と荒尾の *m*
3 **kumyzoho** (*qumyux*), 35 **simaro** (*sumalu*), 90 **kimita** (*qumita*), 94 **ima** (*ima*), 99 **panimykān** (*pulumukan*), 106 **kimeki** (*kumeeki*), 117 **simada** (*sulumadac*), 121 **umuki** (*gumuki*), 129 **kumi** (*qumi*), 137 **tūmun** (*tumun*), 141 **tamako** (*tumaku*), 156 **kumuchi** (*qumuti*), 158 **tsāman** (*caman*), 198 **rāma** (*damac*), 203 **kaaman** (*keeman*), 204 **mima** (*mimah*), 229 **sāma** (*sama*), 251 **tama** (*tama*), 254 **tamakui** (*tumaquy*), 256 **tsūmiyaka** (*cumiq*), 280 **sūmai** (*sume*), 286 **ama** (*ama*), 299 **tamuk** (*tuhumuku*), 304 **kumutak** (*mutaq*), 362 **chimitsuk** (*cumucug*), 410 **yamu** (*yamu*), 430 **chimai** (*sumais*)

また (199) のように、現代パラン方言の語中 *m* において、荒尾が二重表記の様相を示す **nm** や ^a**m** という表記を用いることもあった。

- (199) 現代パラン方言における語中の *m* と荒尾の **nm** ならびに ^a**m**
342 **rinma** (*rina*), 367 **hae^ama** (*hema*)

さらに (200) にあるように、現代パラン方言の語中 *m* において、荒尾が ^a**m** を用いる例も一語見られた。荒尾が *m* の代わりに **b** を用いる点で、上の (197) と類似の現象である。

- (200) 現代パラン方言における語中 *m* と荒尾の ^a**m**
55 **chi^abābu** (*cumebu*)

現代パラン方言において語末に *m* が現れることはない。荒尾の表記でも語末に *m* が現れることは

³¹³ または、この形式の語頭の **b** は語根 *beriq* の初頭子音を重複したものかもしれない。

なかった。

5.17 現代パラン方言の *n*

以下 (201) に挙げたように、現代パラン方言の語頭 *n* は、荒尾の表記においても *n* を用いている。

- (201) 現代パラン方言における語頭の *n* と荒尾の *n*
8 *nakka* (*naqah*), 324 *nūnoho* (*munuh*), 397 *nukkaha* (*muqah*), 407 *nākahan* (*nexan*), 428 *nākan* (*niqan*), 453 *nānak* (*nanaq*)

このほか、少数だが (202) に挙げたように、現代パラン方言の語頭 *n* が荒尾の表記では *r* を用いるものがあつた。

- (202) 現代パラン方言における語頭の *n* と荒尾の *r*
69 *rita* (*nita*), 177 *raboasi* (*nbuyas*)

上の項目 69 に関して Asai (1953: 56) にも同一の語が *dita* として現れる。5.14 節で見たように *r* は荒尾によって *d* と書かれることがある。この例もそうだろう。項目 177 については、なぜ *r* を用いたのかよくわからない。

現代パラン方言における語中の *n* は、以下 (203) に挙げたように荒尾の表記においても *n* を用いている。

- (203) 現代パラン方言における語中の *n* と荒尾の *n*
13 *sakenoho* (*sukenux*), 30 *mināroho* (*munarux*), 41 *paane* (*paane*), 66 *kana* (*kana*), 82 *kaneepa* (*kuneepah*), 83 *sinaui* (*sunagi*), 96 *inu* (*inu*), 101 *tana* (*tanah*), 103 *rincui* (*negun*), 124 *pūniak* (*puniq*), 127 *batsūnuh* (*butumux*), 181 *sinarūksi* (*sino lukas*), 218 *kanawa* (*qunawan*), 285 *sānau* (*seno*), 305 *sinūnoho* (*sumunux*), 324 *nūnuh* (*munuh*), 334 *tsūnuh* (*tumux*), 389 *baānuh* (*bureenux*), 410 *maanau* (*maanui*), 417 *sēnau* (*sino*), 453 *nānak* (*nanaq*), 484 *kinoan* (*kunurwan*), 544 *matena* (*muntena*)

現代パラン方言における語中の *n* は、以下 (204) に挙げたように荒尾の表記において二重表記 *nn* も散見される。

- (204) 現代パラン方言における語中の *n* と荒尾の *nn*
26 *tanna* (*tanah*), 92 *hinni* (*hini*), 166 *funna* (*hunac*), 190 *bahānni* (*qubuheni*), 222 *bunnaha* (*bunuh*), 241 *funni* (*quhuni*), 278 *kannho* (*ruqenux*), 287 *innä* (*ina*), 425 *pūnniak* (*puniq*), 449 *inni* (*ini*)

現代パラン方言における語中の *n* として、(205) に挙げたように荒尾が *n* と *nn* の両方で表記された語が見られた。ふたつの表記をはっきり使い分けていたのではなかったことを示している。

- (205) 現代パラン方言における語中の *n* と荒尾の *n* または *nn*
 101 *tana*, 92 *tanna* (*tanah*)
 124 *punniak*, 425 *punniak* (*puniq*)

以下 (206) のように現代パラン方言における語末の *n* は荒尾の表記でも *n* で表記される。

- (206) 現代パラン方言における語末の *n* と荒尾の *n*
 16 *matsairin* (*cehedin*), 20 *dakahāyan* (*deheran*), 40 *rērin* (*didin*), 40 *āgan* (*ayan*), 53 *kufin* (*kufin*), 70 *mākan* (*mekan*), 78 *habāgan* (*hubayan*), 99 *panimukan* (*pulumukan*), 116 *maragan* (*sunburayan*), 137 *tūmun* (*tumun*), 143 *pukan* (*puqan*), 158 *tsāman* (*caman*), 162 *arian* (*diyan*), 179 *basukan* (*busukan*), 203 *kaaman* (*keeman*), 223 *taukan* (*tokan*), 237 *batakan* (*butakan*), 284 *makairin* (*muqedin*), 290 *daudan* (*rudan*), 259 *masolan* (*qubusuran*), 198 *mādan* (*hulumadan*), 310 *rupun* (*rupun*), 348 *mahan* (*maxan*), 349 *maposan* (*mupusan*), 350 *mateln* (*muterun*), 354 *hamadan* (*kumuxalan*), 364 *pa^gawan* (*pulu^gawan*), 365 *bunibun* (*bulebun*), 380 *kare^gun* (*qure^gun*), 401 *tsōhan* (*cuxan*), 407 *nākahan* (*nexan*)

(207) のように現代パラン方言における語末の *n* は荒尾の表記では *d* を用いるものも一例だけあった。

- (207) 現代パラン方言における語末の *n* と荒尾の *d*
 351 *masipad* (*musupatun*)³¹⁴

歴史的な観点から言うと、現代パラン方言の語末の *n* では、本来の語末 *n* と、早期パラン方言の語末 *l* と *r* が合流している。1927 年に収集された Asai (1953) では、語末に *l* と *r* と *n* を有していた。荒尾の調査は Asai より早い段階に行われたので、語末子音は *n* と *l* と *r* との区別を有することが期待される。

ところが荒尾の表記において語末子音が *n* であるもののうち、表 4 に挙げたようにトゥルク方言においてこの語末子音が *l* または *r* で現れるものがある。これらは早期パラン方言も語末が *l* または *r* であった語であり、荒尾の調査時代にも *l* または *r* で現れることが期待されるのだが、なぜか *n* で現れ

³¹⁴ この語の語根は **sapat* (セデック祖語) であり、Asai (1953: 53) ではこれに接頭辞と接尾辞が付き *ma-sapat-l* 「四十」となる。荒尾の表記ではこの語根末の *t* が抜けている。または語末の子音連続 *d* が *d* として表記されたと考えられる。現代パラン方言の形式 *mu-supat-un* では接尾辞は *-un* (古くは *-ul*) である。

る。

表 4 荒尾の表記における語末 *n* のうち語末 *l* または *r* が予測されるもの

	荒尾	現代パラン方言	トゥルク方言
6	matsairin	<i>chehedin</i>	<i>səhədil</i> ^{B15}
10	ma ^a gēhui	<i>mujihun</i>	<i>nihur</i>
20	dakahāyan	<i>deheran</i>	<i>daxəgal</i>
40	rērin	<i>didin</i>	<i>dəɖɖil</i>
53	kufun	<i>kuxun</i>	<i>kuxul</i>
60	matakui	<i>mutakun</i>	<i>takur</i>
103	rineui	<i>negun</i>	<i>sənəgul</i>
189	ma ^a gāfui	<i>bugihun</i>	<i>bəgihur</i>
262	pātui	<i>qupatur</i>	<i>qəpatur</i>
348	mahan	<i>maxan</i>	<i>maxal</i>
349	maposan	<i>mupusan</i>	<i>pusal</i> ^{B16}
350	mateln	<i>muterun</i>	<i>mətərul</i>
365	bunebun	<i>bulebun</i>	<i>bələbul</i>
380	kare ^a gun	<i>qurəjun</i>	<i>qərəjul</i>
401	tsōxan	<i>cuxan</i>	<i>suxal</i>

実際、(208) に挙げたように現代パラン方言における語末 *n* に対して、荒尾が *l* を用いる語がひとつ見られた。この語に関して、現代パラン方言の *maxan* とトゥルク方言の *maxal* 「十」からセデック祖語**maxal* が再建されうる。荒尾の形式では語末の *l* が保たれている。

- (208) 現代パラン方言における語末の *n* と荒尾の *l*
 347 mahal (*maxan*)

さらに、(209) のように荒尾の項目において、語末に *r* を持つと考えられる例がひとつ見られた。ただし、荒尾は直後に母音の *e* を添えている。この語に関して、Ochiai (2018) は、現代パラン方言の形式 *bulebun* と、トゥルク方言の形式 *bələbul*、さらにこの語の重複性という構造上の特徴から、セデック祖語**buləbul* が再建されうるとする。つまり、荒尾の表記において語末 *e* の直前の子音（並びに語中）に荒尾が用いた *r* は、実際は *l* を表していることになる。この語に関して、荒尾は項目 365 に *bunebun* という、語末が *n* で現れる形式も挙げているが、ここでは語中の *l* までもが *n* で書かれている。

^{B15} この形式は Pecoraro (1977: 284) からである。

^{B16} この形式は Pecoraro (1977: 209) からである。

(209) 現代パラン方言における語末の *n* と荒尾の *r*

187 *barābare* (*bulebun*)

さらに、(210) のように現代パラン方言における語末の *n* は荒尾の表記では *i* を用いることもある。これらの語と表 4 のトゥルク方言における語末子音を比べ、早期パラン方言の語末子音を類推するとほとんどの項目（項目 10, 項目 60, 項目 189, 項目 262）において *r* であったことがわかる³¹⁷。

(210) 現代パラン方言における語末の *n* と荒尾の *i*

10 *ma^gchui* (*muji^hun*), 60 *matakui* (*matakun*), 103 *rineui* (*negun*), 189 *ma^ggāfui* (*bugihun*),
262 *pātui* (*qupātun*), 403 *barukui* (*buluqun*)

これらの語末が、なぜ荒尾の表記では *r* でも *n* でもなく *i* で現れるかについてだが、これはアタヤル語の影響を受けていると考えられる。項目 10, 項目 60, 項目 189 については、アタヤル語の同源語が見られるがこれらはそれぞれ、*ma^gihuy* (Ogawa 1931: 185), *matakuy* (Ogawa 1931: 141), *bai^huy* (Ogawa 1931: 81) という形式である。語末が *uy* という二重母音になっており、後部要素の *y* は歴史的には *r* から変化したものである (Li 1981: 264)。

5.18 現代パラン方言の *ŋ*

(211) にあるように、現代パラン方言の語頭 *ŋ* に対し、荒尾は *ⁿg* という表記を用いている。荒尾はこの表記で [ŋ] を表したと考えられる。

(211) 現代パラン方言における語末の *ŋ* と荒尾の *ⁿg*

369 *ⁿgudus* (*ŋudus*)

また、(212) にあるように現代パラン方言の語頭 *ŋ* に対し、荒尾は *g* という表記も用いている。これは鼻音の聞き逃しかと考えられる。

(212) 現代パラン方言における語末の *ŋ* と荒尾の *g*

410 *gāzan* (*ŋa^gan*)

現代パラン方言における語中の *ŋ* に対し、以下 (213) にあるように荒尾は *ⁿg* を用いている。

³¹⁷ 項目 403 については、セデック語トゥルク方言の同源語が見つからないため、早期パラン方言の語末子音が *l* か *r* か判断できない。また、項目 103 における早期パラン方言の語末子音は *r* ではなくて *l* である。なぜ語末の *l* が荒尾には *i* に聞こえたのかはわからない。

(213) 現代パラン方言における語中の *ŋ* と荒尾の *ⁱ*g

10 ma^ⁱgēfui (*muŋihun*), 31 mare^ⁱgu (*mudeŋu*), 40 ä^ⁱgan (*aŋan*), 144 po^ⁱgara (*puŋerah*), 178
mate^ⁱgi (*muteti*), 225 ru^ⁱgai (*ruŋe*), 317 ma^ⁱgäga (*muŋaŋah*), 364 pa^ⁱgawan (*puŋuŋawan*)

また、現代パラン方言における語中の *ŋ* に対し、以下 (214) にあるように荒尾は *g* も用いている。
(212) にも挙げたような鼻音の聞き逃しと考えられる。

(214) 現代パラン方言における語中の *ŋ* と荒尾の *g*

78 ha^ⁱgagan (*hubaŋan*), 317 ma^ⁱgäga (*muŋaŋah*), 346 ma^ⁱgari (*muŋari*)

もしくは、(212) と (214) に見られる鼻音の抜けた表記は、調査協力者の李阿輝氏の母語であったと考えられる閩南語が影響している可能性もある。Chappell (2018) によると、閩南語において音素として */g/* は立てられないが、*[g]* は */ŋ/* の異音として現れるとある³¹⁸。つまり、*g* と *ŋ* は相補分布の関係にある。このことが、荒尾の調査協力者のセデック語の発音に影響を与え、*ŋ* と *g* を混同したのではないだろうか。ここでは *ŋ* であるはずの分節音が荒尾では *g* で表記する例を挙げたが、逆に *g* であるはずの分節音が荒尾では *ŋ* で表記される一例も見られた (5.9 節)。

さらに、現代パラン方言における語中の *ŋ* に対し、以下 (215) にあるように荒尾は *n* も用いている。これは鼻音を聞き取っているが、調音位置の聞き取りを誤っている。

(215) 現代パラン方言における語中の *ŋ* と荒尾の *n*

40 ä^ⁱnan (*aŋan*), 231 bu^ⁱna (*buŋa*)

(216) に挙げたように、現代パラン方言における語末の *ŋ* に対し、荒尾は一貫して *n* を用いている。調音位置を聞き誤ったと考えられる。

(216) 現代パラン方言における語中の *ŋ* と荒尾の *n*

18 dā^ⁱrin (*daliŋ*), 19 chē^ⁱrun (*guciliŋ*), 37 tare^ⁱon (*tuleuŋ*), 45 mase^ⁱyan (*muŋeŋaŋ*), 58 har^ⁱun (*haŋuŋ*), 61 ur^ⁱun (*uruŋ*), 67 tsū^ⁱrin (*culiŋ*), 75 ba^ⁱhan (*qubahaŋ*), 85 tsā^ⁱpan (*capaŋ*), 98 ara^ⁱn (*alaŋ*), 104 pu^ⁱton (*puŋuŋ*), 108 pa^ⁱpurin (*puhuliŋ*), 135 ru^ⁱfūn (*duhuŋ*), 166 ya^ⁱyun (*ɣaŋuŋ*), 186 putin^ⁱzakaizak (*putiŋyugəyq*), 193 bā^ⁱrun (*baŋuŋ*), 197 sē^ⁱdan (*sīŋaŋ*), 228 gē^ⁱtsan (*gicaŋ*), 242 kai^ⁱrun (*qeluŋ*), 255 ku^ⁱhin (*kuhiŋ*), 268 fū^ⁱrin (*huliŋ*), 336 mū^ⁱhin (*muhiŋ*)

³¹⁸ 具体的に言うと、オンセットが *ŋ* であり、ライムが鼻母音である場合、このオンセットは *[g]* に変わる。

5.19 現代パラン方言の子音と荒尾の表記の対応

ここまで述べてきたことを表5にまとめる。現代パラン方言において、該当する表記が用いられない無い箇所は―で示す。なお q, x, h の語末について、荒尾の表記は直前の母音も含めたものを挙げる。

表5 現代パラン方言の半母音・子音と荒尾の表記の対応

現代パラン方言 (語頭／語中／語末)	荒尾 (語頭)	荒尾 (語中)	荒尾 (語末)
y/y/―	y, z	y, z, d, r	― (4.4.1 節参照)
w/w/―	w	w	― (4.5.1 節参照)
p/p/―	p	p, pp	―
b/b/―	b, m	b, m	―
t/t/―	t, ch, ts	t, tt, ch, ts	―
c/c/c	ts, ch	ts, ch	si, shi, 無表記
d/d/―	d, l, r	d, l, r	―
k/k/k	k	k, kk	k, 無表記
g/g/―	g	g, w, 無表記	―
q/q/q	k, 無表記	k, kk	直前母音が a の場合 ak 直前の母音が u の場合 uk 直前の母音が i の場合 ick, ck, iak, cak, iaka
s/s/s	s	s, ss, sh	si, shi, ssi, s
―/x/x	―	h, f	直前の母音が a の場合 aha 直前の母音が u の場合 oho, uhu, uh, uf, of, u のみ
h/h/h	h, f	h, f, 無表記	直前の母音が a の場合 aha 直前の母音が u の場合 oho, oaha, aha, oa 直前の母音が i の場合 ā
r/r/―	r, l, d	r, l, d	―
l/l/―	l, r	l, r, rr, d	―
m/m/―	m	m, nm, ⁿ m	―
n/n/n	n, r	n, nn	n, l, r, i
ŋ/ŋ/ŋ	ⁿ g	ⁿ g	n

荒尾は二重表記が pp, tt, kk, ss, rr, nn など (nm, ⁿm も二重表記の一種) を用いるのが特徴的である。ただ、セデック語パラン方言において分節音の長短は弁別的ではない。Asai (1953: 6-7) に述べ

られるように、強勢位置にある次末音節の母音、またはその直後の子音は音声的に長く発音される傾向がある。荒尾の表記はこのような音声的な現象を表現しようとしたものと思われる³¹⁹。これら場合は子音が二重表記で現れたが³²⁰、母音が二重表記で現れた例もあった。それが項目 390 paai「祖母」（現代バラン方言 *pai* [ˈpa.i]）である。

また、荒尾の表記において、現代バラン方言の語末 *c*（早期バラン方言の語末 *t* に遡る）と現代バラン方言の語末 *k* に当たる子音が無表記として現れることがあるが、これは破裂音 *t* と *k* が語末において無開放であり、その聞き取りが困難だったためと考えられる。

荒尾の表記における語末子音 *s* の後には支え母音として *i* が添えられていることもある（現代バラン方言の語末子音 *s* と *c* に相当する荒尾の表記において見られた）。また、荒尾は現代バラン方言の語末子音 *q*, *x*, *h* の後にも支え母音を添えていることが多い。これら子音の表記の後に添えられた母音は荒尾が子音の直前に用いている母音と同一であるという特徴を持つ。

6. 語彙的考察

荒尾の語彙集はセデック語バラン方言を収録したものだが、時にセデック語バラン方言の形式ではないものも混入していることがわかった。それらの語のいくつかは、セデック語トゥルク方言（6.1 節）、アタヤル語（6.2 節）、パゼツへ語（6.3 節）、または閩南語（6.4 節）であることが特定できた。6.5 節では、現代バラン方言の形式に見られる語頭や語中における分節音が、荒尾の表記では脱落していた例を挙げる。6.6 節では荒尾の語彙集には見られたが、現代バラン方言ではほぼ用いられなくなった代名詞について言及する。

6.7 節以降（7 節の形態的考察、8 節の意味的考察、9 節の統語的考察）では、荒尾の調査協力者について、セデック語の非母語話者としての言語現象が垣間見える点を議論する。6.7 節で取り上げるのは、セデック語における細分化された語彙の習熟度の低さを示すもので、ある物・概念を表すために説明的な表現を用いている。

6.1 セデック語トゥルク方言の混入

表 6 にセデック語トゥルク方言と特定された荒尾の項目と、荒尾の語彙に対応するセデック語バラン方言の形式を挙げる。

表 6 セデック語トゥルク方言の混入

	荒尾	トゥルク方言	現代バラン方言
220	tēho「櫛」	teiyax	sulau
233	bannnoan「梅、李」	bənuvar「李」	buruqawe「李」

³¹⁹ これらから音声的に長めに発音される子音には閉鎖音、摩擦音、流音、鼻音などが含まれることもわかる。

³²⁰ 一例だけ例外として語末の二重表記 *ssi* も見られた。

200	bēgaha 「米」 ³²¹	<i>buwax</i>	<i>beras</i>
257	supuhu 「油虫」 ³²²	<i>supug</i>	<i>pucupux</i>
300	uttashi 「睾丸」	<i>utas</i> 「陰茎」 ³²³	<i>begax</i>

6.2 アタヤル語の混入

表7にアタヤル語と特定された荒尾の項目と参照した文献、荒尾の語彙に対応する現代セデック語・パラン方言の形式を挙げる。この中で、項目80と項目174については、現代パラン方言にも荒尾の挙げた形式は見られるものの、荒尾の挙げた注釈と一致しないものである。これらはアタヤル語の同源語から意味を借用していると考えられる。項目174では、荒尾の語頭子音がgであるが、この子音はアタヤル語の形式には見られず、現代パラン方言には見られる。これらについて、語形はパラン方言のままで、意味はアタヤル語のものに替わっていると言することができる。

表7 アタヤル語の混入

	荒尾	アタヤル語	現代パラン方言 (荒尾と同形)	現代パラン方言 (荒尾と同義)
11	masitu, masikitu 「硬い」	<i>məhəkito, məskito</i> (小川 1931: 81)	---	<i>saadtx</i>
24	rabu 「白い」	<i>məlabu</i> ³²⁴	---	<i>behege</i>
46	makaki 「寄セル」	<i>məkəkiya</i> (小川 1931:402) ³²⁵	---	<i>teheyaq</i>
64	makuri 「盗ム」	<i>məqoreq</i> (小川 1931: 284)	---	<i>gumeeguy</i>
80	sāpoa 「掃ク」	<i>sapuh</i> (黄・呉 (編) 2000)	<i>sapuh</i> 「治療する」 ³²⁶	<i>sukesik</i>
126	baruku 「簸」	<i>bəluku</i> (小川 1931: 361)	---	<i>butuku</i>
174	goagi 「太陽」 ³²⁷	<i>wagi</i> (小川 1931: 215)	<i>gagi</i> 「ガラス」	<i>hido</i>

³²¹ 形式のみを考えるなら、荒尾の表記に対応する現代パラン方言は *begax* 「睾丸」に相当する。意味と形式の両方考えるとトゥルク方言のほうがより近い。また、トゥルク方言との同源語がアタヤル語にも *boax* 「米」(小川 1931: 139) として見られる。荒尾の挙げた語彙はセデック語・トゥルク方言がアタヤル語かどうかだろう。

³²² この項目に関しては、現代パラン方言の第一音節 *pu* が荒尾の表記で現れないだけだとすると、パラン方言を記録したものと言えるかもしれない。ただ現代パラン方言の *c* が荒尾の表記では *s* であることが難点である。

³²³ アタヤル語にもトゥルク方言との同源語 *utas* 「陰茎」(Egerod 1980: 722) がある。荒尾の挙げた語彙はセデック語・トゥルク方言がアタヤル語かどうかだろう。

³²⁴ 執筆者のフィールドノートによる。南投縣仁愛鄉新生村眉原集落のアタヤル語話者 Toku Sapu の挙げた形式。

³²⁵ 小川の注釈は「立寄」である。小川の形式に見られる語末の *ya* が荒尾の形式には見られないのが難点ではあるが、アタヤル語の形式と判断した。

³²⁶ 「(シャマンが) 医术を施す」という意味である。

³²⁷ 荒尾の項目 441 では同一の語が「望遠鏡」として登場しており、これが「ガラス」の意味に通じる。荒尾の表記の *oa* がアタヤル語の *a* に対応する語が、なぜ母音にこのような違いが見られるかはわからない。

194	mayūmin 「粥」	<i>myumin</i> (小川 2006: 368) ³²⁸	---	<i>ido rumu</i>
314	mahikan 「瘡セル」	<i>məhəikan</i> (小川 1931: 284)	---	<i>kaure</i>
326	banā 「骨」	<i>bani</i> (鳥居 1901b: 375)	---	<i>buuc</i>
436	ma ^a gēlisi 「泣ク」	<i>məŋilis</i> (小川 1931: 272)	---	<i>mulinjis</i>

アタヤル語の語彙の混入、意味の混入のほかにも、アタヤル語の音韻的影響を受けた形式が見られたことは5.7節、5.11節、5.14節、5.17節に述べた。また、セデック語トゥルク方言からの語彙の混入として挙げられた項目200と項目300についても、同源語の形式がアタヤル語でも同一であり、もしかしたらこれらもアタヤル語の語彙を混入したのかもしれない。荒尾の語彙集は、当時のセデック語パラン方言を収録したものであるが、その中に潜むアタヤル語の混入は語彙面・音韻面でも見られることが分かった³²⁹。

6.3 パゼツへ語の混入

表8にパゼツへ語と特定された荒尾の項目と参照した文献、荒尾の語彙に対応する現代セデック語パラン方言の形式を挙げる。荒尾の調査協力者は平埔族であったことが端書に記されている。平埔族はいくつかの種族に分れるが、その中のパゼツへ族であったことを、これらパゼツへ語の語彙の混入から知ることができる。

表8 パゼツへ語の混入

	荒尾	パゼツへ語	現代パラン方言
134	ruṭsun 「杵」	<i>luzuy</i> 「臼」 (Li and Tsuchida 2001: 171)	<i>duhuɣ</i> 「臼」
235	aidan 「豆」 ³³⁰	<i>xaiday</i> (Li and Tsuchida 2001: 317)	<i>beluh</i>
258	daḡau 「蠅」	<i>rangaw</i> (Li and Tsuchida 2001: 242)	<i>rujedi</i>
266	kuzun 「蝦」	<i>kuzuy</i> (Li and Tsuchida 2001: 161)	<i>boluy</i>

³²⁸ 小川 (2006: 368) におけるアタヤル語の資料番号 5b には、荒尾の形式と同一の形式と考えられる「粥」が記録されている。そのため荒尾した語はアタヤル語の形式であると判断したが、これと同形式の語が他のアタヤル語の資料に見られないのが難点である。

³²⁹ 荒尾のセデック語パラン方言を記録した語彙集の中に、セデック語トゥルク方言やアタヤル語の要素が少なからず混入しているのは、アタヤル語とセデック語が系統的に同じ語群（アタヤル語群）に属する言語であることに起因するだろう。荒尾の調査協力者はセデック語パラン方言の母語話者ではなかった。そのため、セデック語パラン方言とセデック語トゥルク方言を区別すること、これらセデック語の方言とアタヤル語を区別することは難しかっただろう。さらに興味深いのは、パゼツへ語も混入していることである（6.3節）。荒尾の調査協力者がなぜこれらのパゼツへ語の語彙をセデック語であると勘違いしていたかはわからない。ただ、この時代パゼツへ族はすでに漢民族化していたはずだが、言語は完全には失われていなかったことがわかる。

³³⁰ 同源形式と思われる語 *qaerang* 「豆」 (小川 1931: 358) がアタヤル語にも見られたが、語中子音が d である点においてパゼツへ語の形式のほうが荒尾の記録した語により近い。

6.4 閩南語の混入

閩南語が混入されていると考えられる項目を表9に示した。このうち項目 118, 項目 119, 項目 120 は小川 (2006) において、閩南語であると特定されている (10 節参照)。表中の閩南語の表記は曹他 (編) (2011) を参考にした。

表9 閩南語の混入

	荒尾	閩南語	現代バラン方言
57	papeä 「的 (マト)」 ³³¹	<i>pha.ʔpe a</i>	—
118	kiyon pan 「弓」	<i>kiong pan</i>	<i>beheniq</i>
119	kiyon che 「矢」	<i>kiong tsɿ^a</i>	<i>budi</i>
120	pinä 「笛」	<i>phin a</i>	<i>iyuk</i>

閩南語の要素が見られるのは語彙面に限らない。音韻面においてもその影響が窺えることは5.4 節, 5.7 節, 5.15 節, 5.16 節で述べた。

6.5 語頭・語中における分節音の無表記

表 10 に挙げたように、現代バラン方言の三音節以上の語において、荒尾の表記では語頭の音節が見られないことがある。これらの欠落部位は強勢位置である次末音節より前の音節に当たる。なぜ荒尾の表記ではこれらの音が表記されなかったかは不明だが、現代バラン方言の語頭 *qu* が荒尾の表記に見られない例が多いという特徴がある。

表 10 現代バラン方言の三音節以上の語と荒尾における語頭の無表記

	荒尾	現代バラン方言
15	rauka, dauka 「軽イ」 ³³²	<i>culokah</i>
19	chērun 「池, 堀」	<i>gucihuy</i>
72	läbui 「紙」 ³³³	<i>kulabuy</i>

³³¹ 項目 57 における後半部分 *peä* は閩南語「靶子 (まと)」の可能性が高いと潘翕翔氏が指摘した (私信)。前半部分の *pa* は閩南語「拍 (打つ)」に相当するだろうと考えられる。秋谷裕幸からも閩南語「拍靶子」を表したもののだろうが、閩南語に見られる有気音・無気音の表記の使い分けは気にかかるとの指摘を受けた (私信)。「拍」は有気音だが、荒尾の表記 *pa* にはそのことを示す表記は見られない。これについて、項目 120 に類例が見られる。閩南語の「笛」は語頭子音が有気音であるが、荒尾の表記 *pinä* ではそのことを示す表記は見られない。そのため、項目 57 の前半は恐らく「拍」を表しており、全体として「まとを打つ」という動詞句を構成していることになる。また、項目 57 と項目 120 は閩南語の形式において、語末母音が下降調の声調を持つが、それが荒尾の発音区別符号で表され (4.7 節)、荒尾はその音節にアクセントが置かれていると判断しているらしいことがわかる。また、「まと」に相当するセデック語バラン方言は見当たらない。

³³² この語に関しては、アタヤル語の同源語 *laukah* 「健やか」(小川 1931: 189) の影響を受けている可能性も考えられる。この形式は、現代バラン方言の語頭 *cu* に当たる分節音を持たない。

³³³ 但しもうひとつ *kaläbui* という、現代バラン方言に一致する形式も載っている。

75	bahan 「合点スル」	<i>qubahan</i> 「聞く」
399	katina 「南蕃人」	<i>mukatina</i>
164	sia 「水」 ³³⁴	<i>qusiya</i>
190	bahānni 「鳥」	<i>qubuheni</i> ³³⁵
241	funni 「薪」	<i>quhuni</i>
262	pätui 「蛙」	<i>qupatum</i>
264	tsyruh 「魚類の総名」	<i>qucurux</i>
295	masolan 「姉、兄、酋長」	<i>qubusuran</i>
396	wairoho 「藤」	<i>quwarux</i>
116	mara ^a gan 「槍」	<i>sunburayan</i>
298	mādan 「親戚」	<i>hulumadan</i> 「自分とは異性の兄弟姉妹」

少数ながら、現代パラン方言の三音節以上の語における語中の分節音が、荒尾の表記では見られないこともあった。現代パラン方言の *pulumukan* 「閩南系漢民族」が荒尾の表記では *pamukan* (項目 113) であり³³⁶、現代パラン方言の *pulukusun* 「服を着る」が荒尾の表記では *pakusun* (項目 438) である。さらに、現代パラン方言の *bureenux* 「平地」が荒尾の表記では *baānux* (項目 389) であり、現代パラン方言の *hulumadac* (または *sulumadac*) が荒尾の表記では *simada* (項目 117) である。

6.6 現代パラン方言では廃れた指示詞

荒尾の項目には現代パラン方言では用いられなくなった指示詞 *hish* 「ソノ、アノ、アレ、アソコ」が現れた (表 11)。この語は現代パラン方言では *hisu* に相当し「そこ」を意味する語であることが調査の結果判明したが、自然発話で用いられるのを筆者が耳にしたことはない。この形式は恐らく二人称単数を表す *isu* から派生されたものと考えられる³³⁷。

表 11 現代パラン方言では廃れた指示詞 *hisu*

	荒尾	語釈
480	hish babuyan pare ^a gau maanu?	「アノ山ノ名ハ何ト言フ乎」
481	hish dāya pare ^a gau maanu?	「アノ蕃社ノ名ハ何ト言フ乎」
521	hish maro	「ソレハヨイ」
516	ussa hish	「アソコへ行ケ」

³³⁴ 但し項目 535 に *kasia* という、現代パラン方言に一致する形式も載っている。

³³⁵ 現代パラン方言において *qubeheni* とも言う。語頭を脱落させ *beheni* と言うこともある。

³³⁶ 但し *panimukan* という、音節の数において現代パラン方言に一致する形式も載っている。

³³⁷ また、移動を表す動詞に *gisu* 「やって来る」という語があるが、これも *isu* からの派生が疑われる。

6.7 細分化された語彙の未使用

荒尾の意図した注釈に適切な語が、現代パラン方言には存在するにも関わらず、荒尾は最適ではないが類似の語を挙げていることがある。それらを表 12 に挙げる。荒尾の語彙の直訳と現代パラン方言での適切な語を付している。

表 12 荒尾による説明的表現と現代パラン方言における適切な語

	荒尾	直訳	現代パラン方言
151	raudoho sāpa 「鶏小屋」	鶏の家	<i>kadu</i>
152	bābui sāpa 「豚小屋」	豚の家	<i>tibu</i>
153	lappa sāpa 「牛小屋」	牛の家	<i>q<un>alan</i> (<UVP.PST>enclose)
154	sāpa pādai 「穀小屋」	米の家	<i>repun</i>
306	okka sinūnoho 「ハゲ」	毛髪が無い	<i>buyuh</i>
318	okka daudeak 「盲目」	目が無い	<i>m-budu</i> (STAT-blind)
315	egu hazi 「肥へル」	実が多い	<i>mu-siyay</i> (STAT-fat) 「脂肪が多く太っている」、 <i>mu-tu-beno</i> (STAT-NONV-fat) 「(健康的に) 肥えた」
149	sāpa hinni 「家の内」	この家?	<i>sapah</i>
150	sāpa hish 「家ノ外」	その家?	<i>ṇayuc</i>
164	eda habārau sia 「瀑布」	高所から水が来る?	<i>tugelaq</i>
169	mabuyan habārau 「山頂」	高い山?	<i>digiyay</i>
247	funni maina 「樹皮」	樹の皮?	<i>rehaq</i>
381	mukarau sia 「露」	水が渡る?	<i>duremus</i>
127	simada batsunuh	刀のための石?	<i>lupax-an</i> (whet-UVL)
155	sāpa habārau 「屋根」	高い家?	<i>d<un>amux</i> (<UVP.PST>thatch)
172	mutakui sia mafukin 「溺死」	水場で転び死ぬ?	<i>tu-guqeguq</i> (NONV-drown)
544	matena dange 「共ニ朋友ナリ」	友と同等?	<i>musu-daji</i> (RCPL-friend)
498	taeta yakko ³³⁸ 「吾ニ貸セ」	私に渡せ?	<i>ita</i> 「よこせ」
510	eda hinni 「コヽニ来レ」	ここに来い	<i>aguh</i>

荒尾の語彙を表す適切な表現が、現代パラン方言では一語で表せる語でありながら、荒尾の語彙集では二語以上の説明的な表現を用いていることが多い。例えば項目 468 の *raudoho laki* 「雞ノ卵」(直訳 鶏の仔)であるが、「卵」には *baluy* という語を現代パラン方言では用いる(ただし荒尾も項目 193 では *bārun* 「卵」を挙げている)。

³³⁸ 荒尾の文をあえて現代パラン方言に置き換えると **ta-i=ta yaku* (see-UVP/VUL.IMP=IPL.INCL)となる。異なる二つの代名詞、接語代名詞属格の *=ta* と独立形の *yaku* が表れているという点で非文法的な文である。

荒尾の二語目の *laqi* 「子供」で「卵」を表すことはない。また、この *laqi* は「人間の子」を表し、「動物の仔」には *wawa* という別の形式がある。ところが荒尾の項目 265 *tsuruh lakki* 「魚ノ子」と項目 272 *lappa lakki* 「子牛」には揃って *laqi* が用いられている。

さらに、意味的に現代パラン方言とは異なる場合も見られる。現代パラン方言で「赤」は *mu-tanah*, 「血」は *dara* であるが、荒尾の項目 304 では「血」に *tanna* という「赤」を表す形式を挙げている。現代パラン方言で「草」は *sudu*, 「葉」は *waso* であるが、荒尾の項目 444 では「草」を表す *sudu* が「葉」の意味で用いられている。加えて、現代パラン方言で「家」は *sapah*, 「巢」は *rudu* であるが、荒尾の項目 138 と項目 249 では「家」を表す *sapa* が「巢」の意味で用いられている。

このほか動詞の使用においても、荒尾の語彙表では語釈に最適な動詞ではなく、類似の動詞を挙げていることがある。それら荒尾による語釈に忠実ではない動詞（太字で表示）と、それに対応する現代パラン方言の語彙、さらに語釈に忠実な現代パラン方言の動詞を表 13 に挙げる。

表 13 荒尾の用いる動詞とそれに代わる現代パラン方言での最適な語

	荒尾	現代パラン方言において対応する動詞	現代パラン方言で用いられる動詞
433	<i>niau maikan</i> <i>ōrisi</i> 「猫ガ鼠ヲ咬ム」	<i>mekan</i> (AV-eat) 「食べる」	<i>q<um>iguc</i> (<AV>bite) 「咬む, (蚊が) 刺す」
469	<i>ish maikan</i> <i>nūnoho</i> 「汝乳ヲ飲メ」	<i>mekan</i> (AV-eat) 「食べる」	<i>munuh-i</i> (suck-UVP/UVL.IMP) 「乳を吸え」 <i>mah-i</i> (drink-UVP/UVL.IMP) 「飲め」
435	<i>tsūrin</i> <i>sēdan</i> 「焼キタル肉」	<i>culij</i> (AV.IMP.get.burnt) 「火傷する」	<i>un-duh-an</i> (PST-roast-UVL) 「直火で焼く」
426	<i>simaro</i> <i>pūnniak</i> 「火ヲツクロヘ」	<i>sumahu</i> (AV.make/repair) 「作る, 修理する」	<i>putup-i</i> (lith.up-UVP/UVL.IMP) 「火を付ける」
440	<i>pausa</i> <i>pūniak</i> 「アカリヲツケヨ」	<i>posa</i> (AV.put) 「置く」	<i>putup-i</i> (lith.up-UVP/UVL.IMP) 「火を付ける」
451	<i>maanu</i> <i>kaneepa?</i> 「何ヲスルカ」	<i>k<um>eepah</i> (<UVP.PST>work.in.field) 「畑仕事をした」	<i>mu-miyak</i> (STAT-do) 「する, 家事をする」
530	<i>yakko</i> <i>mafulissi</i> 「私ハ喜ヒマス」	<i>mu-hulis</i> (STAT-laugh) 「笑う」	<i>mu-qaras</i> (STAT-happy) 「楽しい, 嬉しい」
531	<i>ish ma'gelisi</i> 「彼ハ悲ミマス」	<i>l<um>ijis</i> (<AV>cry) 「泣く」	<i>naqah kaxun</i> (STAT.bad feeling) 「気分が悪い, 悲しい」

語彙集の後半になると、複合語や動詞句などの句や文を成すやや長めの項目が挙げられているが、

これらの項目において、表現の方法や、動詞の屈折・派生の形式が現代とは異なるものが多くみられ、荒尾の調査協力者のセデック語非母語話者としての言語特徴を示すものだと考えられる。これら現代パラン方言とは異なる点について、7 節では形態的に、8 節では意味的に、9 節では統語的に検討する。

7. 形態的考察

荒尾の語彙集において、現代パラン方言とは形態的に異なる箇所について考察する。7.1 節では現代パラン方言では許容されない非動作主体の形態について述べる。7.2 節では命令形を用いるべきなのに用いていない例とその逆に命令形を用いるべきではないのに用いている例を挙げる。7.3 節では否定辞後の動詞の形式として、現代パラン方言では命令形が用いられるが、荒尾ではそうになっていないことを、7.4 節では、現代パラン方言では時制を表すための動詞の屈折を用いるが、荒尾ではそうになっていない例、誤った時制の動詞を用いる例を見る。7.5 節では動詞が連続する場合、後部に現れる動詞の形態について、現代パラン方言では現在形を用いるが、荒尾では未来形を用いることを紹介する。7.6 節では、代名詞の現れの違いについて、現代パラン方言では接語を使うが荒尾ではそうになっていないことと、現代パラン方言では命令文において動作主の代名詞を用いないのが一般的だが、荒尾では代名詞が用いられていることがあり、代名詞が用いるかどうかは荒尾が訳出を求めた文における代名詞の有無に依存しているらしいことを述べる。

7.1 非動作主態の形態の違い

荒尾の語彙には、現代パラン方言の文法を基準にした場合、許容されない語形成を示す形式が二例見られた。まず一例目が項目 372 の *makeyan* である。現代パラン方言におけるこの語の語根は *bekay* と言う。動作主態の屈折により語頭の *b* が *m* に置き換えられ、*mekay* という形式に変わる。場所態では接尾辞が付き *bukeyan* となる（語根末の *u* は *e* に変わる）。荒尾の形式に対応すると考えられるのがこの *bukeyan* であるが、荒尾の表記では語頭が *m* である点が異なる。荒尾の表記は、動作主態 *mekay* に場所態の接尾辞 *-an* が付いたような形式を示している。このような形式は現代パラン方言では見られない。」

次に項目 515 の *mesi* であるが、現代パラン方言において *mesa* 「言う、要求する」という動詞がある。この形式を命令形にすると語頭の *m* が *k* に置き換わって *kesi* となる（期待される命令形は *kesa-i* なのだが、このような形式は存在せず、なぜか語根末母音の *a* が脱落する）。荒尾の形式は、この *kesi* の *k* を *m* で取り換えた形式を示している。このような形式は現代パラン方言では見られない。

7.2 命令形の違い

荒尾の語釈から判断して動詞の命令形を用いるべき箇所に、命令形が用いられていないことが多い。表 14 に荒尾が用いた非命令形（太字）とそれに対応する現代パラン方言の形式を挙げる。また、荒尾の語釈をもとに現代パラン方言で表現した場合に用いるべき命令形も併記する。

表 14 荒尾の非命令形と現代パラン方言の命令形

	荒尾	荒尾に対応する現代 パラン方言	現代パラン方言で用いる命令 形
439	mima sčau 「酒ヲ飲メ」	<i>m-imah</i> (AV-drink)	<i>imah</i> (drink.AV.IMP), <i>mah-i</i> (drink-UVF/UVL.IMP)
469	ish mākan nūnoho 「汝乳ヲ飲メ」	<i>m-ekan</i> (AV-eat)	<i>numuh-i</i> (suck-UVF/UVL.IMP)
527	maha sāpa ish pare ^{ga} gau kare 「彼ノ家ニ行テオ話しナサイ」	<i>maha</i> (AV.go)	<i>ha-i</i> (go-UVF/UVL.IMP)
455	marawa hāle 「早く呼べ」	<i>mu-lawā</i> (AV.FUT-call)	<i>luwan-i</i> (call-UVF/UVL.IMP)
526	marawa eda hinni 「コゝへ呼デ来イ」	<i>mu-lawā</i> (AV.FUT-call)	<i>luwan-i</i> (call-UVF/UVL.IMP)
447	āgoa kimita 「来リ見ヨ」	<i>q<um>ita</i> (<AV>see)	<i>quta-i</i> (see-UVF/UVL.IMP)
496	kimita yakko 「吾ニ見セヨ」	<i>q<um>ita</i> (<AV>see)	<i>pu-quta-i</i> (CAUS-see- UVF/UVL.IMP)
497	ish kimita 「汝見ヨ」	<i>q<um>ita</i> (<av>see)	<i>quta-i</i> (see-UVF/UVL.IMP)

これらとは逆に、命令形が期待されない語釈でありながら、荒尾が命令形を用いていることもある。表 15 には、荒尾の用いた命令形とそれに対応する現代パラン方言、そして語釈を現代パラン方言で表現した場合に用いられる非命令形を挙げる。

表 15 荒尾の命令形と現代パラン方言の非命令形

	荒尾	荒尾に対応する現代パ ラン方言	現代パラン方言で用いる 非命令形
427	paane lakki 「子供ヲ負フ」	<i>paan-i</i> (carry.on.back- UVF/UVL.IMP)	<i>m-apa</i> (AV-carry.on.back)
454	egu ekkan 「大食スル」	<i>ekan</i> (AV.IMP.eat)	<i>m-ekan</i> (AV-eat), <i>puq-un</i> (eat-UVF)
477	lipak siārek nakka 「人ヲ殺スハ悪事 ナリ」	<i>sipaq</i> (AV.IMP.destroy)	<i>s<um>ipaq</i> (<AV>destroy)
508	bekki isu 「汝ニ与ヘン」	<i>biq-i</i> (give-UVF/UVL.IMP)	<i>mege</i> (AV.give), <i>biq-un</i> (give-UVF)
513	makaha ussa dāya ish 「明後日汝ノ社 ニ往ク」	<i>usa</i> (AV.IMP.go)	<i>maha</i> (AV.FUT.go)
58	chebu batsunuh 「石ヲ投ゲル」	<i>cebu</i> (AV.IMP.shoot)	<i>c<um>ebu</i> (<AV>shoot)
418	chebu harun 「発砲する」	<i>cebu</i> (AV.IMP.shoot)	<i>c<um>ebu</i> (<AV>shoot)
474	yamu dāya eda hinni pira rābi 「汝等 ノ蕃社カラコゝニ来ルニハ幾日 カゝル乎」	<i>eyah</i> (AV.IMP.come)	<i>m-eyah</i> (AV-come)

512	tsáiman eda hinni 「明日コゝへ来ル」	<i>eyah</i> (AV.IMP.come)	<i>m-eyah</i> (AV-come)
517	eda kinoan 「幾日ニ来ル乎」	<i>eyah</i> (AV.IMP.come)	<i>m-eyah</i> (AV-come)
488	eda kinoan tana tsunuh dāya yamu? 「何時日本人ガ汝等ノ社ニ至リシヤ」	<i>eyah</i> (AV.IMP.come)	<i>m<un>-eyah</i> (AV<PST>-come)

7.3 否定辞後の形式の違い

現代パラン方言において否定辞 *ini* (動詞句否定) と *iya* (禁止) には動詞が後続するが、それらの動詞は特定の屈折形式—否定辞後の形式—でなければならない (陳 1996)。ちなみにこの否定辞後の形式は命令形と同等である³³⁹。しかし、荒尾の語彙集においてこれら否定辞の後部に否定辞後の形式を用いている例は一例しかみられなかった。それが項目 51 の *inni kela* 「不知」であり、動詞 *kela* (現代パラン方言も同一形式) は否定辞後の形式である。これ以外、荒尾の語彙集において否定辞 *ini* と *iya* に後続する動詞は、否定辞後の形式ではない。それら動詞と現代パラン方言において対応する形式、さらに現代パラン方言で表現した場合に用いなければならない否定辞後の形式を表 16 に示す。

表 16 否定辞後の形式の違い

	荒尾	荒尾に対応する現代パ ラン方言	現代パラン方言で用いる 否定辞後の形式
448	kārau iya egu koa* 「黙レ ヤカマシク云 フナ」	<i>egu</i> (STAT.many)	<i>ke-egu</i> (STAT.IMP-many)
478	yamu kana iya pakkun siäre 「汝等人ヲ 殺ス勿レ」	<i>paq-un</i> (destroy-UVP)	<i>paq-i</i> (destroy- UVP/UVL.IMP)
449	<i>inni makan</i> ēdau 「飯ヲ食ハヌ」	<i>m-ekan</i> (AV-eat)	<i>ekan</i> (AV.IMP.eat)
500	<i>inni karaun</i> ish 「汝ハ知ラヌ」	<i>kula-un</i> (know-UVP)	<i>kela</i> (AV.IMP-know), <i>kula- i</i> (know-UVP/UVL.IMP)

7.4 時制の違い

荒尾の語釈から判断して過去形を用いるべき箇所に、現在形を用いている場合がある。それらの動詞と現代パラン方言で対応する形式を表 17 に示す。荒尾の語釈を現代パラン方言で表現した場合に用いられる動詞も併記する。

表 17 荒尾の過去形と現代パラン方言の現在形

荒尾	荒尾に対応する現代 パラン方言	現代パラン方言で用いる 過去形
----	--------------------	--------------------

³³⁹ 但し他動性の低い動詞については命令形と呼ぶのは適切ではないが、ここでは便宜的にこれらも命令形としておく。

424	maikan da 「食シアル」	<i>m-ekan</i> (AV-eat)	<i>m<un>-ekan</i> (AV<PST>-eat)
546	makera mausa ish? 「アナタハ往タコト ガアリスカ」	<i>m-osa</i> (AV-go) ³⁴⁰	<i>m<un>-osa</i> (AV<PST>-go)

逆に、荒尾の語彙から判断して現在形が期待される箇所に、荒尾は過去形を用いている例も見られた。それが項目 429 の *sānu kaneepe* 「男ガ耕ス」で、動詞 *kaneepe* は現代バラン方言の *k<un>eepeh* (<UVP.PST>work.in.field) に対応する。ところが荒尾の語彙では非過去なので、現代バラン方言で表現するならば *k<un>eepeh* (<AV>work.in.field) としなければならない。

7.5 動詞連続における後部動詞の形式の違い

現代バラン方言において「～しに行く」など移動の目的を表す表現において、移動を表す動詞が先、目的を表す動詞が後に続くが、この後部動詞に用いる形式は現在形となる³⁴¹。ところが、荒尾の語彙集では未来形が用いられている。それら後部動詞の例を表 18 に挙げ、対応する現代バラン方言と、現代バラン方言で表現した場合に用いられる現在形を併記する。

表 18 動詞連続における後部動詞の違い

	荒尾	荒尾に対応する現代バ ラン方言	現代バラン方言で用いる 現在形
452	ussa marawa 「行て呼べ」	<i>mu-lawa</i> (AV.FUT-call)	<i>l<um>awa</i> (<AV>call)
485	ussa marawa tel soazi 「往テ三人ノ蕃丁 ヲコゝへ呼デ来イ」	<i>mu-lawa</i> (AV.FUT-call)	<i>l<um>awa</i> (<AV>call)

7.6 代名詞の形態の違い

表 19 に示すように現代バラン方言において代名詞には独立形と接語形があり、接語形は主格と属格の別がある。ただしこの区別は厳密に言えば一人称単数にのみ見られ、三人称単複では主格に欠け属格のみがある。その他は主格・属格同形である。また接語は句または節の第一語の直後に付される。

表 19 現代セデック語バラン方言の人称代名詞

代名詞独立形	接語代名詞主格	接語代名詞属格
--------	---------	---------

³⁴⁰ 荒尾の形式 *mausa* から現代バラン方言の *mosa* に至るまでに、二重母音 *aw* が単母音 *o* に変わる変化が起きた。因みに現代バラン方言の形式には *musa* という自由交替形がある。荒尾の形式における語頭の *ma-* は接頭辞（恐らく静態動詞の接頭辞）と考えられる（語根は *usa*）。ただし、トゥルク方言では *mawsa* は未来形、*musa* が現在形である（月田尚美、私信）。

³⁴¹ ただし、中原集落の 80 歳を超えた高齢者の発話では、後続する動詞に荒尾が用いたのと同じ未来形を用いていた。この高齢者が早期バラン方言の文法を未だ保存しているとするならば、後続する動詞に未来形を用いるのが、あるいは早期セデック語において文法的に正しい言い方だったのかもしれない。

一人称単数	<i>yaku</i>	= <i>ku</i>	= <i>mu</i>
二人称単数	<i>isu</i>	= <i>su</i>	= <i>su</i>
三人称単数	<i>heya</i>	---	= <i>na</i>
一人称複数・排他	<i>yami</i>	= <i>nam</i> i, = <i>miyan</i>	= <i>nam</i> i, = <i>miyan</i>
一人称複数・包括	<i>ita</i>	= <i>ta</i>	= <i>ta</i>
二人称複数	<i>yamu</i>	= <i>namu</i>	= <i>namu</i>
三人称複数	<i>deheya</i>	---	= <i>daha</i>

代名詞が動作主態の主語として現れる場合、現代パラン方言では接語代名詞を用いるのが一般的であるが、荒尾の例文では独立形を用いている。

例えば (217) に再掲した荒尾の例文では、一人称代名詞独立形が文頭に用いられている。これを現代パラン方言で表現した場合 (218) のようになり、一人称接語代名詞・主格が動詞の直後に置かれる³⁴²。

- (217) 荒尾 (項目 506)
- yakko** *mafūlishi*
yaku *muhulis*
「吾レハ喜ブ」(正確には「私は笑う」と言う意味)

- (218) 現代パラン方言
- mu-hulis* =*ku*
STAT-laugh =ISG.NOM
「私は笑う」

被動作主態 (対象態・場所態・状況態) において、動作主が主語ではなく動作の受け手が主語になる。これらの項に代名詞が用いられた場合、現代パラン方言では被動作主が接語代名詞主格、動作主が属格で現れる。ところが、荒尾の語彙集ではどちらもが独立形で現れる。(219) に再掲した荒尾の例文では動作の受け手である二人称単数が独立形 *isu* である。これを現代パラン方言で表現した場合 (220) のようになる。受け手の二人称単数は接語代名詞主格=*su* で、動作主の一人称は接語代名詞属格=*mu* で現れる。

- (219) 荒尾 (項目 508)
- bekki ish**

³⁴² ただし、人称代名詞が述語の位置である文頭に来る場合は独立形でなければならない。このような *yaku ka mu-hulis* (ISG.PRON NOM STAT-laugh) 「笑うのは私だ」となる。この語順は現代セデック語の視点から言う独立形代名詞が述語の位置に移動されたものと見なすこともできる。

biqi isu

「汝ニ与ヘン」

(220) 現代パラン方言³⁴³

biq-un =su =mu

give-UDP =2SG.NOM=1SG.GEN

「私があなたに（何かを）あげる」

荒尾の語彙集におけるその他の被動作主態の構文には、(221a-b) に再掲したように動詞「知る」を使ったものが見られた。どちらも動作主は独立形を用いている。これらを現代パラン方言で表現した場合は (222 a-b) のように接後代名詞を用いる。

(221) 荒尾 (項目 499, 項目 500)

a. *karaun yakko*

kulaun yaku

「吾ハ知ル」

b. *inni karaun ish*

ini kulaun isu

「汝ハ知ラス」

(222) 現代パラン方言

a. *kula-un =mu*

know-UDP=1SG.GEN

「私は（それを）知っている」

b. *ini =su kula-i*

NEG =2SG.GEN know-UDP/UVL.IMP

「あなたは（それを）知らない」

接語代名詞属格はさらに現代パラン方言において所有を表すのにも用いられる。ところが荒尾の語彙集では表 20 に挙げたように人称代名詞を用いた所有構文には独立形が使われている。

表 20 代名詞による所有構文の違い

荒尾	現代パラン方言
----	---------

³⁴³ *biq-un=misu* とも言う。接語代名詞=*misu* は一人称属格と二人称主格の融合形（今では古形）である。

412	yakko sāpa 「私ノ家」	<i>sapah=mu</i>
543	yakko masolan 「私共の酋長」	<i>qubusuran=miyan</i> 「私たち（排他）の酋長」 <i>qubusuran=ta</i> 「私たち（包括）の酋長」
413	isu pukan 「汝ノ煙管」	<i>puqan=su</i>
414	ish kkakaya 「汝ノ者」	<i>quyuqeyɛ=su</i>
442	gāzan ish 「名」（「あなたの名前」を意図した）	<i>ɲayan=su</i>
482	ish sāpa 「汝ノ家」	<i>sapah=su</i>
483	ish mināroho 「汝ノ病氣」	<i>munarux=su</i>
513	dāya ish 「汝ノ社」	<i>alaɲ=su</i>
541	sāpa ish 「オマヘノ家」	<i>sapah=namu</i> 「あなたがたの家」
527	sāpa ish 「彼ノ家」	<i>sapah=na</i>
474	yamu dāya 「汝等ノ蕃社」	<i>alaɲ=namu</i>
488	dāya yamu 「汝等ノ社」	<i>alaɲ=namu</i>

荒尾のデータは 9.1 節の修飾関係を表す名詞句と類似し、独立形で現れる代名詞（所有者）は所有物の前に置かれることもあれば、後ろに置かれることもある。前に置かれる語順は先に述べたように日本語または閩南語の影響を受けたことを示しているのかもしれない。

また、現代パラン方言では命令文（または禁止文）において、強調する場合を除いてあえて二人称代名詞を用いることはないが、荒尾の語彙集では命令文（または禁止文）において独立形の二人称代名詞が現れることがある。しかも、代名詞が現れる項目のほとんどは、表 21 にあるように語釈に「汝」または「汝等」という語が含まれている。一方、「汝，汝等」を明記しない命令文においては表 22 にあるように代名詞が導入されていない。

表 21 荒尾が代名詞を導入する命令文

	荒尾	語釈
469	ish mākan nūnoho	「汝乳ヲ飲メ」
478	yamu kana iya pakkun siārek	「汝等人ヲ殺ス勿レ」
487	hinni eru ish taiyak yakko	「此道ヲ案内セヨ」
497	ish kimita	「汝見ヨ」
502	ish tareon	「汝坐セヨ」
532	ish kārau	「汝等静ニセヨ」

表 22 荒尾が代名詞を導入しない命令文

	荒尾	語釈
5	agoa hāle	「早く，早く来レ」
12	kālau	「静ニセヨ，黙レ」

43	ädasi	「持テ来イ」
89	agoa	「来イ, 来ル, 来タ」
426	simaro punniak	「火ヲツクロヘ」
440	pausa punniak	「アカリヲツケヨ」
446	ägoa pare ^a gau käle	「来リ話セ」
447	ägoa kimita	「来リ見ヨ」
448	kārau iya egu koa ^k	「黙レ ヤカマシク云フナ」
452	ussa marawa	「行テ呼ベ」
456	egu baebu	「強ク打テ」
485	ussa marawa tel soazi	「往テ三人ノ蕃丁ヲコゝヘ呼デ来イ」
496	kimita yakko	「吾ニ見セヨ」
498	taeta yakko	「吾ニ貸セ」
509	bekki yakko	「吾レニ與ヘヨ」
510	eda hinni	「コゝニ来レ」
516	ussa hish	「アソコへ行ケ」
526	marawa eda hinni	「コゝヘ呼デ来イ」
542	pagesa yakko matēroho sia	「私ニ湯ヲ下サイ」

代名詞が現れる項目のほとんどは、表 21 にあるように語釈に「汝」または「汝等」という語が含まれている。一方、「汝、汝等」を荒尾が明記しない命令文においては表 22 にあるように代名詞が導入されていない。荒尾が「汝、汝等」を入れて聞いたかどうかで調査協力者が訳しわけたということだろう。

8. 意味的考察

本節は、荒尾の語彙集と現代パラン方言との間に見られた語彙的な違いを考察する。8.1 節は二人称と三人称代名詞、8.2 節では疑問詞「いつ」、8.3 節では否定辞、8.4 節では指示詞、8.5 節では *egu* 「多い」の使い方、8.6 節では *kucun* 「好む」の使い方について議論する。

8.1 二人称と三人称の用法の違い

荒尾の語彙集には二人称と三人称が同等に扱われている項目が見られる。二人称代名詞は項目 91 に *ish* 「オマヘ、オマヘ等」が挙げられており、現代パラン方言の二人称単数代名詞 *isu* に相当する。これは例えば項目 539 *kufun maanu ish* 「アナタハ何ヲオ望ミデス」において、二人称単数として用いられている。ところが、この代名詞が三人称として用いられる例もある。それらを表 23 に挙げる。これらは現代パラン方言では三人称単数代名詞 *heya* で表されるものである。

表 23 荒尾が *isu* を三人称として用いる例

	荒尾	語釈
484	kinoan ish mahokin	「彼ハ何時死セシ乎」
504	ish gāga	「彼レハ有ル」
524	ish maseyan	「彼ハ怒テ居ル」
527	maha sāpa ish pare ^a gau kare	「彼ノ家二行テオ話シナサイ」
531	ish ma ^a gēlisi	「彼ハ悲ミマス」
536	ish mināroho	「彼ハ病氣デス」
537	ish mahukin	「彼ハ死ニマシタ」
538	ish mināroho maro	「彼ハ快キ方デス」

8.2 疑問詞「いつ」の用法の違い

現代パラン方言において疑問詞「いつ」は過去を表す形式と非過去の形式とがあり、それぞれ *sukunwan* 「(過去の) いつ」と *kunwan* 「(過去ではない) いつ」と言う。1920 年代のセデック語資料である小川 (1939: 11, 14) にも *sūnoan* 「何時 (過去)」, *kūnoan* 「何時 (未来)」という形式が挙げられおり、荒尾の項目にみられる 467 *sinoan* と 484 *kinoan* に相当する。現代パラン方言では、過去の「何時」は *sukunwan* であり、荒尾 (と小川) の表記では *ku* にあたる部分が見られないという違いがある。荒尾の調査時にも「何時」の時制の使い分けがあったと考えられる。しかし、例えば (223 a–b) のように荒尾の例文では非過去の *kinoan* を用いていながら過去のことを聞いている。あるいは (224 a–b) のように非過去のことを聞いているのに *sinoan* を使っている。

- (223) 荒尾 (項目 484, 項目 488)
- a. **kinoan** ish mahokin
kunwan isu muhuqin
「彼ハ何時死セシ乎」
- b. eda **kinoan** tana tsunuh dāya yamu?
eyah *kunwan tanah tunux daya yamu*
「何時日本人ガ汝等ノ社ニ至リシヤ」
- (224) 荒尾 (項目 467, 項目 511)
- a. **sinoan** maro goagi
sukunwan malu gagi
「何時好キ天気ニナラフ乎」
- b. ish eda **sinoan**?
isu eyah *sukunwan*

「汝ハ何時来ル乎」

これら荒尾の意味を現代パラン方言で表現するならば、過去の事柄を表す (223) で用いる疑問詞は *kumowan* ではなくて *sukumowan* であり、非過去の事柄を表す (224) で用いる疑問詞は *sukumowan* ではなくて *kumowan* としなければならない。

8.3 否定辞の用法の違い

現代パラン方言には、動詞の否定を表す語として *ini* (7.3 節参照)、存在の否定を表す語として *uka* がある (陳 1996)。例えば「雨が降る」を否定した場合に用いられる否定辞は *ini* である。ところが (225) に再掲したように、荒尾の語彙集では動詞の否定を表す語として *uka* を用いている例が見られる。これを現代パラン方言で表すと (226) のようになり、否定辞 *ini* を用いる。

- (225) 荒尾 (項目 471)
- | | | |
|------|------|----------|
| sāda | okka | kumꞰzoho |
| saya | uka | qumꞰꞰux |
- 「今日ハ雨ハ降ラス」

- (226) 現代パラン方言
- | | | |
|------------|-----------------|-------------|
| <i>ini</i> | <i>qꞰꞰux</i> | <i>saya</i> |
| NEG | AV.IMP.it.rains | today |
- 「今日は雨が降らない」

8.4 指示詞の用法の違い

現代パラン方言では場所を表す指示詞 *hini* 「ここ」と *hiya* 「あそこ」があり、ものを指す指示詞 *ni* 「これ/この」と *gaga* (または *ga*) 「あれ/あの」がある。ところが荒尾の語彙集ではこれらの区別は見られず、表 24 に見られるように「これ/この」「あれ/あの」を表す場合にも *hini* (近称) を用いている。例えば「これ」を用いた例文が項目 514 に *hinni maanu*? 「コレハ何カ」、項目 515 に *hinni mesi sari* 「コレハ芋デス」として現れる。これらを現代パラン方言で言い換えるとそれぞれ *maanuni*? 「これは何」、*sari ni* 「これはタロ芋」となる。語順も異なる。

同様に「この」という名詞を修飾する用法でも荒尾は *hini* を用いる。「あの」を表すとして荒尾が用いたのが *hisu* という現代ではほぼ用いられなくなった指示詞である。これらの例を表 24 に示す。

表 24 荒尾が用いる名詞修飾用法の指示詞

	荒尾	現代パラン方言
479	hinni yayun 「此川」	yayun ni
487	hinni eru 「此道」	elu ni

489	hinni masoran 「コゝノ大人達」	qubusuran ni
543	hinni āran 「此蕃人」	alaŋ ni
480	hish babuyan 「アノ山」	bubuyu ga
481	hish dāya 「アノ蕃社」	alaŋ ga

名詞を修飾するこれらの指示詞は現代パラン方言では名詞の後に置かれるのだが、荒尾の例では全て前に置かれている点も異なる。この語順は、調査協力者の母語である閩南語の影響を感じさせる。

次に現代パラン方言では遠称の指示詞として用いられる *gaga* であるが、(227 a-b) に挙げたようにこの語は直後に場所を表す語、例えば *hini* 「ここ」などを置くことで、存在を表す用法がある。以下 (227 c) のように場所を表す語が無い場合は非文となる。

(227) 現代パラン方言において存在を表す *gaga*

a. *gaga hini huliŋ*
 EXIST here dog
 「犬はここにいる」

b. *gaga daya huliŋ*
 EXIST up dog
 「犬は上の方にいる」

c. **gaga huliŋ*
 EXIST dog
 「犬がいる」

ところが、荒尾は *gäga* に「有る」(項目 88) という語釈を与え、物の存在を表す動詞と見なしている。そして表 25 にあるように *gäga* の後に場所表現を伴わずに現れる。語順について言えば、ほとんど名詞句の前に *gäga* を置いているが項目 504 では後に置いている点で、語順の一貫性に欠ける。

表 25 荒尾が *gaga* を存在動詞として用いる例

荒尾	語釈
211 gäga ush chinemu	「有袖衣」
416 gäga bāgaha	「米ガアル」
428 gäga tsuruŋ nākan sia	「魚ハ水ヲ泳グ」
468 raudoho laki gäga linma	「雞ノ卵ガ五ツアル」
504 ish gäga	「彼レハ有ル」

さらに *gaga* に関して、荒尾の語彙集において経験を表す用法が一例見られた。このような用法は現代パラン方言の *gaga* には見られない。それが項目 406 の *gāga magaeda hinni?* 「コゝへ来タコトガアルカ」であり、*gāga* を除いた部分 *magaeda hini* は動詞句を成す。現代パラン方言に置き換えると *mugeela hini* 「ここまで先導して来る」となる。注目すべき点は、荒尾が *gāga* の上方に「有」という注釈を付けていることであり、このような構文を持つ閩南語に影響を受けたことを示唆している。

8.5 egu の用法の違い

現代パラン方言において *egu* は「物が多い」ことを表す語である。荒尾の語彙集にも項目 22 に *egu* 「澤山」が見られるが、それ以外の用法でも使われており、表 26 にあるように程度の大きさを表していると考えられる項目が三つ見られた。これらは現代パラン方言ではそれぞれ別の語で表現される。

表 26 荒尾が *egu* で程度の大きさを表す例

	荒尾	現代パラン方言
7	<i>egu paru</i> 「ヨリ大」	<i>rumaban paru</i> (more STAT.big)
456	<i>egu bacbu</i> 「強く打テ」	<i>hunek-i beebu</i> (do.strongly-UVP/UVL.IMP AV.hit)
457	<i>egu mafūlisi</i> 「大ニ笑フ」	<i>mu-hulis paru</i> (STAT-laugh STAT.big)

8.6 kuxun の用法の違い

現代パラン方言において *kuxun* (like.UVP) は「物や人を好む」という意味の語である。これが荒尾の語彙集においては、表 27 にあるように願望や要求を表す語として用いられている。これら荒尾の *kufun* は現代パラン方言では *muku* で表現される。この語は単独で現れることはなく、動詞を必要とする(統語的振る舞いとしては接頭辞のようでもあるし、接語のようでもある)。

表 27 荒尾が *kuxun* で願望を表す例

	荒尾	現代パラン方言
495	<i>yakko kufun kumite</i> 「吾レハ見タシ」	<i>muku=ku q<um>ita</i> (DES=1SG.NOM <AV>see)
507	<i>kakko kufun eda</i> 「吾レハ来ラン」	<i>muku=ku m-eyah</i> (DES=1SG.NOM AV-come)
503	<i>kufun matake yakko</i> 「吾ハ子ムイ」	<i>muku=ku mu-taqi</i> (DES=1SG.NOM AV-sleep)
534	<i>yakko kufun matake</i> 「私ハ眠クナリマシタ」	<i>muku=ku mu-taqi</i> (DES=1SG.NOM AV-sleep)
535	<i>yakko kufun kasia</i> 「私ハ水ガ欲シイ」	<i>muku=ku m-imah qusiya</i> (DES=1SG.NOM AV-drink water)

これら *kuxun* の使い方をみると、閩南語において動詞に先行し、願望を表す語である *be?* 「～したい」または *ai* 「～することを願う」(Chappell 2018: 23) の意味するところに相当する語の代用として、*kuxun* が用いられている印象を受ける。

9. 統語的考察

本節では、荒尾の語彙集と現代パラン方言の間に見られる統語的違いについて考察する。9.1 節は修飾語と被修飾語との語順、9.2 節は主語の語順、9.3 節は疑問詞の語順、9.4 節は時を表す表現の語順、9.5 節は数詞・数量詞の語順について議論する。

9.1 修飾関係の語順の違い

荒尾の語彙集に顕著に見られた現代パラン方言との文法の違いのひとつは、修飾関係にある二つの要素の語順である。現代パラン方言では被修飾語（名詞）が先、修飾語（名詞・名詞句、動詞・動詞句など）が後に来る。この二つの語順を入れ替えることはできない。荒尾の語彙集にはこの語順も見られるのだが、修飾語が前・被修飾語が後という逆の語順も多く見られた。まず、荒尾の語彙集に見られる被修飾語が先の語順を表 28 に示す。さらに本稿筆者が荒尾の語に対する注釈を括弧内に加える。

表 28 荒尾の語彙集で被修飾語が先に来る例

荒尾	語釈
154 sāpa pādai (house rice.plant)	「穀小屋」
188 sāpa walu (house bee)	「蜂ノ巢」
249 sāpa bahānni (house bird)	「鳥ノ巢」
166 yayun funna (river downhill)	「川口」
250 pāpak raudoho (foot chicken)	「雞足」
251 tama raudoho (father chicken)	「雄雞」
282 maina dakaidisi (skin leopard)	「豹皮」
308 mināroho daudeak (sickness eye)	「目病」
378 hakauduf (ladder god)	「虹」
155 sāpa habārau (house high)	「屋根」
169 mabuyan habārau (mountain high)	「山頂」
275 lappa tana (cow red)	「赤牛」
459 tsuruf chēkoaha (fish small)	「小キ魚」

次に修飾語が先の語順の例を表 29 に示す。

表 29 荒尾の語彙集で被修飾語が後に来る例

荒尾	語釈
142 tamako rūbui (tobacco pocket)	「煙草入レ」
151 raudoho sāpa (chicken house)	「雞小屋」
152 bābui sāpa (pig house)	「豚小屋」

153	lappa säpa (cow house)	「牛小屋」
193	raudoho bārun (chicken egg)	「鶏卵」
468	raudoho laki (chicken child)	「鶏ノ卵」
201	barebu ēdau (morning rice)	「朝飯」
202	arian ēdau (day rice)	「晝飯」
203	kaaman ēdau (night rice)	「晩飯」
216	būkui para (back cloth)	「蓆衣」
247	funni maina (wood skin)	「樹皮」
252	bahānni koak (bird mouth)	「嘴」
265	tsūruh lakki (fish child)	「魚ノ子」
272	lappa lakki (cow child)	「子牛」
273	lappa tama (cow father)	「牡牛」
274	lappa būbu (cow mother)	「牝牛」
337	mūhin bailin (nose hole)	「鼻孔」
361	putun rūbui (match pocket)	「燧石ナドノ入レ物」
391	kakannoho bāgaha (deer testicles)	「鹿ノ睾丸」
444	batakan sūdu (bamboo grass)	「竹ノ葉」
445	batakan banni (bamboo bone)	「竹ノ枝」
171	paru sia (big water)	「洪水」
226	paru batsūnuh (big stone)	「大石」
460	paru bahenni (big bird)	「大ナル鳥」
461	tanna paheppa (red flower)	「赤キ花」
462	labu kanchia (white sugarcane) ³⁴⁴	「白キ砂糖」
470	matēroho sia (hot water)	「湯」
307	matēroho mināroho (hot sickness)	「熱病」
466	labu bāgaha (white rice) ³⁴⁵	「白キ米」
302	mahūkishi siārek (dead person)	「死人」
435	tsūrin sēdan (bum meat)	「焼キタル肉」
465	sinaui bāgaha (wash rice)	「洗ヒタル米」
211	gāga ush chinemu (have sleeve clothes)	「有袖衣」
212	okka ush chinemu (no sleeve clothes)	「筒袖衣」

これらの表を見ると、荒尾の調査時代には修飾部が被修飾部の後に来る語順（表28）と前に来る語順

³⁴⁴ アタヤル語の形式（6.2 節参照）。

³⁴⁵ トウルク方言の形式（6.1 節参照）。

(表 29) の両方が用いられていたような印象を受ける。例えば修飾部としての「家」は表 28 では前に来ているのに対し (項目 154, 188, 249), 表 29 では後に来ている (項目 151, 152, 153)。ただし現代パラン方言において修飾部が被修飾部の後ろに来る語順がゆるぎないことを鑑みれば、修飾関係の語順が自由だったとは考えにくい。修飾部が前に来る語順は、もしかしたら調査協力者の母語である閩南語の影響を受けたためかもしれない。また、修飾部が前にも後ろにもくる語順が許されるアタル語の文法 (黄・呉 2018: 50-51) の影響を受けたためかもしれない。

9.2 主語の語順の違い

現代パラン方言では述語が文頭、主語が文末に来る語順が基本であるが、荒尾の語彙集ではこの語順もみられるが、多くの場合逆の語順で現れ、主語が文頭、述語が文末の置かれる (ただし荒尾の例文はほとんどが動作主態である)。表 30 に現代パラン方言と同様、主語 (太字) が述語の後に来る語順の例を示す。

表 30 荒尾が主語を後に置く例

	荒尾	語釈
191	wada bahānni	「鳥ガ飛ブ」
415	wada kannoho	「鹿ガ走ル」
488	eda kinoan tana tsūnuh dāya yamu	「何時日本人ガ汝等ノ社ニ至リシヤ」
313	okka pāpak	「足ナシ」
318	okka daudeak	「盲目」
417	okka sēnau	「酒無シ」
416	gāga bāgaha	「米ガ有ル」
301	mināroho rafoashi	「腹痛」
303	mināroho būkui	「胸痛」
312	mināroho tsūnuh	「頭痛」
315	egu hazi	「肥ヘル」
501	ma ^g ēlisi yakko	「吾ハ泣ク」
503	kufun matake yakko	「吾ハ子ムイ」
518	maha inu ish	「汝ハ何處ヘ行ク乎」
527	maha sāpah ish pare ^g gau kare	「彼ノ家ニ行テオ話シナサイ」
539	kufun maanu ish	「アナタハ何ヲオ望ミデス」
540	āran ima ish	「汝ハ何社ノ者乎」
546	makera mausa ish?	「アナタハ往タコトガアリスカ」

次に、荒尾の語彙集において主語が述語の前に来る語順を表 31 に示す。

表 31 荒尾が主語を前に置く例

荒尾	語釈
311 ripun mināroho	「歯痛」
429 sānau kaneepea	「男ガ耕ス」
430 makairin maro	「女ガ縫フ」
432 mināroho maro	「病癒ユ」
432 niau mākan ōrisi	「猫が鼠ヲ咬ム」
434 siārek lēpak fūlin	「人ガ犬ヲ殺ス」
464 mabūan habārau	「山高シ」
468 raudoho laki gāga linma	「雞ノ卵ガ五ツアル」
489 hinni masoran kana kufun yamu	「コヽノ大人等ハ皆汝等ヲ愛ス」
515 hinni messi sari	「コレハ芋デス」
521 hish maro	「ソレハヨイ」
522 hinni nakka	「コレハ悪レイ」
543 hinni āran yakko masolan	「此蕃人ハ私共ノ酋長デス」
544 tana tsūnuh āran yamu matena dange	「日本人モ生蕃人モ共ニ朋友ナリ」
476 ken ^a gan lābi matake hinni maro ³⁴⁶	「今晚一晚コヽニ泊ルガヨロシイ」
477 lipak siārek nakka	「人ヲ殺スハ悪事ナリ」
453 yakko nānak kaneepea	「自分ニスル」
470 yakko mima matēroho sia	「吾ハ湯ヲ飲ム」
495 yakko kufun kumita	「吾レハ見タシ」
506 yakko mafūlishi	「吾レハ喜ブ」
507 yakko kufun eda	「吾レハ来ラン」
533 yakko maolai	「私ハ腹ガヘリマシタ」
534 yakko kufun matake	「私ハ眠クナリマシタ」
535 yakko kufun kasia	「私ハ水ガ欲シイ」
483 ish mināroho maro?	「汝ノ病氣ハ快キ乎」
511 ish eda sinoan?	「汝ハ何時来ル乎」
484 kinoan ish mahokin	「彼ハ何時死セン乎」
504 ish gāga	「彼レハ有ル」
524 ish maseyan	「彼ハ怒テ居ル」
531 ish ma ^a gēlisi	「彼ハ悲シミマス」
537 ish mahukin	「彼ハ死ニマシタ」

³⁴⁶ 項目 476 と項目 477 については、それぞれ「ここに泊まること」、「ここで寝ること」という動名詞句が主語となっている。

536	ish minaröho	「彼ハ病気デス」
538	ish minäroho maro	「彼ハ快キ方デス」

例えば表 30 では *ma'gërisi yakko* 「吾ハ泣く」であるのに対し、表 31 では *ish ma'gëlisi* 「彼ハ悲ミマス」となっている。同一の動詞を用いているが前者では一人称単数主語が動詞の後、後者では三人称単数主語が動詞の前に用いられている。現代パラン方言とは逆の語順である、表 31 にみられるような主語が文頭に来る語順は、荒尾の調査協力者が母語の閩南語の語順の影響を受けたものではないだろうか。

9.3 疑問詞の語順の違い

現代パラン方言において疑問詞 *ima* 「誰」、*maanu/manu* 「何」、*piya* 「いくつ」などは述語の位置である文頭に置かれる傾向が強い。例えば、*ima heya* (who 3SG.PRON) 「あれは誰か」、*maanu ni* (what this) 「これは何か」、*piya babuy* (how many pig) 「豚何匹」という表現をする。ところが荒尾の語彙集では、表 32 に示すように *maanu* や *piya* が文頭ではない位置に現れる。これらも媒介言語である閩南語の語順に影響を受けた可能性が否定できない。

表 32 荒尾が疑問詞を文頭以外に置く例

荒尾	語釈
479 hinni yayun pare ^a gau maanu ?	「此ノ川ノ名ハ何ト言フ乎」
480 hish babuyan pare ^a gau maanu ?	「アノ山ノ名ハ何ト言フ乎」
481 hish dāya pare ^a gau maanu ?	「アノ蕃社ノ名ハ何ト言フ乎」
514 hinni maanu ?	「コレハ何カ」
539 kufun maanu ish	「アナタハ何ヲオ望ミデス」
474 yamu dāya eda hinni pira räbi	「汝等ノ蕃社カラコヽニ来ルニハ幾日カヽル乎」

9.4 時を表す表現の語順の違い

現代パラン方言において時を表す表現は文末に置かれるのが一般的な語順である。例えば、*q<um>uyux səya* (<av>it rains today) 「今日は雨が降る。」などと言う。ところが荒尾の例文では、表 33 に示すように時を表す表現 (太字で表示) が文頭に置かれている。これらも閩南語の影響を窺わせる。

表 33 荒尾が時を表す表現を文頭に置く例

荒尾	語釈
471 sāda okka kumꞰzoho	「今日ハ雨ハ降ラス」
475 ken^agān läbi eda hnni	「一晚寝テ来ル」
482 kaaman matake ish sāpa	「今夜汝ノ家ニ泊ラン」

512	tsāman eda hinni	「明日コゝへ来ル」
513	makaha ussa dāya ish	「明後日汝ノ社ニ往ク」
519	sāda matēroho	「今日ハ暑イ」
520	sāda masekui	「今日ハ寒イ」
528	sāda maro goagi	「今日ハ好天気デス」
529	sāda nakka goagi	「今日ハ悪ヒ天気デス」

9.5 数詞・数量詞の語順の違い

現代パラン方言において数詞が名詞とともに用いられ、名詞の数量を表示する場合、この数詞は名詞の前に置かれる。名詞を修飾する要素は名詞主要部の後ろに置かれるのが基本であるが、数詞はこの例外である。例えば「卵五つ」という名詞句は *rima baluŋ* と言う。

ところが (228) に挙げたように荒尾が類似の意味を現そうとした例文では数詞が名詞主要部から分離して現れる。荒尾の表記は一行目に示し、それぞれの語ごとに現代パラン方言に置き換えたものを二行目に示す（この二行目の表現全体としては、現代パラン方言では非文である）。この例文において「鶏卵」を表す部分である *raudoho laki* が誤りであることは 6.7 節で述べた。

- (228) 荒尾（項目 468）
- | | | | |
|----------------|-------------|-------------|--------------|
| <i>raudoho</i> | <i>laki</i> | <i>gāga</i> | <i>limma</i> |
| <i>rodux</i> | <i>laqi</i> | <i>gaga</i> | <i>rima</i> |
- 「雞ノ卵ガ五ツアル」

「鶏卵が五つある」を現代パラン方言に置き換えるならば、(229) のようになる。まず存在を表す語として *niq-an* 「ある」という動詞を用いている点が違う（荒尾は *gāga* を用いているがこれについては 8.4 節参照）。そして、現代パラン方言では数詞は修飾される名詞の前に置かれる。

- (229) 現代パラン方言
- | | | |
|-----------------|-------------|--------------|
| <i>niq-an</i> | <i>rima</i> | <i>baluŋ</i> |
| <i>stay-UVL</i> | <i>five</i> | <i>egg</i> |
- 「鶏卵が五つある」

数量詞 *kana* 「両方、全て」も数詞同様、現代パラン方言では名詞主要部の前に現れる。たとえば「全ての長老」は *kana qubusuran* (all elder) と言う。これに、指示詞を加え「これら全ての長老」という場合は *kana qubusuran nii* (all elder this) となる。ところが (230) に挙げたように、荒尾の例文において、*kana* が名詞句主要部の前に現れていない。ここでは *hinni masoran kana* 「コゝノ大人等」を主語としたかったと考えられる。しかし、二行目に示したようにこの表現をそのまま現代パラン方言に置き換えると非文である。

(230) 荒尾 (項目 489)

hinni	masoran	kana	kufun	yamu
hini	qubusuran	kana	kaxun	yamu

「コゝノ大人等ハ皆汝等ヲ愛ス」

現代パラン方言において、「これらの長老たちは皆君たちを好いている」を表すには、(231)に挙げたように指示詞 *hini* を名詞主要部の後、数量詞 *kana* を名詞主要部の前に置かなければならない。

(231) 現代パラン方言

<i>s<um>ukaxun</i>	<i>yamu</i>	<i>kana</i>	<i>qubusuran</i>	<i>ni</i>
<AV>like	2PL.PRON	all	elder	this

「これらの長老たちは皆君たちを好いている」

(231)において文末の *ni* 「これ、この」を、荒尾が用いている指示詞 *hini* 「ここ」に置き換えることも可能だが、次節に述べるように *ni* を用いた表現の方が一般的である。

ここまで6節から9節まで、荒尾の語彙集と現代セデック語パラン方言の間に見られる違いについて、語彙的、形態的、意味的、統語的に考察した。何れの文法的側面においても、荒尾の調査協力者がセデック語の母語話者ではなかったことが窺えた。セデック語の習得が不完全であったことは、荒尾の端書に、調査協力者は9歳の時に三か月程度セデック集落に住んでいたときにセデック語を習得したと説明があるように、セデック語との接触は一時的のものであったことにも裏付けられている。調査協力者は平埔族であったと、荒尾が説明しているが、語彙集には少数のパゼツヘ語が混じっていたことから、彼が平埔族の中でもパゼツヘ族に属していたこともわかった。

荒尾の調査協力者が第二言語として習得したセデック語は、彼の母語であった閩南語の影響と考えられる特徴が多々見られる。この特徴は、語彙から統語へと文法的に複雑さが増していくに従って顕著になる。さらに、浅井 (1954: 15) が日本時代に主に警察官などによって収集された台湾先住民族の語彙集について述べた意見も参考になる。浅井によると『警察官に蕃通なる一群があつて、本務の外講習会の講師をしたり、「語集」類の編輯を命ぜられたりした... 優秀な語学者もあつたが、中には蕃人よりも出来ると自負する蕃通も現れて来た。警察で講習する蕃語は Basic 蕃語、悪く言えば Pigeon 蕃語であつた。警察官に云うときはこう云うが、我々同志ではこう云うのだと説明する informants がある位である。』ということである。

荒尾の記録したセデック語は、セデック語を第二言語とする調査協力者の文法の習得の不完全さを示すものかもしれない。その一方で、調査協力者が荒尾と意思疎通を行う過程で、文法的な簡易化が図られたピジン語的セデック語だったのかもしれない。

10. 『臺灣蕃語蒐録』の「23a (荒井)」と『埔里社撫墾署管轄北番語集』

本節は『臺灣蕃語蒐録』(小川 2006) に引用されている文献のうち、セデック語の資料として挙げられている「23a (荒井)」の語彙が、荒尾 (1898) と一致することを示す。また、小川はこの資料を収録する際に、修正を加えている箇所もある。小川が「23a (荒井)」, すなわち荒尾 (1898) を引用する際に加えた修正についても議論する。

まずは小川 (2006) について簡潔に説明する。小川は台湾オーストロネシア諸語研究の第一人者であり、1928 年から 1936 年まで台北帝国大学を拠点に研究に従事した。小川 (2006) は、台湾オーストロネシア諸語に関する先行研究や小川自身の調査に基づき、21 言語 (アタヤル語、セデック語、サオ語、ブヌン語、ツォウ語、サアロア語、カナカナブ語、ルカイ語、パイワン語、ブユマ語、アミ語、カバラン語、バサイ語/ケタガラン語、サイシヤット語、タオカス語、パポラ語、バプザ語、パゼッヘ語、ホアニア語、シラヤ語、ヤミ語) のそれぞれを方言・調査地ごとにまとめた語彙対照表である。小川によってまとめられたこの資料 (手稿) は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に資料番号 OA101 として所蔵されている (三尾・豊島 2005)³⁴⁷。その後李壬癸らが編集し、『臺灣蕃語蒐録』(小川 2006) として出版に至った。本書においてセデック語のデータは 26 件の文献から収集されている。小川は出典の詳細を記していなかったようだが「19 伊能」, 「24b 森」などと番号の後に氏名が併記されているらしい。表 34 の左に、小川 (2006) に挙げられた、セデック語資料のメタデータを示した。表右に示すのは筆者による方言分類と出典の補足である。ただ、落合 (2016b) によるとこれら文献中、アタヤル語のものがふたつ紛れ込んでいる。資料 19 (眉蕃) と 26 (Shabogala) はセデック語ではなくアタヤル語のデータである。

表 34 『臺灣蕃語蒐録』におけるセデック語の出典補足並びに修正

	小川 (2006)		補足・修正	
19	眉蕃	伊能	Squliq Atayal	伊能 (1998) ³⁴⁸
20	卓卡	伊能	Tawda Seediq	伊能 (1998)
21	Buhwan	Bullock	Paran Seediq	Bullock (1874)
22	霧社	伊能	Paran Seediq	伊能 (1998)
23a	霧社	荒井	Paran Seediq	荒尾 (1898)
23b	頂バーラン	杉山	Paran Seediq	杉山文悟 ?
23c	頂バーラン	小川	Paran Seediq	OA237, OA236
23d	霧社	調査会	Paran Seediq	佐山 (1917)
23e	霧社 (北蕃語)	飯島	Paran Seediq	飯島幹太郎 ?
24a	太魯閣	原	Truku Seediq	原世外 ?
24b	太魯閣	石田	Truku Seediq	石田貢 ?

³⁴⁷ 表 34 において OA から始まる資料は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所所蔵のものである。

³⁴⁸ 伊能嘉矩の実際の調査は 1897 年に行われた。

24c.1	太魯閣	森 (丑之助)	Truku Seediq	森 (1910a)
24c.2	太魯閣	小川	Truku Seediq	OA219, OA220
24c.3	太魯閣	丸井 1914	Truku Seediq	丸井 (1914)
24d.1	トルコ	森 (丑之助)	Truku Seediq	森 (1910b)
24d.2	トロク	丸井 1914	Truku Seediq	丸井 (1914)
24d.3	トロツク (北蕃語)	飯島	Truku Seediq	飯島幹太郎 ?
24e	タウダー	調査会	Tawda Seediq	佐山 (1917)
24f	トロツク	調査会	Truku Seediq	佐山 (1917)
24g	内タロコ	調査会	Truku Seediq	佐山 (1917)
24h	外タロコ	調査会	Truku Seediq	佐山 (1917)
24i	タウサイ	調査会	Tawda Seediq	佐山 (1917)
24j	バトラン	調査会	Truku Seediq	佐山 (1917)
25a	木瓜	田代	Paran Seediq	田代安定 ?
25b	木瓜	調査会	Paran Seediq	佐山 (1917)
26	Shabogala	Guérin 1868	C'uli' Atayal	Guérin (1868)

本稿が注目するのは「荒井」によって霧社で記録された資料 23a である。筆者の所見ではこの資料からのデータは「荒尾」による『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』のデータと一致する。どういう経緯かわからないが「荒尾」を誤って「荒井」と記してしまったのだろう。以下、この『臺灣蕃語蒐録』の資料「23a (荒井)」と荒尾 (1898) の二つが同一であることを示す。

10.1 小川と荒尾の対照表

『臺灣蕃語蒐録』の項目数は 294 語であるが、小川が資料「23a (荒尾)」から引用した語彙は 214 語あった。表 35 に示すのは 23a の項目とそれに対応する荒尾 (1898) の項目である。表右は 23a のデータである。これらに付された通し番号は小川 (2006) による。表左は荒尾 (1898) からのデータを本稿中の通し番号とともに示す。

表 35 『臺灣蕃語蒐録』の「23a (荒井)」と『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』の対照表

『臺灣蕃語蒐録』から「23a (荒井)」		『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』	
2. 髪 'hair'	sinunox	305. 頭髮	sinunoho
3. 頭 'head'	tunux	334. 頭	tsynuh
4. 額 'forehead'	kaduruk	336. 額	kaduruk
5. 顔 'face'	dehean	335. 顔	dahean
6. 眉 'eyebrow'	medin	332. 眉	mēdin
7. 目 'eye'	daodeak	318. 目	daudeak
8. 耳 'ear'	berashi	330. 耳	bēraši

9. 頬 ‘cheek’	dakairashi	368. 頬	dakairashi
10. 髯 ‘beard’	ⁿgudus	369. 髯	ⁿgudus
12. 口 ‘mouth’	koak	333. 口	koak
13. 唇 ‘lips’	pudahau	371. 唇	pudahau
14. 舌 ‘tongue’	haenma	367. 舌	haeⁿma
15. 齒 ‘teeth’	ripun, howa (ハグキ)	331. 齒	ripun
		309. 齒グキ	howā
23. 胸 ‘chest’	bukui	329. 胸	būkui
24. 乳房 ‘breast’	nunox	324. 乳汁, 乳房	nūnoho
26. 腹 ‘belly’	raboasi	328. 腹	raboashi
27. 背 ‘back’	bukui ムネ	329. 胸	būkui
30. 足 ‘foot’	papak	325. 足	pāpak
31. 血 ‘blood’	tanna	26. 赤イ, 血	tanna
32. 人 ‘man’	siarek (別人)	288. 他人	siārek
33. 祖 ‘ancestor’	bakki	370. 祖孝, 祖父	bakki
35. 祖母 ‘grandmother’	pai	390. 祖母	pai
36. 男 ‘male’	senau, lesau 男兒蕃人	285. 夫, 男	sānau
		292. 男兒, 蕃丁	lēsau
37. 女 ‘female’	makairin	284. 妻, 婦人	makairin
38. 夫 ‘husband’	senau, ama (ムコ)	285. 夫, 男	sānau
		286. 婿	ama
39. 妻 ‘wife’	makairin, inna (新婦)	284. 妻, 婦人	makairin
		287. 花嫁	innā
41. 父 ‘father’	tama, masolai (叔)	297. 父	tama
		283. 叔父	masolai
42. 母 ‘mother’	bubu	296. 母	būbu
43. 子供 (男子) ‘boy’	lakki, lesau (男子, 蕃丁)	293. 少兒	lakki
		292. 男兒, 蕃丁	lēsau
45. 女子 (女兒) ‘girl’	waewa	291. 女兒	waewa
46. 名 ‘name’	gazan	410. 名	gāzan
48. 兄 (姉) ‘elder brother (sister)’	masolan	295. 姉, 兄, 酋長	masolan
49. 弟 (妹) ‘younger brother (sister)’	soazi	294. 妹, 弟	soazi
51. 老人 ‘old man’	daudan	290. 老人	daudan

52. 頭人, 頭目 ‘chief’	masolan	295. 姉, 兄, 酋長	masolan
53. 朋友 ‘friend’	da ^o ge	105. 朋友	dan ^o gā
54. 番社 (庄) ‘village’	daya	167. 蕃社	daya
55. (言) 語 (話) ‘word, speech, language’	pare ^o gau-kale	47. 話ス	pare ^o gau, pare ^o gau käle
56. 虚言 ‘lie (tell a lie), deceive’	babariak	62. 嘘	babāriak
57. 入墨 ‘tattoo’	patassi	54. 写ス, 書ク, イレズ ミ	pattashi
58. 病 ‘sick’	minarox	30. 痛イ, 病氣	mināroho
59. 痛 ‘pain’	minarox	30. 痛イ, 病氣	mināroho
60. 尿 (尿, 屁), 大便, 小 ‘excrement, urine, breake wind’	kamuchi, barebu (尿)	156. 大便, 放屁 320. 小便	kumuchi barebu
61. 死 ‘die’	mafukin	174. 死	mafukin
65. 日 ‘sun’	goagi, babi (1 日)	174. 太陽	goagi
66. 月 ‘moon’	edasi	173. 月	ēdasi
68. 雲 ‘cloud’	rurun	379. 霧, モヤ, 雲	ru ^o lun
69. 雨 ‘rain’	kumuzox	3. 雨, 雨降ル	kumuzoho
70. 風 ‘wind’	ma ^o gahui	189. 風, 風吹ク	ma ^o gāfui
73. 昼 ‘day time’	arian	162. 晝	arian
75. 朝 ‘morning’	barebu, barebuhale	161. 朝	barebu, barebu hāle
76. 午時 (昼) ‘noon’	arian	162. 晝	arian
77. 夕 (夜) ‘evening’	kaaman	163. 夜	kaaman
78. 一昨日 ‘day before yesterday’	tshohan (前日)	401. 前日	tshōhan
79. 昨日 ‘yesterday’	chega	160. 昨日	chēga
80. 今日 ‘today’	sada	157. 今日, 今	sāda
81. 明日 ‘tomorrow’	tsaman	158. 明日	tsāman
82. 明後日 ‘day after tomorrow’	makax	159. 明後日	makaha
87. 火 ‘fire’	punnyak, pausa-punnyak (モヤス)	124. 火, 電 440. アカリヲツケヨ 425. 火ヲ燃ヤス	pūniak pausa pūniak pausa pūniak
88. 水 ‘water’	sia	164. 水	sia

89. 山 ‘mountain’	mabuyan, babuyan	168. 山	mabuyan, babuyan
90. 川 ‘river’	yayun, sepau (川原),	479. 川	yayun
	yayun funna (川口)	165. 川原	sēpau
		166. 川口	yayun hunna
91. 海 ‘sea’	cherung (池)	19. 池, 堀	chērun
93. 道 ‘road, way’	erru	170. 道	erru
95. 蟻 ‘ant’	da ^o gagi	253. 蟻	da ^o gāgi
96. 蟹 ‘crab’	kuzun (蝦)	266. 蝦	kuzun
97. 蛙 ‘frog’	patui	262. 蛙	pātui
98. 蠅 ‘fly’	dan ^o gau	258. 蠅	dāgau
99. 蚤 ‘flea’	tamakui	254. 蚤	tamakui
100. 虱 ‘louse’	kuhin, tsumiyake (南京虫)	255. 虱	kuhin
		256. 南京虫	tsumiyaka
101. 蚊 ‘mosquito’	kui	260. 蚊	kūi
102. 蛇 ‘snake’	iru	263. 蛇	iru
104. 卵 ‘egg’	barun	193. 卵	bārun
106. 熊 ‘bear’	sumai	280. 熊	sūmai
107. 牛 ‘bull, buffalo’	lappa, lappa-tana (赤牛), lappa-tama (牡牛), lappa- bubu (牝牛)	271. 牛, 水牛	lappa
		275. 赤牛	lappa tana
		273. 牡牛	lappa tama
		274. 牝牛	lappa bubu
108. 猫 ‘cat’	niao	368 猫	niau
109. 犬 ‘dog’	hurin	269. 犬	fūrin
110. 鹿 ‘deer’	kannox, kakannox	278. 鹿	kannoho, kakannoho
111. 羊 (山羊) ‘goat’	medishi	270. 羊, 山羊	mēdishi
113. 豹 (虎) ‘leopard’	dakaidshi, maina-dakai- dishi (豹皮)	281. 豹	dakaidisi
		282. 豹皮	maina dakaidisi
114. 猿 ‘monkey’	lunai	277. 猿	lunai
115. 山猪 ‘wild pig’	bauzak	279. 豚	bauzak
116. 猪, 豚 ‘pig’	babui	267. 豚	bābui
117. 肉 (猪肉) ‘pork, flesh of pig’	sedan	197. 肉	sēdan
118. 鼠 ‘rat’	olishi	276. 鼠	ōlishi
119. 魚 ‘fish’	tsurux	264. 魚類ノ総名, 蟹	tsuruh
120. 灰 ‘ashes’	kafurishi	111. 灰	kafurisi

121. 炭 ‘charcoal’	baga	112. 木炭	bäga
122. 金 ‘gold’	rabrappu (砂金) ³⁴⁹	---	
123. 銀 ‘silver’	pira	77. 銀貨, 幾何	pira
126. 石 ‘stone’	batunuf	128. 石	batsynuh
128. 砂 ‘sand’	raburappu (砂金)	---	
129. 塩 ‘salt’	chimo, timo (?)	196. 塩	chimo
131. 豆 ‘beans’	aidan, bairox (緑豆, 赤豆), gesan (烏豆, 肉豆, フマメ), tarabush (土豆)	235. 豆 227. 小豆 228. 黒豆 236. 落花生	aidan bairooha gëtsan tarabush
132. 芭蕉 ‘banana’	bunebun	365. 芭蕉ノ実	bunebun
133. 稻 (粟) ‘rice (middle) in the stalk’	padai	240. 稻, 穂, モミ	pä dai
134. 米 ‘rice’	bagax, btsubura (糯)	200. 米 230. 餅米	bāgaha tsubura
135. 飯 ‘cooked rice’	edau, papurai (炊)	199. 飯	ēdau
136. 食飯 ‘eat rice’	makan-edau	421. 飯ヲ食フ	mākan ēdau
137. 柑 ‘orange, etc.’	Madu, tarahai (柚), kutti (?仔)	234. 蜜柑 400. 柚子 395. 青キ「いゝり」ノ実ノ如キ者	mydu tarahai kutti
138. 甘 薯 ‘sweet potato’	buna, sari (芋)	231. 蕃薯 515. 芋	buna säri
139. 砂糖 (甘蔗) ‘sugar (cane)’	kanchia	462. 砂トオ	kanchia
140. 酒 ‘spirit, wine’	senau	417. 酒	sēnau
141. 煙草 ‘tabacco’	tamako, tamako-rubui	141. 煙草 142. 煙草入レ	tamako tamako rubui
143. 煙 管 ‘tobacco pipe’	pukan	143. 煙管	pukan
145. 苧麻 ‘hemp’	nukkax, vairox (麻)	397. 苧 396. 藤	nukkaha wairoho
146. 菜 ‘vegetables’	rama, sama (白菜), papurai-dama (煮菜)	198. 菜 229. 白菜	rāma säma

³⁴⁹ 小川 (2006) に記されたこの語は荒尾 (1898) には見当たらない。

		472. 菜ヲ煮ル	papurai dāma
148. 木(材) ‘tree, wood’	funni (木, 薪)	241. 薪	funni
149. 竹 ‘bamboo’	batakan	237. 竹	batakan
150. 樹枝 ‘branch’	banni	248. 枝	banni
151. 葉 ‘leaf’	sudu	239. 稻, 藁, 葉	sudu
153. 花 ‘flower’	paheppa	461. 花	paheppa
155. 弓 ‘bow’	kiyon pan (土語?)	118. 弓	kiyon pan
156. 矢 ‘arrow’	kinongche (土語)	119. 矢	kiyon chē
157. 銃 ‘gun, rifle, musket’	chebuharung	58. 発砲スル	chebu harun
159 鎗 ‘spear’	mara ^a gan	116. 鎗	mara ^a gan
160. 刀 ‘sword’	simada	117. 刀	simada
161. 小刀 ‘pocket knife (農具)’	yayu	125. 剃頭刀, 小刀	yayū
162. 錢 ‘money’	habagan	78. 台湾錢	habāgan
163. 笛 ‘flute’	pina (土語), tubu 嘴琴	120. 笛	pinā
		144. 嘴琴	tūbu
164. 鍋 ‘pot’	shufa (銅ナベ), ribau (鉄ナベ), kau (土ナベ)	138. 銅鍋, 洗面器	shūpā
		140. 鉄鍋	ribau
		139. 土鍋	kaū
165. 瓶カメ ‘jug, jar, pot’	tsuki, sarau (カメ), tumun (水カメ), shupan (土瓶)	213. 酒瓶	tsuki
		136. 甕, 酒甕	sārau
		137. 水甕	tūmun
167. 家 ‘house’	sapa	149. 家	sāpa
169. 屋根 ‘roof’	sapa-habarau	155. 屋根	sāpa-habārau
170. 蕃布 ‘cloth’	tsapan (蕃布), habu (褌), bukuy-para (胸布), tawak (頭布), serun (ペキ), labui (白布), larisi (赤布), lawa barai (褐布), lawa-ukin (黒布), karabui (模様布)	85. 蕃布	tsāpan
		113. 褌	habu
		216. 方布の蕃衣	para, bukuy para
		219. 頭ニ捲ク布	tawak
		383. 赤キキレ	serun
		490. 白布	lābui
		491. 赤布	lārisi
		492. 褐布	lawā bārai
		493. 黒布	lawā ukin
		494. 模様付布	karabui
171. 衣 ‘clothes’	chinemu (霧社), rukusi	206. 着物	chinemu (霧社ノ語)

	(万社), habu (禪), baratan (卓卡), sara (タ ロク), pakusan-lukusi (着衣)	207. 着物 113. 帯, 禪 208. 着物 209. 着物 438. 着物ヲ着ル	rukushi (万社ノ語) habu baratan (タウツア社ノ 語) sara (トロツク社ノ語) pakusun luksu
172. 帽, 頭飾 ‘cap, hat’	bunnax	222. 帽子	bunnaha
173. 頸輪, 頸飾 ‘ring (neck)’	otsubin	224. 頸輪	ōtsūbiu
174. 手輪, 腕輪 ‘ring (arm), bracelet’	kanawa lemur (指輪)	218. 腕輪 217. 指輪	kanawa lēmur
175. 耳輪 (耳竹), 耳飾 ‘ring (ear)’	tarau (総称), maliku (直 角)	215. 耳飾の総称 221. 女ノ耳ニ垂レタ ル者	tarau maliku
176. 履物, 鞋 ‘shoes (straw)’	yami (万社), sapish (襪)	214. 下駄, 草履 338. 襪	yami (Speech of Banhowan) sapishi
177. 網袋 (網) ‘bag’	taukan, karai	223. 網袋 358. 網袋	taukan karai
178. 皆 ‘all’	kana	66. 皆の, 凡テ	kana
180. 少 ‘few’	chekoax	21. 些少, 小サキ	chēkoaha
181. 好 ‘good’	maro	9. 善, 美, all right	maro
182. 歹, 悪 ‘bad’	nakka	8. 悪, 醜	nakka
183. 大 ‘large’	paru, egu-paru	23. 大ナル 7. ヨリ大	paru egu paru
184. 小 ‘small’	chekoax	21. 些少, 小サキ	chēkoaha
185. 苦 ‘bitter’	ma ^a gehui	10. 酸イ, 苦イ, 辛イ, 渋イ, 鹹イ	ma ^a ehui, ma ^a ehuiwa
186. 甘 ‘sweet’	sasebush, maro-pukun (好 食)	244. 甘イ 180. 御馳走	sasēbush maro pukun
187. 酸 ‘sour’	ma ^a gehui	10. 酸イ, 苦イ, 辛イ, 渋イ, 鹹イ	ma ^a ehui, ma ^a ehuiwa
188. 鹹 ‘salty, taste like salt’	ma ^a gehui	10. 酸イ, 苦イ, 辛イ, 渋イ, 鹹イ	ma ^a ehui, ma ^a ehuiwa
189. 寒 ‘cold’	masekui	27. 寒イ	masekui

191. 熱, 暑 ‘hot’	materox, macherox	28. 熱イ, 暑イ	machēroho
194. 遅 ‘slow’	matarā häle	4. 徐々ニ	matarā häle
195. 速 ‘quick’	hale	5. 早く, 早く来レ	ägoa häle
196. 長 ‘long’	taeya	17. 遠イ, 長イ	taeya
197. 短 ‘short’	rarin	18. 近イ, 短イ	däarin, rārin
201. 赤 ‘red’	tanna, chepo (褐)	26. 赤イ, 血	tanna
		25. 褐色	chēpo
202. 白 ‘white’	rabu	24. 白イ	rābu
205. 軽 ‘light (not heavy)’	rauка, dauка	15. 軽イ	rauка, dauка
206. 重 ‘heavy’	matsairin	16. 重イ	matsairin
207. 高 ‘high’	habalau	155. 高イ	habārau
208. 低 ‘low’	dakahayan (低地)	20. 低イ, 地	dakahāyan
209. 遠 ‘far, distant’	taeya	17. 遠イ, 長イ	taeya
210. 近 ‘near’	rarin, darin	18. 近イ, 短イ	däarin, rārin
213. 有 ‘to be, exist’	gaga	88. 有ル	gāga
214. 無 ‘not to be, is not’	okka	87. 無イ	okka
215. 来 ‘come’	agoa, eda	89. 来イ, 来ル, 来タ	ägoa
		164. 来ル	eda
216. 去 ‘to go’	maussa, ussa, maha	29. 行ク	ussa, mausa, maha
218. 走 ‘run’	wada	86. 走ル	wada
219. 飲 ‘drink’	mima	204. 飲ム	mima
220. 食 ‘eat’	makan, ekkān, pukun	70. 食フ, 咬ム	mākan
		423. 食	pukun
		454. 食フ	ekkan
221. 坐 ‘sit’	tareon	37. 坐ル, 屈ム	tareon
222. 謡 ‘to sing’	maowashi	107. 唱歌, 歌フ	maowashi
223. 躍 ‘to dance’	kimeki	106. 躍リ, 踊ル	kimeki
224. 眠 ‘sleep’	matake, take	39. 眠ル	matake, take
171. 見 ‘see’	kimita	90. 見ル	kimita
228. 泣 ‘weep’	maḡelisi	436. 泣ク	maḡēlisi
229. 笑 ‘laugh’	mafulissi	49. 喜ブ, 笑フ	maḡulissi
230. 射 (銃) ‘to shoot a gun’	chebu-harun (発砲)	58. 発砲スル	chebu harun
231. 狩 (捕) ‘to hunt’	papurin, sikari (猟)	108. 猟	papurin

		109. 漁	sikari
232. 打 ‘strike’	maebu, baebu, chinbabu	33. 打ツ	maebu, baebu
		55. 打ツ	chi ^o bābu
233. 殺 (斬) ‘to kill’	pakkun (斬), lipak (殺), lippak (殺)	74. 斬ル	lipak, pakkun
234. 好 (コノム), 愛 (欲), 喜 ‘like to do, joyful’	kufun	53. 愛スル, 好ム	kufun
235. 怒 ‘angry’	maseyan	45. 怒ル	maseyan
236. 與 ‘to give’	bekki, pagesa (與へ), taeta (貸)	81. 與ヘル	bekki
		542. 与エヨ	pagesa
		498. 貸ス	taeta
237. 知 ‘to know’	karaun, kera, makera	50. 知ル	karaun, makera, kera
238. 我 ‘I’	yakko	412. 吾	yakko
240. 你 ‘you’	ishu	91. オマへ, オマへ等	ish
241. 你等 ‘you’	yamu	410. 汝ラ	yamu
242. 彼 ‘he’ 彼処	ish, hish (ソコ)	93. 其處, ソレ, ソレ 等, 其方	hish
244. 此 ‘this, here’	hinni (ココ)	92. 此処, コレ, コレ 等, 此方	hinni
245. 誰 ‘who’	ima	94. 何 (姓名ヲ問フ)	ima
246. 何 ‘how much, what, why’	maanu	95. 何, 何故	maanu
247. 何時 ‘when’	kinoan, sinoan	484. イツ	kinoan
		467. イツ	sinoan
248. 何処 ‘where’	inu	96. 何處	inu
250. 否, 不 ‘no’	iya, ini	68. 不可	iya
		51. 不	inni
251. 臺灣人, 漢人 ‘Formosan, Chinese’	pamukan, panimukan, baanux (臺灣), tarro (清 國人), tana-tounux (紅 毛, 西洋人)	99. 台湾人 389. 台湾 100. 清国人 101. 日本人	pamukan, panimukan baānuh tamō tanna tsunuh
252. 生番 ‘aborigines’	aran, tebu (霧社), pa ^a gawan (万社), katina (南蕃)	98. 生蕃人 363. 霧社蕃 364. 万社蕃 399. 南蕃人	aran tebu pa ^a gawan katina

253. 熟番 civilized aborigines'	'half- kavu	97. 熟蕃人	kabu
254. 一 'one'	win, ke ^g gan-labi (一日)	338. 1 475. 一 475. 一晚	win ken ^g gan ken ^g gan läbi
255. 二 'two'	daha	339. 2	daha
256. 三 'three'	tel	340. 3	tel
257. 四 'four'	seppa	341. 4	seppa
258. 五 'five'	rima	342. 5	rinma
259. 六 'six'	matel	343. 6	matel
260. 七 'seven'	mapit	344. 7	mapit
261. 八 'eight'	maseppa	345. 8	maseppa
262. 九 'nine'	magari	346. 9	magari
263. 十 'ten'	mahol	347. 1 0	mahal
205. 十一 'eleven'	mahol-ke	347. 1 1	mahan ke
268. 二十 'twenty'	maposan	349. 2 0	maposan
270. 三十 'thirty'	mateln	350. 3 0	mateln
272. 四十 'forty'	masipad	351. 4 0	masipad
274. 五十 'fifty'	marimma	352. 5 0	marinma
276. 六十 'sixty'	matel-makaten/mahadan	353. 6 0	matel makaten
278. 七十 'seventy'	mapit-mahadan	354. 7 0	mapit mahadan
280. 八十 'eighty'	maseppa-mahadan	355. 8 0	maseppa mahadan
282. 九十 'ninety'	magari-mahadan	356. 9 0	magari mahadan
284. 百 'hundred'	kekka-bakui	357. 1 0 0	kekka bakkui

上の表に見られるように、小川の引用した資料「23a 荒井」のデータは荒尾 (1898) のデータにほぼ一致する。これら二つの資料は、誤ってパラン方言以外の語彙を挙げた箇所まで一致する。

10.2 セデック語パラン方言以外の語彙を挙げた項目の一致

荒尾 (1898) のセデック語パラン方言語彙集には少数ではあるが閩南語、アタヤル語、パゼツヘ語が混入している。荒尾が記した、これらセデック語パラン方言以外の語彙と同一の語彙が小川の「23a 荒井」にも挙げられている。これらの語彙を対照したものを表 36 に示した。語彙の後の括弧は項目番号を示す。「弓、矢、笛」の項目において、小川はそれらが閩南語の形式であることを認識しており、語彙の後に土語（閩南語を指す）と注釈を書き入れている。

表 36 荒尾 (1898) と「23a 荒井」(小川 2006) におけるパラン方言以外の語彙

荒尾	小川「23a 荒井」	注釈	言語の特定
kiyon pan (155)	kiyon pan (土語 ?) (118)	「弓」	閩南語
kiyon chē (156)	kiyohche (土語) (119)	「矢」	閩南語
pinā (163)	pina (土語) (120)	「笛」	閩南語
rābu (24)	rabu (202)	「白」	アタヤル語
ma ^g ēlisi (436)	ma ^g elisi (172)	「泣」	アタヤル語
bāgaha (200)	bagax (134)	「米」	セデック語トゥルク方言
goagi (174)	goagi (64)	「日」	アタヤル語
kuzun (266)	kuzun (96)	「蝦」	パゼツヘ語
dāgau (258)	dan ^g au (98)	「蠅」	パゼツヘ語
aidan (235)	aidan (131)	「豆」	パゼツヘ語

10.3 小川が加えた「23a 荒井」への変更

小川が加えた修正のひとつは *ā*, *ā̃*, *ḡ* などに付された発音区別符号を取り除いたことである。取り除いても影響を与えない、余分な情報と判断したのである。しかし、荒尾の符号には強勢の位置を表す、[a] と [e] の区別、[e] と [i] の区別を表すなどの機能が見られた。そのため小川 (2006) の「23a 荒井」を参照する際は、原典である荒尾 (1898) をも併せて参照することが必要となる。

もうひとつの修正は、荒尾の語彙集において、語末が *VhV* であり、さらに *V* が同一母音である場合に見られる。小川は「23a 荒井」のデータから最終母音を取り除いて示している。このような語彙は 10 語見られた。また、小川はこのような語において、荒尾の *h* を *x* に置き換えている。現代パラン方言では、語末には *x* と *h* の二種類の音が現れる。表 37 では *x* で現れるか、*h* で現れるかで分類して示す。

表 37 荒尾の語末表記 *VhV* から *Vx* への修正

現代パラン方言	荒尾	小川「23a 荒井」	注釈
<i>sumunox</i>	sinūnoho (305)	sinunox (2)	「髪」
<i>munarox</i>	mināroho (30)	minarox (58)	「痛い」
<i>qumuyox</i>	kumuzoho (3)	kumuzox (69)	「雨が降る」
<i>ruqemox</i>	kannoho, kakannoho (278)	kannox, kakannox (110)	「鹿」
<i>quvarox</i>	wairoho (396)	vairox (145)	「藤」
<i>mutilox</i>	machēroho (28)	macherox (191)	「熱、暑」
<i>nunuh</i>	nūnoho (324)	nunox (24)	「乳」
<i>nuqah</i>	nukkaha (397)	nukkax (145)	「麻」
<i>bunuh</i>	bunnaha (222)	bunnax (172)	「帽」
<i>tikuh</i>	chēkoaha (21)	chekoax (184)	「小」

これら以外に、小川が荒尾のデータ中の分節音に対し変更を加えた項目を表 38 に示す。

表 38 分節音の変更

	現代パラン方言	荒尾	小川「23a 荒尾」	注釈
i	<i>tunux</i>	ts ^h un ^h (334)	tunux (3)	「頭」
ii	<i>qucurux</i>	ts ^h ur ^h (264)	tsurux (119)	「魚」
iii	<i>butumux</i>	bats ^h un ^h (128)	batuhuf (126)	「石」
iv	<i>daji</i>	da ^h gā (105)	da ^h ge (53)	「朋友」
v	<i>gucihuj</i>	ch ^h erun (19)	cherung (91)	「海」
vi	<i>pudahuj</i>	pudahau (371)	pudahan (13)	「唇」
vii	---	b ^h ukui para (216)	bukuy-para (170)	「一種の布」

表中 (i-ii) において、荒尾の語末 *h* を小川は *x* に変更した。項目 (iii) では荒尾の語末 *h* を *f* に変更しているが、現代パラン方言では語末 *x* に相当する。また (i-iii) において荒尾の *ts* を小川は *t* に変更している。現代パラン方言でもこれらはすべて *t* である。項目 (iv) では荒尾の語末 *ā* を *e* に変更している。現代パラン方言では *i* であり、小川の表記の方が音的に近い。項目 (v) では荒尾の語末 *n* を小川は *ng* に変更している。現代パラン方言でも *ng* である。項目 (vi) では荒尾の語末 *u* を *n* に変更している。現代パラン方言では *ŋ* であり、小川の変更した音に近い。項目 (vii) の荒尾の *bukui* について、小川は語末の二重母音の後部要素を *i* から *y* に書き換えている。しかしこの語は、表 35 中の小川による項目番号 23 と 27 においても見られるが、ここでは荒尾の表記を変更せずに *i* を用い、*bukui* としている。総じてこれら小川の変更は、より正確な音声表記へ修正を加えたものである。

その他にみられた表記上の差異を表 39 に示す。これらは、小川がより正確な音声を表すための変更とは考えにくいものである。また小川 (2006) における誤植が疑われる項目も併せて表に示す。

表 39 荒尾 (1898) と「23a 荒尾」の表記上の差異と「23a 荒尾」の誤植

現代パラン方言	荒尾	「23a 荒尾」	注釈	補足
<i>beras</i>	b ^h erasi (330)	berashi (8)	「耳」	si と shi
<i>patis</i>	pattashi (54)	patassi (57)	「入墨」	shi と ssi, tt と t
--- ³⁵⁰	rulun (379)	rurun (68)	「雲」	l と r
<i>ŋiyo</i>	n ^h iau (368)	n ^h iao (108)	「猫」	u と o
<i>gicanj</i>	g ^h etsan (228)	gesan (131)	「豆の一種」	ts と s
<i>mudu</i>	m ^h udu (234)	madu (137)	「柑」	u と a
<i>quvarux</i>	wairoho (396)	vairox (145)	「藤」	w と v
<i>lukus</i>	rukushi (207)	rukusi (171)	「衣」	shi と si

³⁵⁰ 早期パラン方言には *ruluh* が見られたが、現代では失われている。

<i>sapic</i>	sapishi (338)	sapish (176)	「履物」	shi と sh
<i>hubaro</i>	habārau (115)	habalau (207)	「高」	r と l
<i>muriman</i>	marinma (352)	marimma (274)	「五十」	n と m
<i>cumiq</i>	tsumiyaka (256)	tsumiyake (100)	「虱」	a と e
<i>rabi</i>	rābi (474), lābi (476)	babi (65)	「夜」	語頭 r/l を b と記入
<i>mukaxa</i>	makaha (159)	makax (251)	「明後日」	語末 a を記入していない
<i>tubula</i>	tsubura (230)	btsubura (134)	「米の一種」	語頭 b を余分に記入
--- <i>biyu</i>	ōtsūbiu (224)	otsubin (173)	「頸輪」	語末 u を n と記入

ここまで小川 (2006) の『臺灣蕃語蒐録』における「23a 荒井」と、荒尾 (1898) が同一資料であることを見た。小川は荒尾のデータに対し自身の解釈により修正などを加えている。ただしこの修正によって一部の母音の区別が失われることになった。また、多少の誤植も見受けられる。小川の「23a 荒井」を参照する際は、原典の荒尾 (1898) も併せて参照することが肝要である。

11. おわりに

およそ 120 年前に荒尾 (1898) が著わしたセデック語パラン方言の語彙集に対し、注釈を加え、現代パラン方言との比較を試みた。荒尾の調査協力者の李阿輝はセデック語の通訳ではあったものの、セデック語の母語話者ではなかった。李のセデック語は幼少期に数か月間、パラン集落で過ごした時の記憶に基づくものだと考えられる。李がセデック語を完全に把握するには至らなかったことが今回の分析を通して見えてくる。

形態的に言って本来許容されない語形成の語が見られた。本来なら一語で言い表せる語を説明的な表現で補っている箇所も見られた。語彙集には閩南語の他、セデック語トゥルク方言、アタヤル語の混入が見られた。さらにバゼッヘ語が混入している例もあることから調査協力者の李阿輝の父親はバゼッヘ族だったことが推察される³⁵¹。また、音韻面では母語である閩南語の影響を受けていることも多く、ほかにも多少のアタヤル語の影響が見られた。また荒尾自身が、*r* と *l* を混同する、*k* と *q* を区別しないなど、日本語母語話者としての音韻の影響を受けた表記を用いていた。6.7 節から 9 節まで議論した、語彙的・形態的・意味的・統語的な文法面においては、文法性がより複雑になるにつれて精度が低くなることもわかった。さらに、閩南語に影響を窺わせる特徴が多々見られた。

しかし、個々の語のレベルにおいては、ある程度の正確性で当時のセデック語パラン方言を伝えており、セデック語の資料の中でも最も早期の、しかも豊富なデータを提供している。そのため荒尾の語彙集の価値が損なわれるわけではない。荒尾の調査協力者の特性のため、多少の非母語話者のデー

³⁵¹ このように調査協力者自身の母語である平埔族の言語がセデック語のデータに混じる例は Bullock (1874) にも見られた。Bullock 一行を霧社まで案内したのは埔里在住の Atun という平埔族の老人だったそうだが (Steele 2009: 73)、彼がセデック語に長けている状況が描かれており、Bullock 一行はこの老人からセデック語の単語を調査したのではないかと思われる。というのもセデック語のデータの中にタオカス語と思われる単語が二語 (*ramut* 「全て」と *sasainad* 「稻妻」) 含まれていたからであり (Ochiai 2016: 316–317)、Atun はタオカス族だったと推察される。

タが混じっているとしても、荒尾の端書にあるように『全然誤謬なき者とは断言するを憚れども亦 Great Mistakes なし』と言うことができる。

本稿は荒尾の言葉『後の北蕃語集に對する者願わくは阿輝の末路を想い 軽々に看過するなくんば幸なり』を受け、筆者が現時点でできる限りの分析を尽したつもりである。本稿が今後、セデック語並びに台湾オーストロネシア諸語研究の発展に資するところとなれば幸いである。

参考文献

- 赤間富三郎 (1932) 『セーダツカ蕃語集』 臺中市: 臺中州警務部。
- 荒尾英馬 (1898) 『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』 [臺灣大學深化臺灣研究核心典藏數位計畫・(dtrap.lib.ntu.edu.tw) において公開] (最終閲覧日 2018/12/28)。
- Asai, Erin (1953) *The Sedik Language of Formosa*. Kanazawa: Cercle Linguistique de Kanazawa.
- 浅井恵倫 (1954) 「台湾言語学はどこまで進んだか?」『民族学研究』18: 12–19.
- Blust, Robert (1999) Subgrouping, Circularity and Extinction: Some Issues in Austronesian Comparative Linguistics. In: Elizabeth Zeintoun and Paul Jen-kuei Li (eds.) *Selected Papers from the Eighth International Conference on Austronesian Linguistics*, 31–94. Taipei: Institute of Linguistics (Preparatory Office), Academia Sinica.
- Blust, Robert (2013) *The Austronesian languages*. Canberra: Australian National University, Research School of Pacific and Asian Studies.
- Bullock, Thomas L. (1874) Formosan dialects and their connection with the Malay. *China Review: Or Notes and Queries on the Far East* 3: 38–46.
- Chappell, Hilary (2018) A sketch of Southern Min grammar. In: Alice Vittrant and Justin Watkins (eds.) *The Mainland Southeast Asia linguistic area*, 176–233. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 陳傑惠 (1996) 「賽德克語中原地區方言否定詞初探」國立清華大學碩士論文。
- Egerod, Søren (1980) *Atayal-English dictionary*. London: Curzon.
- 淵脇英雄 (1938) 「伊能文庫に就いて」『愛書』10: 187–196.
- Guérin, M. (1868) Du dialecte Tayal ou aborigène de l'île Formose. *Bulletin de la Société de Géographie* 16: 166–495.
- 伊能嘉矩 (1908) 「臺灣土蕃の土地命名に就き」『東京人類學雜誌』12: 360–366.
- 伊能嘉矩 (1996) 『台灣踏查日記<上>』楊南郡譯. 台北: 遠流。
- 伊能嘉矩 (1998) 『伊能嘉矩: 蕃語調查ノート』森口恒一編. 東京: 日本順益台灣原住民研究会。
- 黃美金・吳新生 (2018) 『泰雅語語法概論』第二版. 新北市: 原住民族委員會。
- 黃美金・吳新生 (編) (2018) 『原住民族語言詞典泰雅語詞典』臺北: 原住民族委員會. <https://e-dictionary.apc.gov.tw> (最終閲覧日 2020/5/9)。
- 李恒全 (2007) 「台北帝國大學設立計畫案に関する一考察: 幣原坦の設立構想を中心に」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』1: 45–64.
- Li, Paul Jen-kuei (1981) Reconstruction of Proto-Atayalic phonology. *Bulletin of the Institute of History and*

Philology, Academia Sinica 52 (2) : 235–301.

Li, Paul Jen-kuei and Shigeru Tsuchida (2001) *Pazih dictionary*. Taipei: Institute of Linguistics (Preparatory Office), Academia Sinica.

丸井圭次郎 (1914) 『太魯閣蕃語集』 臺北: 臺灣總督府民政部蕃務本署.

三尾裕子 (2009) 『『蕃語編纂方針』から見た日本初期における台湾原住民調査』『日本台湾学会報』 11: 155–175.

三尾裕子・豊島正之 (編) (2005) 『小川尚義・浅井恵倫台湾資料研究』 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

森丑之助 (1917) 『臺灣蕃族志』 1 卷. 台北: 臨時臺灣舊慣調査會.

森丑之助 (1910a) 『太魯閣蕃語集』 臺北: 臺灣總督府蕃務本署.

森丑之助 (1910b) 『埔里社方面トルコ蕃語集』 臺北: 臺灣總督府蕃務本署.

落合いずみ (2015) 「セデック語・パラン方言の二重母音について」『日本言語学会 150 回大会予稿集』 392–397. 京都: 日本言語学会.

Ochiai, Izumi (2016) Bu-hwan vocabulary recorded in 1874: Comparison with Seediq dialects. *Asian and African Languages and Linguistics* 10: 287–324.

Ochiai, Izumi (2018) Ryuzo Torii's Paran Seediq glossary (1900) : Annotation and observation, *UST Working Papers in Linguistics* 10: 113–143. Hsinchu: Graduate Institute of Linguistics, National Tsing Hua University.

Ochiai, Izumi (2018) Historical reduplication in Seediq. *Kyoto University Linguistic Research* 37:23–40.

Ochiai, Izumi (2019) “Morrow” in Seediq. *The Kobe Gaidai ronso* 70 (1) : 131–144.

落合いずみ (2016a) 「セデック語・パラン方言の文法記述と非意志性接頭辞の比較言語学的研究」 京都大学博士論文.

落合いずみ (2016b) 『『臺灣蕃語蒐録』のシャボガラと眉蕃—セデック語ではなくアタヤル語としての分類—』『東京大学言語学論集』 37: 171–190.

小川尚義 (1931) 『アタヤル語集』 台北: 台湾総督府.

小川尚義 (1939) 「時に関する高砂族の語」『民族学研究』 5 (1) : 1–15.

小川尚義 (2006) 『臺灣蕃語蒐録』 [李壬癸・豊島正之 (編)]. 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

小川尚義 (年代不明) Se'ediq 1. 手稿.

小川尚義 (年代不明) Se'ediq 2. 手稿.

小川尚義 (年代不明) タロコ語集. 手稿.

小川尚義・浅井恵倫 (1935) 『原語による台湾高砂族伝説集』 台北: 台北帝国大学言語学研究室.

Pecoraro, Ferdinando (1977) *Essai de Dictionnaire Taroko-Français*. Paris: Société pour l'Etude et la Connaissance du Monde Insulindien.

佐山融吉 (1983 [1917]) 『蕃族調査報告書: 紗績族調査報告書前篇 (霧社蕃・韃佗蕃・卓卓蕃)・後篇 (太魯閣蕃・韃賽蕃・木瓜蕃)』 台北: 南天書局.

Steere, Joseph B. (2009) 『福爾摩沙及其住民: 19 世紀美國博物學家的台灣調查筆記』 *Formosa and Its*

Inhabitants. 林弘宣譯 臺北: 前衛.

曹逢甫・姚榮松・張屏生 (編) (2011) 『臺灣閩南語常用詞辭典』 臺北: 中華民國教育部.

鳥居龍藏 (1900) 「台湾埔里社霧社蕃の言語 (東部有黥面蕃語)」 『東京人類学会雑誌』 176: 71–74, 177: 100–104.

鳥居龍藏 (1901a) 「台湾埔里社霧社蕃の言語 (東部有黥面蕃語)」 『東京人類学会雑誌』 178: 133–137.

鳥居龍藏 (1901b) 「埔里社山上万大社の番人は東部黥面蕃にあらず」 『東京人類学会雑誌』 183: 373–377.

Rakaw, Lowsi, Jiru Haruq, Yudaw Dangaw, Yuki Lowsing, Tudaw Pisaw, and Iyuq Ciyang (編) (2006) 『太魯閣族語簡易字典』 秀林鄉: 秀林鄉公所.

Wolff, John (2010) *Proto-Austronesian Phonology with Glossary*. Ithaka: Southeast Asia Program Publications, Cornell University.

アイヌ・先住民族言語アーカイブプロジェクト報告書

十九世紀末のセデック語資料『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』
— 一百余年後の言語学的考察 —

2020年11月30日発行

著 者 落合いずみ

発 行 〒060-0808 札幌市北区北8条西6丁目
北海道大学アイヌ・先住民研究センター

印刷・製本 柏楊印刷(株)

